

新庄地区農地中間管理機構関連農地整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 1

本庄川流域条里制遺跡  
新庄寺ノ前遺跡  
黒添遺跡

令和5（2023）年3月

鳥根県松江市  
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団



新庄地区農地中間管理機構関連農地整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 1

本庄川流域条里制遺跡  
新庄寺ノ前遺跡  
黒添遺跡

令和5（2023）年3月

鳥根県松江市  
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団



## 例 言

- 本書は、平成 30 年度、令和元～3 年度に実施した新庄地区農地中間管理機構関連農地整備事業に伴う、新庄寺ノ前遺跡、本庄川流域条里制遺跡、黒添遺跡の成果をとりまとめたものである。なお、同事業で調査した新庄谷内遺跡、ドロケ遺跡は、別途報告書を刊行する予定である。
- 本書で報告する発掘調査は、島根県松江県土整備事務所から松江市が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財團が委託を受けて実施した。本報告書は、松江市の指示のもとに公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財團が作成した。
- 調査遺跡の名称、所在地、開発面積、調査面積、調査期間、報告書の刊行(予定)は以下のとおりである。

遺跡名	所在地	開発面積	調査面積	調査期間	報告書
ほんじょうかわりうらきじょうかせいかき 本庄川流域条里制遺跡	松江市新庄村 304 番地外	46.0ha	477 m <sup>2</sup>	R 2 年 10 月 20 日 ～ R 2 年 12 月 22 日	本報告
しんじょうでらのまえいせき 新庄寺ノ前遺跡	松江市新庄村 525 番地外		304 m <sup>2</sup>	R 2 年 6 月 29 日 ～ R 2 年 8 月 27 日	本報告
くろぞえいせき 黒添遺跡	松江市新庄村 239 番地外		570 m <sup>2</sup>	R 3 年 9 月 13 日 ～ R 3 年 11 月 26 日	本報告
しんじょうたにうちいせき 新庄谷内遺跡	松江市新庄村 815-1 番地外		1,537 m <sup>2</sup>	R 元年 9 月 12 日 ～ R 2 年 1 月 31 日	R5 年度 刊行予定
どろけいせき ドロケ遺跡	松江市新庄村 806 番地外		1,380 m <sup>2</sup>	1 区 : H 30 年 11 月 27 日 ～ H 31 年 3 月 31 日 2 区 : R 元年 5 月 28 日 ～ R 元年 8 月 27 日	R5 年度 刊行予定

- 報告書作成期間は、令和 4 年 4 月 1 日～令和 5 年 3 月 31 日である。

- 現地調査と報告書作成の組織は下記のとおりである。

依頼者 島根県松江県土整備事務所

主体者 松江市 市長 松浦正敬(～令和 3 年 4 月 23 日)

〃 上定昭仁(令和 3 年 4 月 24 日～)

【新庄寺ノ前遺跡・本庄川流域条里制遺跡現地調査】令和 2 年度

事務局 松江市歴史まちづくり部 部長 須山敏之、次長 松尾純一、次長 稲田 信

まちづくり文化財課 課長 飯塙康行、埋蔵文化財調査室 室長 尾添和人

調査係 係長 川上昭一、主幹 川西学、嘱託 門脇誠也

調査指導 島根県教育庁文化財課 文化財保護主任 稲田陽介

国立大学法人島根大学法文学部 教授 大橋泰夫

実施者 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財團 理事長 星野芳伸、課長 宮本英樹

係長 小山泰生、調査員 徳永桃代(担当者)、嘱託 木村由希江

【黒添遺跡現地調査】令和3年度

事務局 松江市歴史まちづくり部 部長 須山敏之(～5/31)、松尾純一(6/1～)

〃 次長 松尾純一(～5/31)、井上雅雄(6/1～)

まちづくり文化財課 課長 尾添和人、埋蔵文化財調査室 室長 川上昭一

調査係 係長 川西学、嘱託 門脇誠也、文化財総合コーディネーター 丹羽野裕

調査指導 島根県教育庁文化財課 企画員 稲田陽介

鹿島歴史民俗資料館 館長 赤澤秀則

埋蔵文化財調査センター 主任主事 柳浦俊一

実施者 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 理事長 星野芳伸、課長 宮本英樹

係長 小山泰生、調査員 廣濱貴子(担当者)、嘱託 木村由希江、嘱託 建神結香子

【報告書作成業務】令和4年度

事務局 松江市文化スポーツ部 部長 松尾純一、埋蔵文化財調査課 課長 川上昭一

発掘調査係 係長 徳永隆、学芸員 森山優花

文化財総合コーディネーター 丹羽野裕

実施者 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 理事長 星野芳伸、課長 宮本英樹

係長 小山泰生、調査員 江川幸子(担当者)、嘱託 北島和子

6. 本書に記載した遺物の復元、遺物実測図の作成・浄書、遺構図の浄書は以下の職員が担当した。

塩田陽子、坂本玲子

7. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は江川が撮影した。

8. 報告書の作成にあたっては、次の方々から御指導をいただいた。(五十音順、肩書は当時)

廣江耕史 島根県古代文化センター(特任研究員)

柳浦俊一 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター(主任主事)

西尾克己 松江市松江城・史料調査課(松江市史編纂松江城部会長)

9. 発掘調査に伴う自然科学分析は、文化財コンサルタント株式会社に委託し、その成果を第3章  
第3節、第4章第3節に掲載した。

10. 本書の執筆は、第1章を松江市文化スポーツ部 埋蔵文化財調査課 発掘調査係の徳永、第2～6  
章を江川が執筆した。編集は松江市埋蔵文化財調査課の協力を得て江川が担当した。

11. 本書に掲載した測量データ・遺物および実測図・写真等の資料は、松江市にて保管している。

12. 本書の編集にあたっては、DTP方式を採用した。

## 凡 例

- 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。

**SA**：柱列、柵      **SK**：土坑      **NR**：自然流路

- 本書で示す方位は平面直角座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した平面直角座標系第III系の値にもとづく。

- 本書で示す標高値はメートル表記である。標高値は東京湾平均海面 (T.P.) 値を使用した。

- 本書に掲載する土層は『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修) にしたがって記載した。

- 註は各章ごとに連番を振り、章末に配置した。引用・参考文献は文末に記載した。

- 本書に掲載した遺構平面図および土層断面図は各図に縮尺とスケールを配置した。遺物実測図の縮尺は以下の縮尺を原則としたが、これに従えないものにはその都度縮尺を配置した。

土器は1/3、石製品は1/2または1/3とし、木製品は大きさに応じて変倍している。断面は須恵器を黒色、その他を白ヌキで表現している。

- 土器編年については以下の書物を参考にした。

《弥生土器》 松本岩雄 1992「出雲・隱岐地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年山陽・山陰編』木耳社 (本文中では松本編年と記す)

《須恵器》 古墳時代：大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」島根考古学会誌第11集』島根考古学会 (本文中では大谷編年と記す)

古代：島根県教育委員会 2013『史跡出雲国府跡9-総括編-』(本文中では国府編年と記す)

《土師器》 中森祥・西尾克己・廣江耕史・守岡正司 2022「山陰」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

《白磁》 横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」九州歴史資料館『研究論集4』(本文中では大宰府編年と記す)

- 第2章 本庄川流域条里制遺跡では、現地調査時の調査区名等を変更して報告しているため、以下で対照表を掲載する。

〈対照表〉

調査区名		調査区名		調査区名	
(新)	(旧)	(新)	(旧)	(新)	(旧)
T-1	大畦畔調査区	T-4	大小畦畔調査区 南北トレンチ	3 区	1 区
T-2	大小畦畔調査区 北側大畦畔トレンチ	1 区	7 区	4 区	2 区
T-3	大小畦畔調査区 東西トレンチ	2 区	8 区	5 区	3 区

# 目 次

例 言  
凡 例

## 第 1 章 調査に至る経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯と経過 .....	1
------------------------	---

## 第 2 章 位置と環境

第 1 節 地理的環境 .....	5
第 2 節 歴史的環境 .....	6

## 第 3 章 本庄川流域条里制遺跡

第 1 節 調査の方法と概要 .....	10
第 2 節 調査成果 .....	13
第 3 節 自然科学分析 .....	24
第 4 節 結語 .....	27
遺物観察表 .....	28

## 第 4 章 新庄寺ノ前遺跡

第 1 節 調査の方法と概要 .....	29
第 2 節 調査成果 .....	32
第 3 節 自然科学分析 .....	40
第 4 節 結語 .....	48
遺物観察表 .....	49

## 第 5 章 黒添遺跡

第 1 節 調査区の設定 .....	51
第 2 節 調査の方法と概要 .....	54
第 3 節 基本層序 .....	58
第 4 節 遺構と遺物 .....	58
第 5 節 包含層出土遺物 .....	60
第 6 節 結語 .....	74
遺物観察表 .....	76

## 第 6 章 総括 .....

79

写 真 図 版

報 告 書 抄 錄

## 挿図目次

第 1 図	調査位置図	1	第 31 図	2 区土層図	34
第 2 図	工事に伴う試掘トレンチ配置図	2	第 32 図	2 区包含層上層出土遺物	35
第 3 図	本庄川流域条里制遺跡、新庄寺ノ前遺跡、 黒添遺跡位置図	4	第 33 図	2 区包含層下層出土遺物(1)	36
第 4 図	鳥根県・松江市位置図	5	第 34 図	2 区包含層下層出土遺物(2)	37
第 5 図	本庄川流域条里制遺跡、新庄寺ノ前遺跡、 黒添遺跡と周辺の遺跡	7	第 35 図	2 区基盤層直上出土遺物	39
第 6 図	本庄地区条里制復元図	9	第 36 図	調査区平面図及び試料採取地点	40
第 7 図	調査区位置図	11	第 37 図	試料採取地点断面図(花粉分析試料採取位置)	41
第 8 図	T-1 平面図・断面図	13	第 38 図	花粉ダイアグラム	42
第 9 図	T-1 出土遺物	14	第 39 図	植物珪酸体ダイアグラム	43
第 10 図	T-2 平面図・断面図	15	第 40 図	調査範囲確定トレンチ及びグリッド配置図	51
第 11 図	T-2 出土遺物	16	第 41 図	調査範囲確定トレンチ土層図	52
第 12 図	T-3 平面図	17	第 42 図	試掘調査出土遺物	53
第 13 図	T-3 北壁土層図	18	第 43 図	完層状況	55
第 14 図	SA01 平面図・断面図	19	第 44 図	A - A' 土層図	56
第 15 図	T-3 出土遺物	19	第 45 図	B - B' 土層図	57
第 16 図	T-4 平面図	20	第 46 図	SK01 平面図・断面図・遺物出土状況	59
第 17 図	T-4 東壁土層図	21	第 47 図	SK01 出土遺物	60
第 18 図	SA02 平面図・断面図	22	第 48 図	層位ごとの遺物出土状況	61
第 19 図	SA03 平面図・断面図	22	第 49 図	第 I 層出土遺物(A - A' 3層)	62
第 20 図	SA04 平面図・断面図	23	第 50 図	第 II 層出土遺物(A - A' 7層)	62
第 21 図	T-4 出土遺物	23	第 51 図	第 II 層出土遺物(A - A' 8層)(1)	63
第 22 図	調査区配置図	24	第 52 図	第 II 層出土遺物(A - A' 8層)(2)	65
第 23 図	T-1 平面図・断面図	24	第 53 図	第 II 層出土遺物(A - A' 8層)(3)	67
第 24 図	T-3 平面図	25	第 54 図	第 II 層出土遺物(A - A' 8層)(4)	68
第 25 図	歴年較正結果	25	第 55 図	第 II 層出土遺物(A - A' 8層)(5)	69
第 26 図	歴年較正結果一覧	26	第 56 図	第 II 層出土遺物(A - A' 9層)	70
第 27 図	新庄寺ノ前遺跡 調査範囲図	29	第 57 図	第 III 層出土遺物(A - A' 10層)	70
第 28 図	グリッド配置図	30	第 58 図	第 III 層出土遺物(A - A' 19層)	70
第 29 図	I 区北壁土層図	32	第 59 図	第 IV 層出土遺物(A - A' 22層)	71
第 30 図	2 区平面図	33	第 60 図	第 IV 層出土遺物(A - A' 28層)	71
			第 61 図	第 IV 層出土遺物(A - A' 29層)	72

## 挿表目次

表 1	歴年較正結果	25	表 5	花粉組成表	42
表 2	遺物観察表	28	表 6	花粉組成表	43
表 3	同定対象分類群	41	表 7	遺物観察表	49
表 4	微化石概査結果	41	表 8	遺物観察表	76

## 本文中写真目次

写 真 1	調査地(本庄川流域条里制遺跡、新庄寺ノ前遺跡、 黒添遺跡)の空中写真	5	写 真 8	島根県担当者による調査指導風景	31
写 真 2	掘削風景(T-1)	10	写 真 9	島根県担当者による遺物指導風景	31
写 真 3	掘削標高確認(T-2)	10	写 真 10	薪微鉛写真(花粉化石)	46
写 真 4	年代測定のための杭切片採取(T-1)	10	写 真 11	薪微鉛写真(植物珪酸体化石)	47
写 真 5	島根県担当者による調査指導	10	写 真 12	包含層掘削風景 1(2区)	54
写 真 6	土層検出風景(I区)	31	写 真 13	包含層掘削風景 2(2区)	54
写 真 7	包含層掘削風景(2区)	31	写 真 14	島根県担当者による調査指導風景	54
			写 真 15	地元対象の遺物見学会	54

## 写真図版目次

**図版 1** 1 条里地割が残る本庄川扇状地 (1947 年撮影) と遺跡の位置

### 図版 2 ~ 10 本庄川流域条里制遺跡

- 図版 2 1 T-1 椰柵前遠景 (西から)  
2 T-1 完掘状況 (西から)
- 図版 3 1 T-1 A - A' 土層 (南から)  
2 T-1 繩文土器出土状況 (第 9 図 1、北東から)
- 図版 4 1 T-2 椰柵前近景 (南から)  
2 T-2 完掘状況 (東から)
- 図版 5 1 T-2 A - A' 土層 (西から)  
2 T-2 A - A' 東端部土層 (西から)
- 図版 6 1 T-3, T-4 椰柵前近景 (南から)  
2 T-3 I、II 区完掘状況 (手前が I 区、東から)
- 図版 7 1 T-3 抗張区 (南から)  
2 T-3 SA01 検出状況 (南から)
- 図版 8 1 T-4 III~V 区、抗張区完掘状況  
(手前が抗張区、東から)  
2 T-4 南側抗張区 (坪塙推定地、北から)
- 図版 9 1 T-4 SA02 断割状況 (南から)  
2 T-4 SA03 断割状況 (南から)
- 図版 10 1 T-4 SA04 断割状況 (南から)  
2 本庄川流域条里制遺跡出土遺物

### 図版 11 ~ 18 新庄寺ノ前遺跡

- 図版 11 1 1 区 椰柵前近景 (南西から)  
2 1 区 挖削状況 (北から)
- 図版 12 1 2 区 椰柵前近景 (北西から)  
2 2 区 完掘状況 (北西から)
- 図版 13 1 2 区 完掘状況 (南から)  
2 2 区 東壁 A - A' (南西から)
- 図版 14 1 土師器出土状況 (第 33 図 3)  
2 土師器出土状況 (第 33 図 23)
- 図版 15 1 土師器出土状況 (第 34 図 4)  
2 須恵器出土状況 (第 35 図 4)
- 図版 16 1 木製品出土状況 (第 35 図 9)  
2 新庄寺ノ前遺跡出土遺物 (1)
- 図版 17 1 新庄寺ノ前遺跡出土遺物 (2)  
2 新庄寺ノ前遺跡出土遺物 (3)

### 図版 19 ~ 30 黒添道路

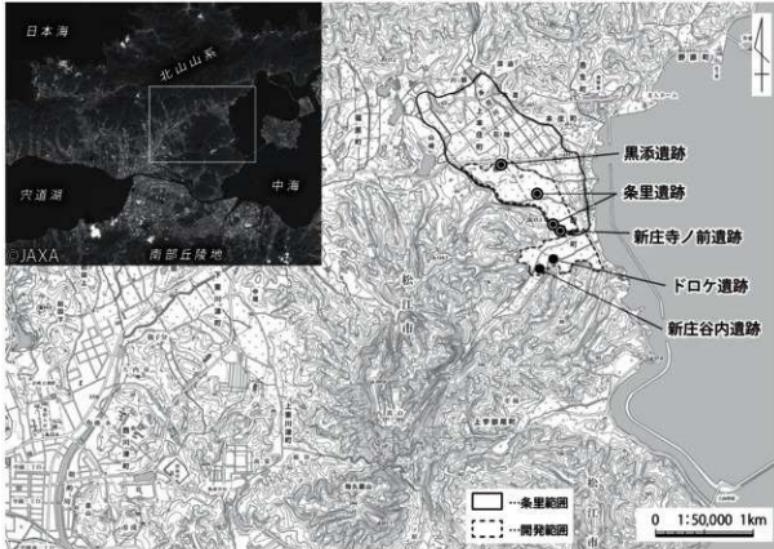
- 図版 19 1 調査前遠景 (北東から)  
2 調査前近景 (北西から)
- 図版 20 1 Tr-1 完掘状況 (西から)  
2 Tr-2 完掘状況 (西から)  
3 Tr-3 完掘状況 (東から)
- 図版 21 1 Tr-3 杭検出状況 (南から)  
2 Tr-4 完掘状況 (東から)  
3 Tr-5 完掘状況 (東から)
- 図版 22 1 完掘状況 (北西から)  
2 完掘状況 (南西から)
- 図版 23 1 土層 A - A' (西から)  
2 土層 B - B' (南西から)
- 図版 24 1 近世以降の杭列 (南西から)  
2 NRO1 (南西から)
- 図版 25 1 SKO1 (南東から)  
2 SKO1 平面プラン検出状況 (南東から)  
3 SKO1 半截状況 (南東から)  
4 SKO1 自然石検出状況 (南東から)  
5 SKO1 に隣接する木の検出状況 (南東から)
- 図版 26 1 弥生土器出土状況 (第 51 図 9)  
2 土師器出土状況 (第 51 図 15)  
3 須恵器出土状況 (第 51 図 20)  
4 須恵器出土状況 (第 51 図 21)  
5 木製品出土状況 (第 52 図 2)  
6 木製品出土状況 (第 52 図 4)  
7 木製品出土状況 (第 52 図 6)  
8 木製品出土状況 (第 55 図 2)
- 図版 27 1 繩文土器出土状況 (第 59 図 2)  
2 SKO1 出土堅果類
- 図版 28 1 黒添遺跡出土遺物 (1)
- 図版 29 1 黒添遺跡出土遺物 (2)
- 図版 30 1 黒添遺跡出土遺物 (3)
- 図版 31 1 黒添遺跡出土遺物 (4)
- 図版 32 1 黒添遺跡出土遺物 (5)

## 第1章 調査に至る経緯と経過

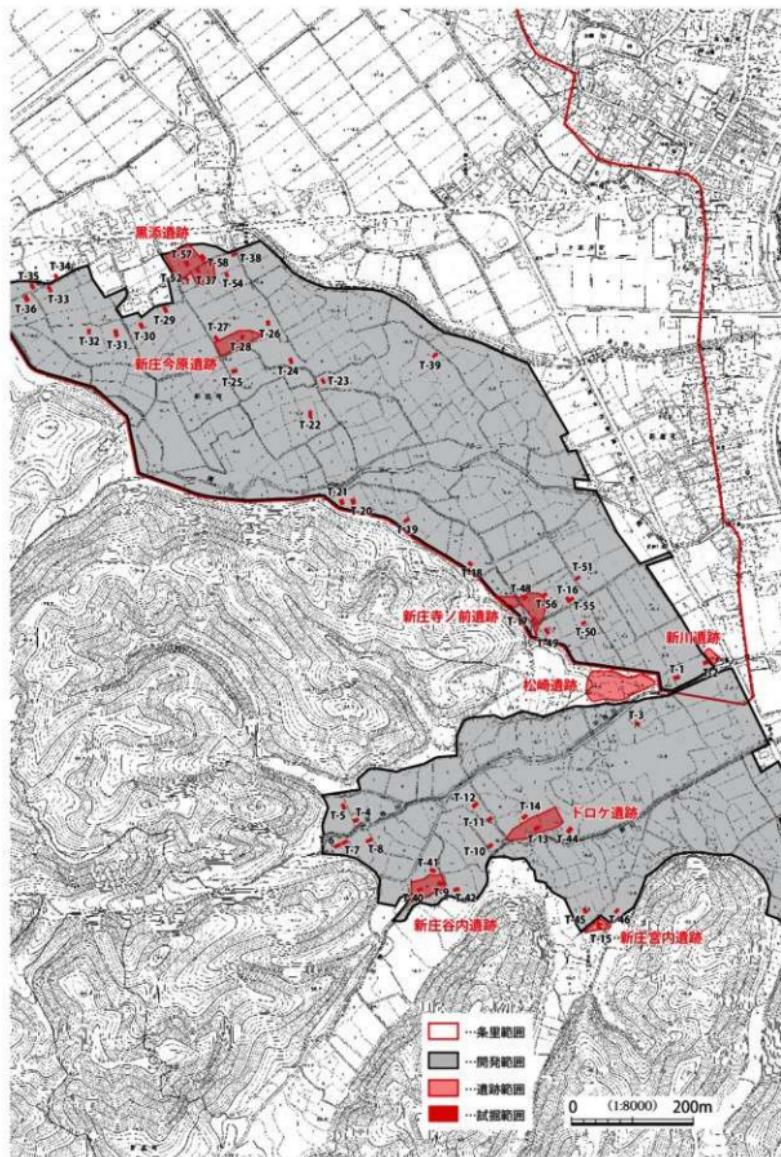
### 第1節 調査に至る経緯と経過

平成29年1月、島根県東部農林振興センターから、松江市内各所の農業の競争力強化を目的とした、農地の集積化や水利用の効率化のための圃場整備計画にかかる事業について、その事業予定地内における埋蔵文化財の協議を、当課（当時は松江市埋蔵文化財調査室）が受けた。このため、各事業箇所における周知の遺跡及び、未発見の遺跡が存在する可能性がある範囲の選定など、年次的に文化財保護法上の手続きを進めることになった。本報告では、この内、松江市新庄町を中心とする「新庄地区」での当該事業にかかる調査の経緯について述べることとする。

まず、新庄地区における事業範囲内においては、既に松崎遺跡、ドロケ遺跡、新川遺跡と、さらに事業範囲の北半をほぼ内包する本庄川流域条里制遺跡の4箇所の周知の遺跡が存在していた。ただし、条里制遺跡については巨視的な圃場の区割りに痕跡を見出せるものの、個別の畦畔や圃場そのものに明確な遺構の存在は確認できおらず、また前述の3遺跡についても調査歴が無く、範囲や遺跡の内容については不明な点が多いものであった。さらに、これら遺跡以外の範囲も広大な未調査に等しい状態であったため、まず条里遺構の残存状況にかかる検証と、その他周知の遺跡の範囲確認、及び未発見の遺跡の有無とその内容や深さを確認し、圃場整備工事における影響を判断することとした。このことから、平成29年3月から分布調査を開始し、当初39箇所の調査箇所を設定した後、同年



第1図 調査地位置図



第2図 工事に伴う試掘トレンチ配置図

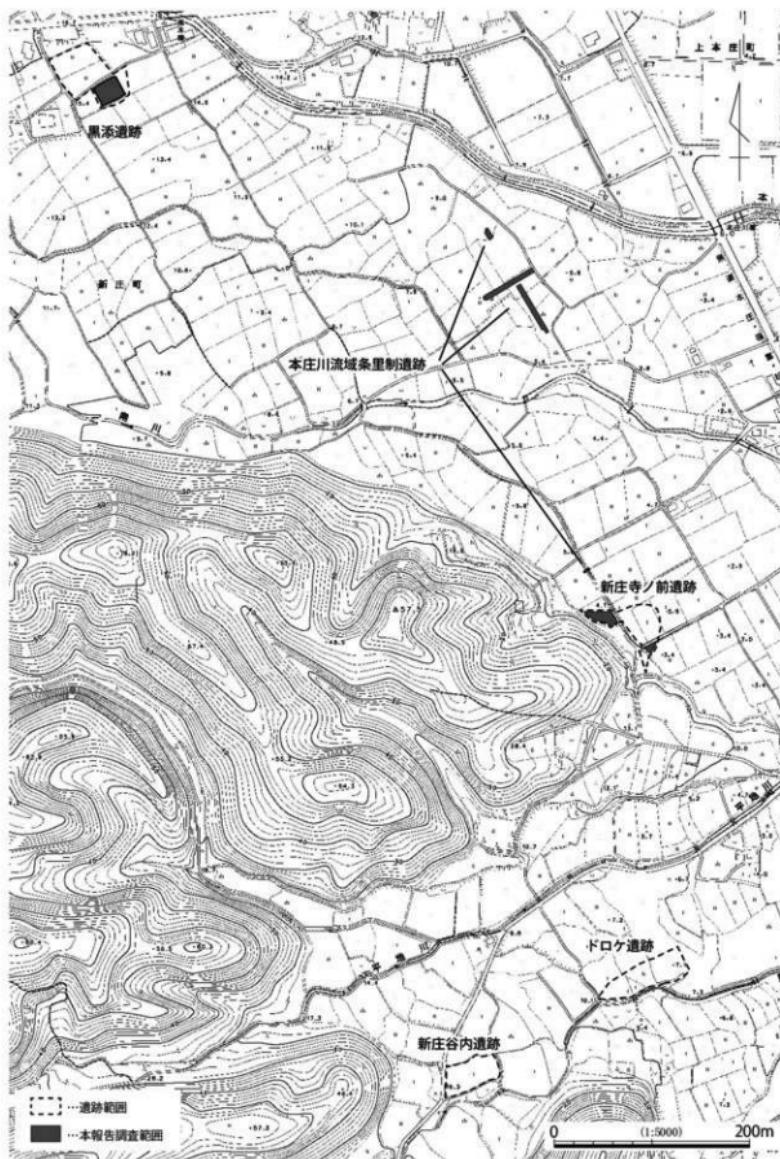
5月～6月にかけて、耕作の関係から先行して調査できる圃場について、1次調査として25箇所の試掘調査を実施し、また、1次調査の結果を受けての追加調査箇所を含め、同年10、11月に2次調査として試掘24本を実施した。

これら試掘調査の結果、新庄谷内遺跡、新庄宮内遺跡、新庄今原遺跡の3遺跡が新たに発見されることとなり、また、事業範囲内にあった周知の新川遺跡、松崎遺跡については、事業範囲内には広がっていないことが確認できた。さらに、ドロケ遺跡についても範囲を特定し、範囲変更の手続きを行っている。ただし、さらに追加調査が必要と判断される箇所があったため、平成30年2月に3次調査として試掘4本を実施し、この結果、新庄寺ノ前遺跡、黒添遺跡の2遺跡が発見され、同年9月、両遺跡の発見通知を行っている。

以上の試掘・確認調査の結果を受け、事業者と協議を行った結果、平成30年10月に島根県松江県土整備事務所から遺跡の発掘通知が本庄川流域条里制遺跡、黒添遺跡、新庄今原遺跡、新庄寺ノ前遺跡、ドロケ遺跡、新庄宮内遺跡、新庄谷内遺跡の計7遺跡について提出されることとなった。

これを受け、遺跡への工事影響範囲を吟味し、島根県教育委員会と協議した結果、本庄川流域条里制遺跡については、現況の地割から畦畔の残存状況を確認するための部分的な本調査を行うこととし、黒添遺跡については全面調査、新庄今原遺跡については、希薄な包含層ということもあり立会、その他遺跡については、切土工事箇所について部分的に発掘調査を行うこととし、影響の及ばない範囲は圃場の地下に現地保存とすることとなった。

なお、黒添遺跡については、その後の事業用地の範囲変更により、北側に遺跡が拡張されたが、掘削が及ばないことから、この拡張範囲については地下保存範囲となっている。また、本調査した遺跡の検出範囲についても、掘削が及ばない深さの範囲については、地下保存としている。また宮内遺跡についても、その後に事業用地の範囲変更があり、発掘調査は未実施となり、地下保存されている。以上の経過を経て、平成30年度にはドロケ遺跡(1区)、令和元年度にはドロケ遺跡(2区)と新庄谷内遺跡、令和2年度には新庄寺ノ前遺跡と本庄川流域条里制遺跡、令和3年度には黒添遺跡の本調査をそれぞれ実施するに至ったものである。なお、各遺跡については、調査地ごとに取り扱い協議を県教育委員会と行い、結果、工事の影響範囲について記録保存は止むを得ない旨の回答を得て、事業が実施されている。



第3図 本庄川流域条里制遺跡、新庄寺ノ前遺跡、黒添遺跡調査箇所位置図

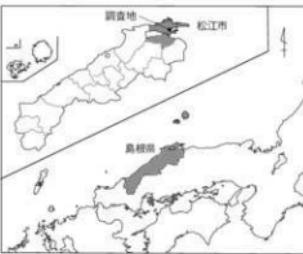
## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

本書で報告する3遺跡（本庄川流域条里制遺跡、新庄寺ノ前遺跡、黒添遺跡）は島根県松江市新庄村地内に位置している（写真1、第4図）。以下では新庄村を中心として地理的環境を述べる。

東西に長い島根県の北東部には東西長65kmの島根半島がある。島根半島は北を日本海、南を中海と大橋川、宍道湖に囲まれ、西の出雲市で本土につながっている。

松江市は島根半島の東側約半分と、これとほぼ同じ面積の本土側の土地を合わせ持つ。新庄村は島根半島の北山山地と嵩山・和久羅山に挟まれた本庄川扇状地の南東部に所在する。ここは北山山地に源を発して中海に注ぐ本庄川と南川が造り出した扇状地で、扇頂部は標高約50m、傾斜は約2°を測る。高低差のある扇状地形のため扇頂から扇央にかけては傾斜が急であるが、調査地は扇央と扇端の中ほどに位置するため比較的緩やかな傾斜となっている。現在は水田を中心とした耕作地が広がり、これまでの調査から耕作土の下には数多くの洪水の痕跡が存在することが知られている。



第4図 島根県・松江市位置図

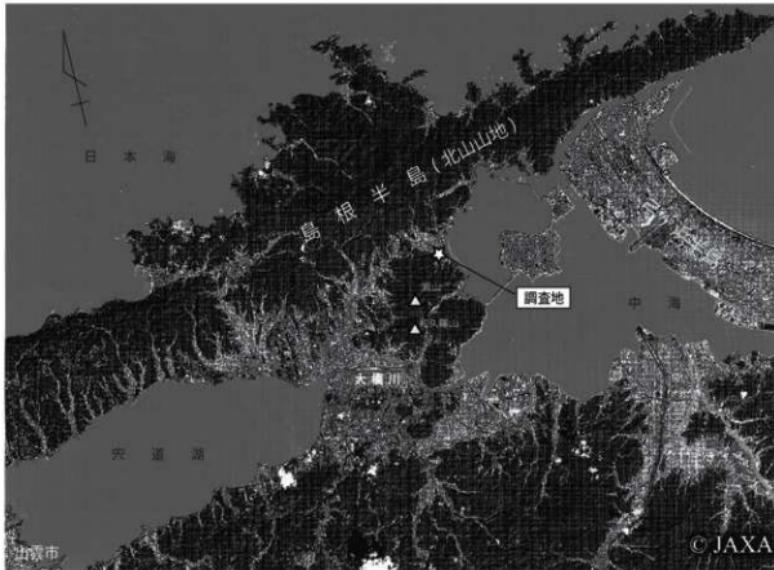


写真1 調査地（本庄川流域条里制遺跡、新庄寺ノ前遺跡、黒添遺跡）の空中写真

## 第2節 歴史的環境

新庄町に位置する3遺跡の周辺の遺跡について時代ごとに概略を述べ、本庄川扇状地の条里制について説明を行う（第5図）。

### 1. 周辺の遺跡（第5図）

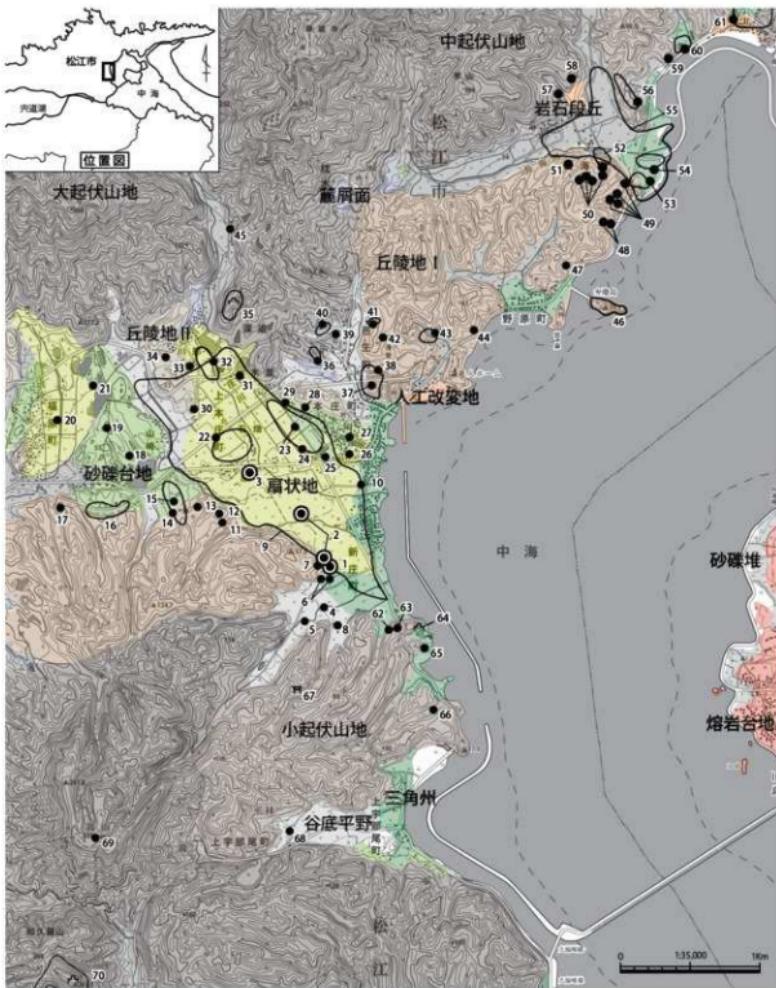
**旧石器時代** 旧石器時代の遺構は確認されていないが、南川改修工事の際に後期前半頃のルヴァロア型尖頭器が発見されている。

**縄文時代** 中海沿岸に遺跡が多く、寺ノ脇遺跡(61)で堅果類貯蔵穴1基が検出され、前、中、晚期の土器が出土している。権田作遺跡(60)は詳細は不明ながらも土器の散布が知られている。夫手遺跡(54)では堅果類貯蔵穴が1基が検出されたほか、土石流の中から早～晚期の遺物が大量に出土して長海川の流域で長期にわたって人々が居住していたことが明らかとされている。また、日本で最古級（前期）の漆液容器が発見されたことでも注目される。これに対し本庄川扇状地周辺で確認されている遺跡数は少なく、荒船遺跡(15)から石皿や草創期の有舌尖頭器が出土している程度である。

**弥生時代** 夫手遺跡で前～後期の遺物が出土しているが、本庄川扇状地では中期までの遺跡は明確にされていない。後期に入ると連行遺跡(38)で竪穴住居跡1棟が検出され、的場遺跡(24)で古墳時代後期まで集落が継続して営まれているほか、荒船遺跡でもまとまった土器が出土している。終末期には客山墳墓群(37)の1号墳が築かれており、13.0×10.0mの墳丘を持つ主体部上では標石を中心複数の供獻土器が出土している。

**古墳時代** 前期は的場遺跡で竪穴建物跡2棟、杉ヶ撓遺跡(29)で竪穴建物跡2棟が検出されている。また、7基の小型古墳から成る春日山古墳群(59)、5.5×4.9mの方墳、客山墳墓群2号墳のほか、一辺約23.5mの方墳、八日山1号墳（八日山古墳群：65）が築かれており、八日山1号墳からは岐阜県の一輪山古墳と同様の三角縁神獸鏡が出土している。中期に入ると的場遺跡の旧河道から大量の土器が出土しており、同遺跡で墳丘を失った方墳11基が検出されている。本庄川扇状地を取り巻く丘陵上に築造された古墳も多く、その内の客山1号墳は9.0×12.0mの方墳で、木棺直葬の主体部から小型の仿製丸乳文鏡、櫛、玉類の副葬品が出土している。また、馬場遺跡(28)の2号墳は墳丘上に円筒埴輪と朝顔型埴輪を有するものである。後期には本庄川上流の丘陵上に横穴式石室を主体部に持つ10基以上からなる群集墳、中西古墳群(33)が築かれている。これに対し横穴墓は中海に近い丘陵斜面に造られており、16穴から成る連行遺跡や約10穴が想定される坂山横穴群(7)、ガンダ横穴群(47)、梅廻横穴群(63)、鍛冶床南横穴群(66)が知られている。

**古代（奈良・平安時代）** 芝原遺跡(20)は大型の庇付掘立柱建物跡が軸を備えて整然と配置され、供膳土器の割合が高いことが知られており、土器に郡司の名前、出雲臣を示すと考えられる「出雲家」や軍團の指揮官を示す「校尉」などの墨書きがみられることから、島根郡家跡と推定されている。また、金クソ谷遺跡(16)付近も含めて郡家を構成していた可能性も指摘されている。その他、京殿遺跡(32)は遺構は検出されていないが、手握土器や土馬などの祭祀関連遺物のほか硯、丹塗り土師器が出土していることから官衙もしくは有力者の居住地と推測されている。連行遺跡では8世紀初頭の土器と円面硯が出土し、梨子谷遺跡(45)でも8世紀を中心とした多くの遺物が出土している。また、



1 新庄寺ノ前遺跡	11 須ノ平遺跡	21 石裏遺跡	31 深治古墳	41 家床遺跡	51 渥古墳	61 寺ノ脇遺跡
2 本庄川流域里制道路	12 松音宇遺跡	22 原ノ後遺跡	32 京殿遺跡	42 井ノ谷古墳群	52 杉戸古墳	62 梅園古墳群
3 今尾2年定期査定区	13 佐原古墳群	23 佐原古墳群	33 佐原古墳群	43 三日月古墳群	53 佐原古墳群	63 佐原古墳群
4 ドロケ遺跡	14 船舶古墳群	24 のぼり越跡	34 子馬古墳群	44 碧岩古墳	54 夫手遺跡	64 新庄純山古墳跡
5 新庄寺内古跡	15 航船遺跡	25 球根古墳	35 あんじ山城跡	45 犀子谷古墳	55 長海集落里制道路	65 八日山古墳群
6 寄山古墳群	16 キクノ谷遺跡	26 天神山古墳	36 たたら古墳群	46 井畠島遺跡	56 岩越古墳群	66 鶴治庄南横穴群
7 岩山古墳群	17 中橋古墳群	27 天神山古墳	37 寄山古墳群	47 ガンダ楠穴群	57 善尾遺跡	67 植見社
8 久羅佐神社遺跡	18 平田古墳群	28 馬場遺跡	38 進行遺跡	48 藤田山古墳	58 善尾古墳	68 四反田古跡
9 本庄川流域里制道路	19 王野寺跡	29 杉ヶ橋遺跡	39 上松古墳	49 藤田古墳群	59 春日山古墳群	69 白佐古墳
10 大塚古墳	30 芝原遺跡	30 篠所遺跡	50 测切古墳群	60 稲田作遺跡	70 和久羅山城跡	

第5図 本庄川流域里制遺跡、新庄寺ノ前遺跡、黒森遺跡と周辺の遺跡

\*島根県 1973「松江」『5万分の1都道府県土地分類基本調査(地形分類図)』を改変

遺構としては検出されていないが、733年に完成した『出雲国風土記』には嵩山山頂に布自枳美峰(69)が置かれ、中海を挟んで東に浮かぶ大根島には牧が置かれていたと記されている。

**中世** 的場遺跡で中世前半期の規模の大きい掘立柱建物跡が検出され、12世紀末～13世紀初頭の道安窯の青磁と和鏡が副葬された平面プラン長方形の土壙墓1基のほか、14世紀頃の備前焼の甕が使用された平面プラン円形の土壙墓1基が検出されている。時期は明確にされていないが、小綱治の跡が検出されている。また、馬場遺跡では16世紀末～17世紀初頭の宝篋印塔の石材が出土し、青磁や中世土師器が出土している。新庄城山城跡(64)は館を備えた山城で、この城は北に位置するあん山城跡(35)と関連して造られたと考えられている。

## 2. 本庄川扇状地にみえる条里制(第6図)

本庄川扇状地の地表面には1町(約109m)四方の整然とした土地の区画がみられ、これは古代の条里制遺構を継承するものと考えられている(第6図)。条里的軸は磁北から西に約32°傾いている。

1町区画(坪)の中の地割は、字名に残る数字から千鳥式と考えられている。しかし、標高が高い場所では非常に不整形な細分となっており、長地型や半折型を基にした小方形を示す場所が殆どみられない。これに対して標高が低い場所では坪界線と平行した地割もある程度存在している。この要因はもっぱら傾斜地での水利灌漑の便が図られた結果と推察されている。

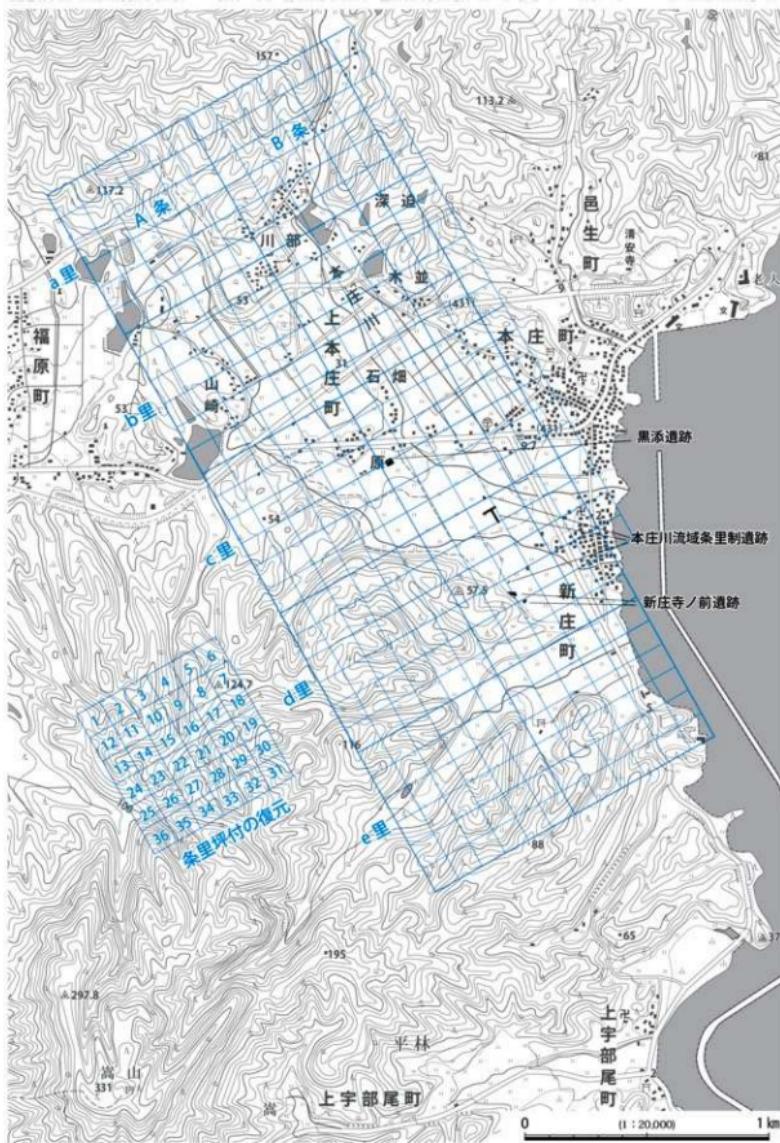
条里的敷かれた時期については大字「大坪」の坪境ラインで発掘調査が行われた結果、坪境ラインの下から石敷路盤が検出され、中～近世を中心とする遺物が出土して下方ほど古い遺物が出土する状況が確認された。のことから、調査実施部分については基本的には中世末以降に大改修され今日に至ると考察されている。<sup>13</sup>

### 【第2章 参考文献】

島根県教育委員会 2003『増補改訂 島根県遺跡地図 I(出雲・隠岐編)』  
松江市史編集委員会 2012『松江市史』史料編2 考古資料 他

### 【第2章 註】

1. 中村唯史・徳岡隆夫(島根大学地球資源環境学教室)「第六章 松江市本庄町本庄川流域条里遺跡の立地と環境」島根県教育委員会『国道431号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書V 本庄川流域条里遺跡』平成九年
2. 図中の青線で示した条里的復元は、甲子園短期大学 岩本次郎「第5章 本庄川流域平野部の条理プランについて」島根県教育委員会『国道431号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書V 本庄川流域条里遺跡』平成九年の第47図 本庄川流域の条里地割と小字名(53・54頁)を国土地理院発行の地図に当てはめて作成している。
3. 甲子園短期大学 岩本次郎「第5章 本庄川流域平野部の条理プランについて」島根県教育委員会『国道431号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書V 本庄川流域条里遺跡』平成九年
4. 島根県教育委員会『国道431号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書V 本庄川流域条里遺跡』平成九年



第6図 本庄地区条里制復元図

## 第3章 本庄川流域条里制遺跡

本庄川扇状地には一辺約109m(1町)を測る方形の地割が部分的に残り、古代条里制を継承するものと考えられている。ただし、古代の畦畔そのものが残存するのかどうかは不明であったことから、推定復元されている条里の地割線(第6、7図※青線)を参照して、畦畔が残っている可能性が高い箇所を選定してトレンチ調査を実施した。以下、その調査の成果について述べる。

### 第1節 調査の方法と概要

#### 1. 調査区の設定

開発範囲には本庄川と南川が流れている。条里地割は河川氾濫により形状が変化していることが多いため、調査区は河川の氾濫の影響が少なく、工事により削平が計画されている場所で、かつ現在の農作業に支障の無い場所を選定する必要があった。これらの条件の下、以下のように坪「寺ノ前」に1箇所、坪「相ヶ坪」に3箇所、合計4箇所(T-1～T-4)の調査区を設定した(第7図)。

T-1(幅1.5m×長さ6.0m)

「寺ノ前」と西に位置する「八石田」の間にある直線道路上で、道路と直交方向に設定している。この道路は屋敷田から梨ヶ坪、バクチ田へ曲線を描いて続いているが、南川の氾濫痕跡のようにも見えるが、直線的な土地区画の名残とも考えられたため調査区を設定した。直線道路は坪境推定ラインより約10m「寺ノ前」側に引いた場所に位置するため、小畦畔の存在を想定した。

T-2(幅4.0m×長さ10.0m)

「相ヶ坪」と北の「塚田」の間の坪境推定ラインと直交方向に設定して、坪境の調査を行うこととした。



写真2 挖削風景 (T-1)



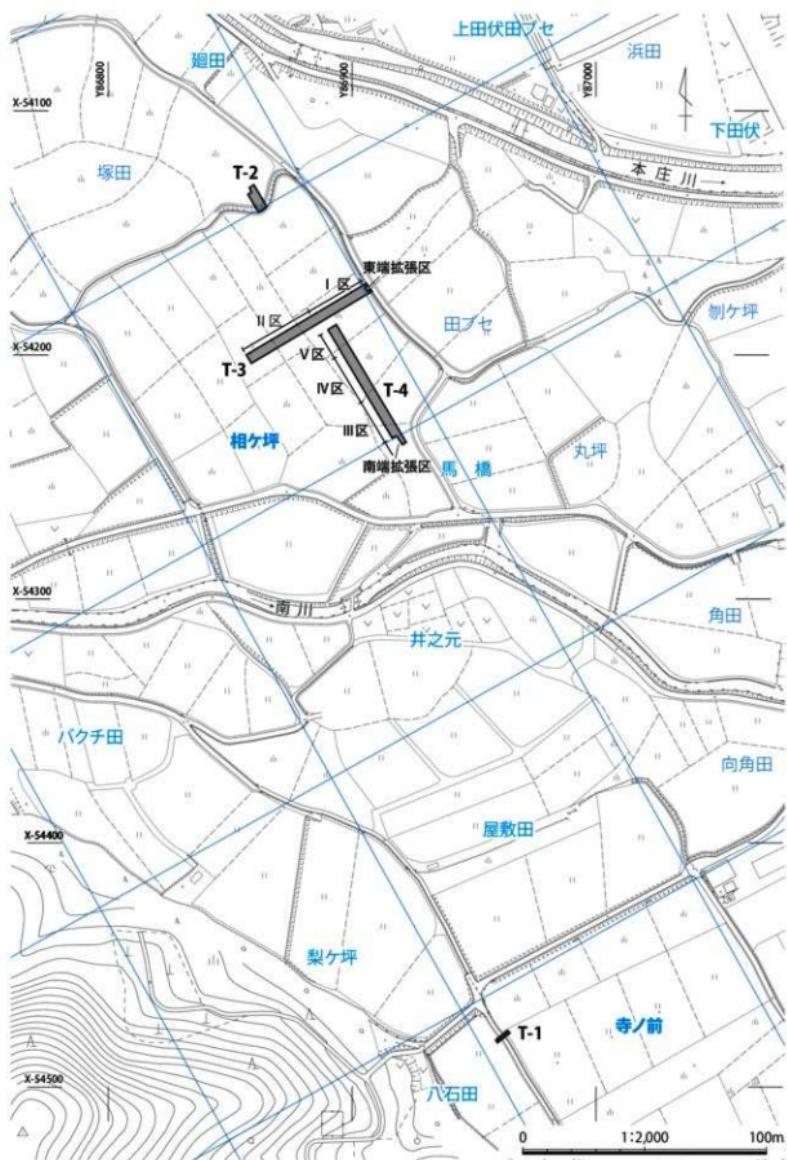
写真3 挖削標高確認 (T-2)



写真4 年代測定のための杭切片採取 (T-1)



写真5 島根県担当者による調査指導



第7図 調査区位置図

トレンチは坪境推定ラインから標高の高い「塚田」側を中心として設定している。

T-3(幅4.0m×長さ57.0m)

「相ヶ坪」と東の「田ブセ」の間の坪境推定ラインと直交方向に、「相ヶ坪」に深く入るトレンチを設定している。坪境と坪の中を細分する小区画についての調査を行うこととした。

T-4(幅4.0m×長さ52.0m)

「相ヶ坪」と南の「馬橋」の間の坪境推定ラインと直交方向に、「相ヶ坪」に深く入るトレンチを設定している。坪境と坪の中を細分する小区画についての調査を行うこととした。

## 2. 調査区の区分(第7図)

調査区は細長いトレンチ状で広範囲にわたるためにグリッド設定は行っていない。

T-3とT-4は調査区の長さが50mを越えることから、T-3は東半分をI区、西半分をII区とし、T-4は現代の地割区画に準じて南からIII、IV、V区と区分けを行い遺物の取り上げに備えた。また、T-3とT-4では坪境の調査を確実なものとするため、調査開始後に拡張区の設定を行っている。

## 3. 調査の概要

令和元年10月5～13日に調査区及びその周辺の草刈を行い、掘削は10月7日にT-1から開始した。最初に重機で現代の耕作土を除去し、その下を人力で掘削した。遺構の精査にあたっては湧水処理のため、必要に応じて水切り溝を設けている。無遺物層(基盤層)に打ち込まれた杭1本についてAMS年代測定を行うため現地で切片を採取し、10月15日にはT-1全ての調査行程を終了し、島根県文化財課の許可を得て埋め戻しを行った。

10月26日から「相ヶ坪」周辺調査区の掘削を開始した。まずT-4から調査を開始し、南側から重機で表土を除去して人力で掘削を行うと、坪境推定ライン近くで大量の杭が打ち込まれた杭列SA02が検出された。SA02の断ち割りと並行して北に向けて掘削を進めたところ、さらに2本の杭列SA03とSA04を検出したが、杭列の方向は3本とも条里の方向とは異なるものであった。また、坪境推定地付近では拡張区を設定して掘削を行ったが、遺構は検出されなかった。11月5日午前には島根大学教授、大橋泰夫氏から調査指導を頂き、T-4の掘削がほぼ終わった段階の11月17日には島根県文化課の調査指導を頂いた。11月19日にはT-3の掘削を開始した。東から重機で表土を除去して人力で掘削を行ったところ、調査区の2箇所で杭が集中して検出され、杭列SA01は条里の方向と概ね合致するものであったが、土層を観察したところ現代の杭列と判断された。坪境推定地付近では下層から木が出土したので、AMS年代測定を行うため現地で切片の採取を行った。坪境推定地では拡張区を設定して掘削を行ったが、遺構は検出されなかった。12月1日にはT-2も並行して掘削を開始した。T-2では坪境付近で3時期の畦畔盛土が重なるように検出された。T-2～T-4の掘削がほぼ終わった段階の12月14日に再び大橋氏から現地での調査指導を頂いた。12月21日にはT-2～T-4の調査も全行程を終了し、島根県文化財課から調査内容について指導を受けた後、12月22、23日にT-2～T-4の埋め戻しを行い、現地における調査を終了した。

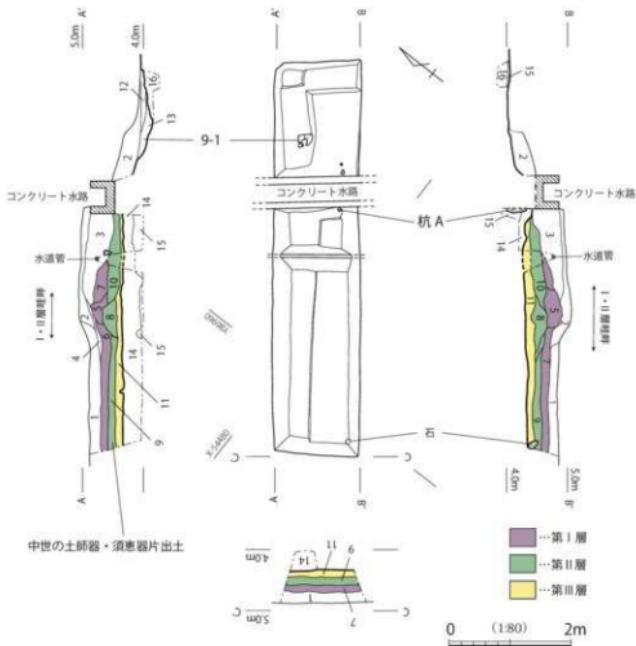
本発掘調査では、繩文土器の破片が4点、土師器の破片が4点、須恵器の破片が4点、中世土師器の破片1点、陶磁器の破片が14点、石製品がビニール袋1袋、木製品(杭の一部を含む)が出土した。

## 第2節 調査成果

調査区ごと(T-1～T-4)に調査の成果を述べる。

### 1. T-1(第8図)

「寺ノ前」とその西の「八石田」との境にある現道は、幅2.0m程の未舗装の道路でほぼ直線に走る。この現道を北へ辿ると北西に隣接する「屋敷田」の北隅で大きく西へカーブしており、南川の氾濫の跡を示していると思われる。現道が「寺ノ前」の西では条里の方向に平行する直線でありながらも坪境推定ラインから「寺ノ前」側に約10m入り込んでいることは、かつての小畦畔上に道路が造られた可能性も考えられる。T-1は直線的な現道を横断するようにトレンチを設定している。地面標高は4.8mである。



- |   |   |
|---|---|
| 1 黒褐色粘質土 (10YR3/2)：現代水田耕作土                | 9 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1)                            |
| 2 褐灰色土 (10YR4/1)                          | 10 黄灰色粘質土 (2.5Y6/1)                           |
| 3 明黄褐色土 (10YR7/6) と 5～10cm の縦多量：水道管裏込     | 11 黒褐色粘質土 (2.5Y3/1)                           |
| 4 褐灰色粘質土 (10YR5/1)                        | 12 黄灰色粘質土 (2.5Y5/1)                           |
| 5 にぶい黄褐色土 (10YR6/3)：畦畔                    | 13 緑灰色砂質土 (10GY6/1) と 5cm程度の礫<br>(疊土層 9-1 出土) |
| 6 灰色粘質土 (10YR6/1)                         | 14 明緑灰色粘質土 (7.5GY7/1)：基盤層                     |
| 7 灰オリーブ粘質土 (7.5Y6/2)                      | 15 明緑灰色粘質土 (10GY7/1)：基盤層                      |
| 8 褐灰色粘質土 (10YR6/1) と 0.5～1cm の白色ブロック多量：畦畔 | 16 明緑灰色粘質土 (5G7/1)：基盤層                        |

第8図 T-1平面図・断面図

## (1) 土層(第8図)

A-A'、B-B'のとおり、現代の盛土層(1~4層)の下で2時期の畦畔を伴う旧水田層(第I層、第II層)を確認し、その下を第III層とした。詳しくは以下のとおりである。

**第I層** 断面が半円状を呈する5層が畦畔盛土と考えられ、幅0.65m、高さ0.25mを測る。これに伴う水田層は粘土質の6、7層と考えられ、厚さ16cm程度が残り、下面標高4.55m前後を測る。

**第II層** 第I層の畦畔盛土直下で畦畔盛土(8層)を検出した。畦畔盛土は断面半円状を呈し、幅0.95m、高さ0.25mを測る。これに伴う水田層は粘土質の9、10層と考えられ、厚さ12cm程度が残り、下面標高4.4m前後を測る。中世の土師器の环(第9図2)が出土したので、中世以降の層である。

**第III層** 基盤層直上に堆積した黒褐色粘質土(11層)で、畦畔の痕跡は見られず性格は不明である。

また、第I層~第III層と離れた場所にある13層から繩文土器(第9図1)が出土している。基盤層(14~16層)は現地表面下約50cm、標高4.35mで検出された。

## (2) 遺構(第8図)

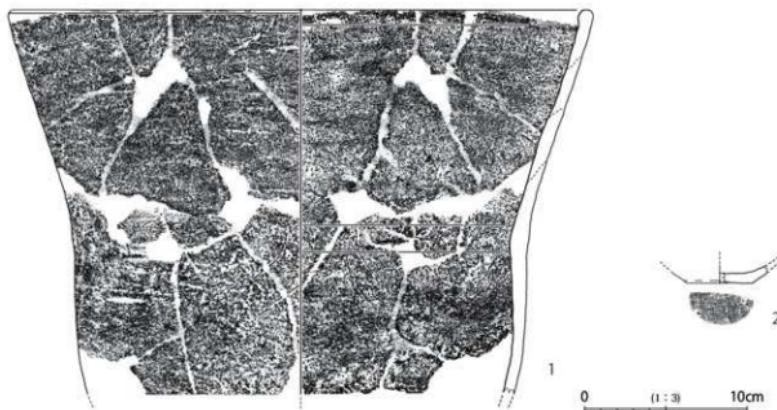
2時期の畦畔を検出した。

## ① 畦畔(第8図)

面的な検出はできなかったが、土層A-A'、B-B'から2時期の畠を伴う水田遺構(第I層、第II層)が復元できる。2時期とも同じ場所に上下して畦畔が造られている。下方の第II層の水田層から中世の土師器の破片(第9図2)が出土したことから、古くても中世以降の水田層と判断される。第I層は更に新しい水田層である。

## ② 杖A(第8図)

水田層が北辺で消滅する辺りの基盤層に3本の杖が打ち込まれていたため、杖AについてAMS年代測定を実施したところ、「1664~1954年」という結果を得た(第3節参照)。



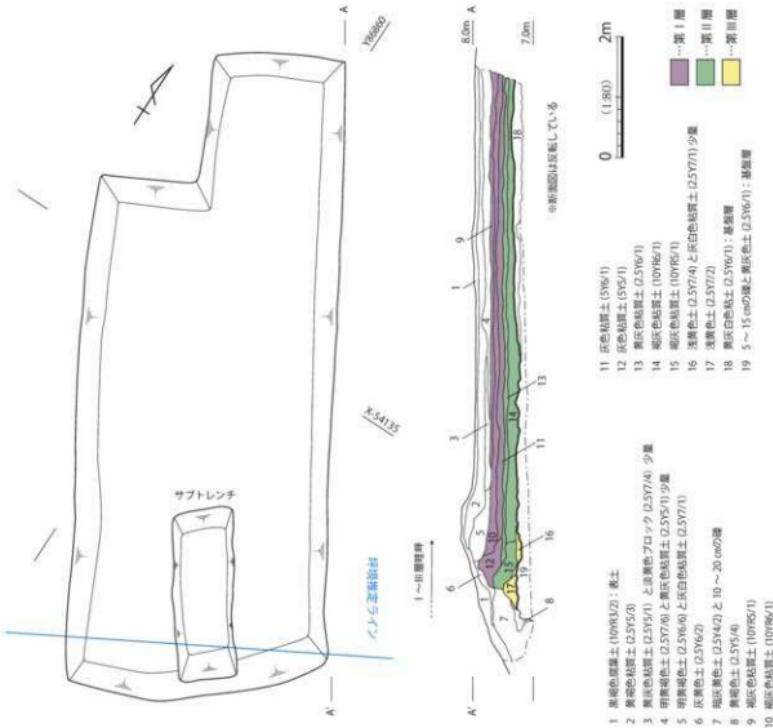
第9図 T-1 出土遺物

## (3) 遺物(第9図)

第9図1は縄文土器の粗製深鉢である。口縁が最も大きく、口縁下13cm付近ですぼまり、脇部は再び丸味を帯びてやや膨らむ器形である。口縁端部内面は余分な粘土が折り返されて肥厚している。内外面ともナデ調整で、焼成は良好である。時期は後期後葉～晩期と思われる。口径35.2cm。2は中世の土師器の环の底部付近である。ろくろ成形であるが、全体に風化が著しく詳細は不明である。時期の詳細は特定できない。底径4.0cm。

## 2. T-2(第10図)

「相ヶ坪」と北に隣接する「塚田」の境界には条里と同じ方向の畦道と水路が走り、坪境推定ラインより多少北西に外れているが、蛇行して一部が坪境推定ラインに入り込んでいる。「塚田」の地面標高は約8.0mを測り、「相ヶ坪」より2m近く標高が高く遺構の残りが良いと考えられたことから、調査区は畦道と水路が「相ヶ坪」に最も入り込むところの「塚田」側に坪境推定ラインを横断するよう設定している。



第10図 T-2 平面図・断面図

## (1) 土層(第10図)

A-A'のとおり、現代の盛土層(1~8層)の下で3時期の畦畔を伴う水田層(第Ⅰ層~第Ⅲ層)を確認した。3時期の畦畔はほぼ同じ場所で造り変えられており、畦畔の北辺は坪境推定ラインからちょうど2.0m「塚田」側に位置し、南辺は現代の層に切られている。詳しくは以下のとおりである。

第Ⅰ層 断面が台形を呈する12層が畦畔盛土と考えられ、南辺が現代の層(6層)により切られているため畦畔の幅は不明(80cm以上)、高さ40cmを測る。これに伴う水田層は粘土質の9~11層と考えられ、厚さ約25cmが残り、下面標高7.5m前後を測る。

第Ⅱ層 断面が台形を呈する15層が畦畔盛土と考えられ、南辺が現代の層(7層)により切られているため畦畔の幅は不明(60cm以上)、高さ25cmを測る。これに伴う水田層は粘土質の13、14層と考えられ、厚さ約25cmが残り、下面標高7.25~7.3mを測り、大半は基盤層(18、19層)の直上に位置している。肥前系小皿(第11図1)の出土から、17世紀前半以降の水田層と判断される。

第Ⅲ層 断面が台形を呈する17層が畦畔盛土と考えられ、南辺が現代の層(7、8層)により切られているため幅は不明(80cm以上)、高さ40cmを測る。これに伴う水田層は粘土質の16層と考えられ、厚さ10~15cmが北へ約1m程度残る。遺物が出土していないため時期は不明だが、基盤層(19層)直上にあり、洪水堆積層上で最初に造られた水田と考えられる。基盤層(18、19層)は、現地表面下約65cm、標高7.35mで検出された。

## (2) 遺構(第10図)

3時期の畦畔を検出した。

## ①畦畔(第10図)

面的な検出はできなかったが、土層A-A'から3時期の畦畔を伴う水田遺構が復元できる。3時期とも同じ場所に上下して畦畔が造られている。第Ⅲ層の水田の時期は分からぬものの、その上の第Ⅱ層から17世紀前半の陶器(第11図1)が出土しており、第Ⅱ層は古くても17世紀前半以降の水田層と判断され、第Ⅰ層は更に新しい水田層である。

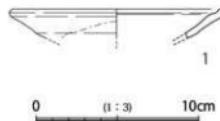
## (3) 遺物(第11図)

第11図1は17世紀前半の肥前系の小皿である。口縁端部内面に溝めぐらされた溝縁皿で、釉は青みがかった薄い灰色で、内面は全面、外表面は口縁付近だけに施されている。口径12.8cm。

## 3.T-3(第12図)

「相ヶ坪」と東に隣接する「田ブセ」の境界は、北にある「廻田」と「塚田」の境界から続くもので、本庄川の氾濫の跡を示すものと考えられる(第7図)。調査区はこの東の坪境推定ラインのほぼ中央から坪の中心に向けて伸ばした全長58mのトレーンチで、現在の圃場区画に合わせて東側30mをI区、西側26mをII区とした。また、坪境を観察するため長さ約2mの拡幅区を設けている。拡幅区については調査区の東に舗装道路があるため幅の狭いトレーンチを設定している。

洪水堆積層まで掘り下げた後、洪水堆積層の凹凸に小畦畔のなご



第11図 T-2 出土遺物

りの可能性もあると考えられたため、この上面まで面的に掘り下げて精査を行ったが、洪水堆積層のプランには規則性が見当たらず、自然流路跡と判断した。

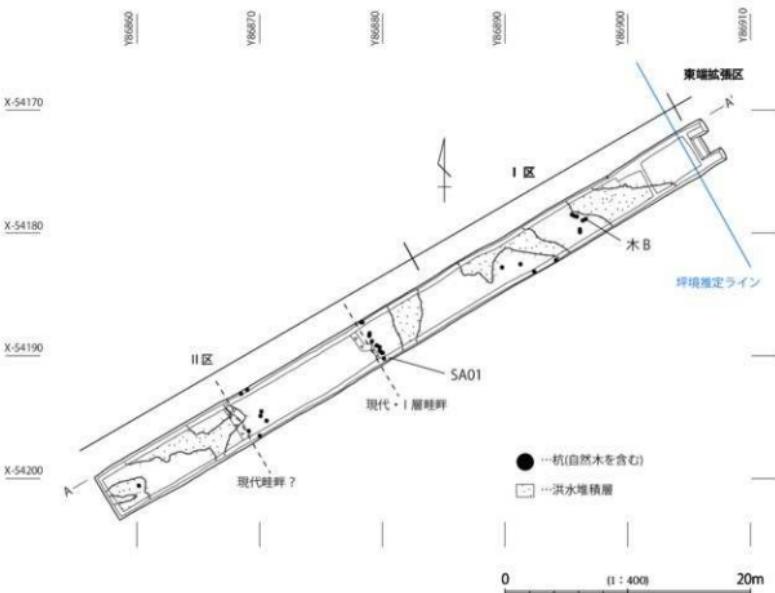
#### (1) 土層 (第13図)

A-A'のとおり、現代の水田や盛土層(1~8層)の下で2時期の水田層(第I層、第II層)を確認した。以下で詳細を述べる。

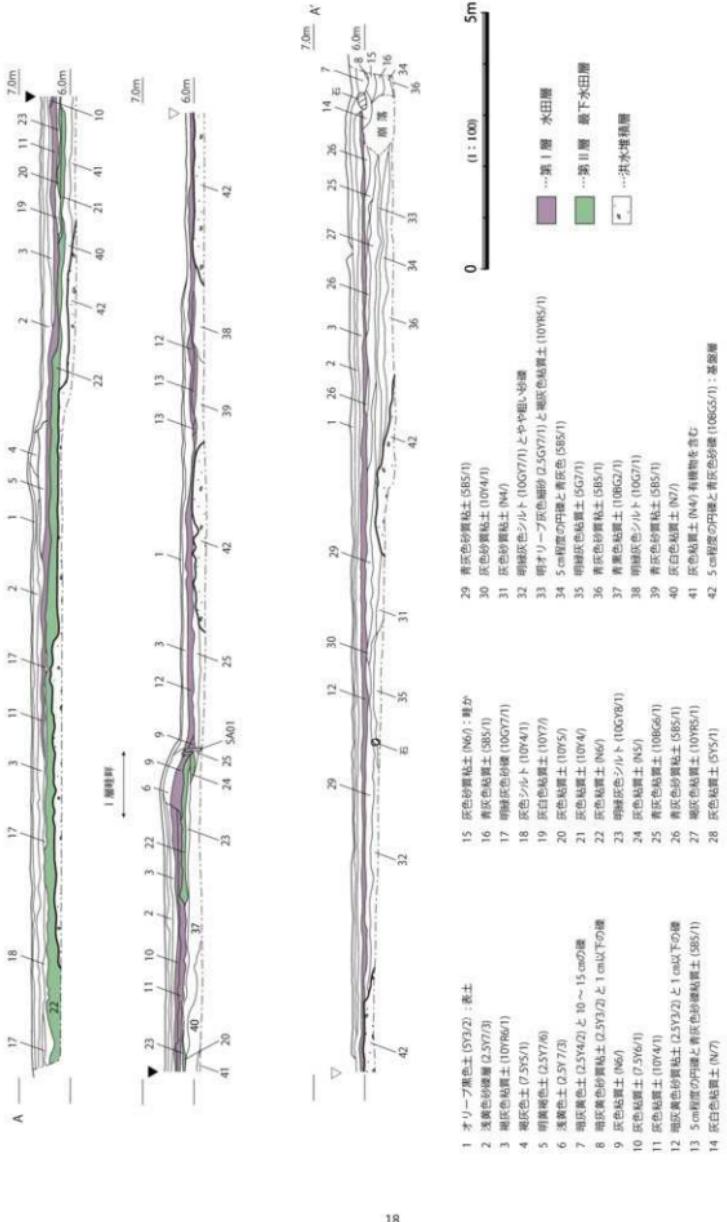
**第I層** 現代の畦畔直下に畦畔盛土(9層)があり、これに伴う水田層は粘質土の10~13層と思われる。残存する水田層は、畦畔盛土より東では水田層下面の標高がほぼ6.0mで水平を保ち、畦畔盛土より南西では6.2~6.45mとやや高い。時期は不明である。

**第II層** 第I層の畦畔の西側にみられる、第I層より下に位置する層(20~24層)は粘質土であることから、水田層と思われる。これに伴う畦畔盛土層は検出されなかった。青磁の破片(第15図1)が出土したので中世後半以降の層と判断される。

基盤層を観察すると、全体に西から東へ向けて緩やかに下がって堆積しているが、西寄りの場所において洪水堆積層(42層)の上面が第II層の下で平坦に加工されているように見えることから、第II層の水田が造られる前に農地造成が行われた可能性が考えられる。調査区の北東付近では第I層の下に複数の土層が堆積しているが、青灰色系の砂を含んだ層が多いことから自然堆積層と推測される。基盤層の洪水堆積層(42層)は現地表面下約20~50cm、標高5.8~6.4mで検出された。



第12図 T-3 平面図



第13図 T-3北壁土層図

Fig. 13-3 Topographic map of the northern part of the T-3 area showing soil profiles A-A' and A''-A'''.

Scale: 0 to 5m (1:100 scale bar).

## (2) 遺構(第12、14図)

2時期の水田層と、条里制の軸とほぼ同じ方位の杭列1本、自然木の集積を検出した。

## ①畦畔(第12、13図)

面的な検出はできなかったが、土層A-A'から2時期の水田遺構が復元できる。II層には畦畔の痕跡は見られなかつたが、水平に堆積した粘質土は水田層と考えられ、この層の下面では基盤の緩やかに傾斜する洪水堆積層が平坦に加工されているように見えることから、農地造成を伴うものであつた可能性が考えられる。水田の時期は出土遺物(第15図1)から中世後半以降と判断される。

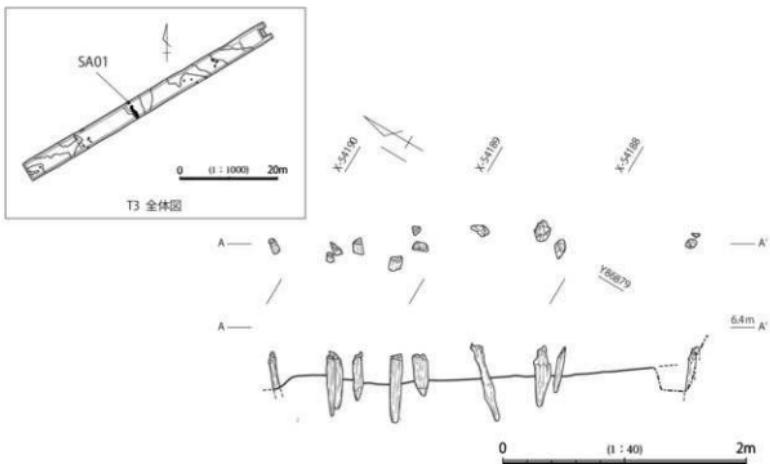
I層は現代の畦畔直下に畦畔(9層)が位置する水田層で、時期は不明である。

## ② SA01(第14図)

調査区内で12本の杭が直線状に並ぶ杭列である。方向が本庄川条里制の軸とほぼ一致している。時期不明のI層の畦畔盛土(9層)の下端に沿って打たれたものと推察される。

## ③木B(第12図)

坪境推定ラインの内側10m付近の基盤層中に多数の杭があるようにみえた。ところが、掘削してみると、いずれも根がついた自然木ばかりであった。これらの木の性格が分からぬため、1本(木B)についてAMS年代測定を実施したところ、「BC14年～AD61年」という結果を得た(第3節参照)。

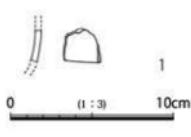


第14図 SA01平面図・断面図

当該期にここに根付いていたものと判断される。

## (3) 遺物(第15図)

第15図1は青磁の破片である。胎土は淡灰色で、釉は薄い。蓮華文の一部と思われる線が1本描かれているが、全体の模様は分からぬ。龍泉窯産で中世後半期のものと思われる。



第15図 T-3出土遺物

## 4. T-4(第16図)

「相ヶ坪」の南に隣接する「馬橋」「井之元」の間には明確な坪の境界がみられない。調査区は「相ヶ坪」の南の坪境推定ラインの東寄りの地点から北に向けて伸ばした全長 52.0m のトレンチで、現在の区画に合わせて南から 3 区 (20m)、4 区 (21m)、5 区 (11m) とした。また、坪境を観察するため長さ約 4.5m、幅 2m の拡幅区を設けている。

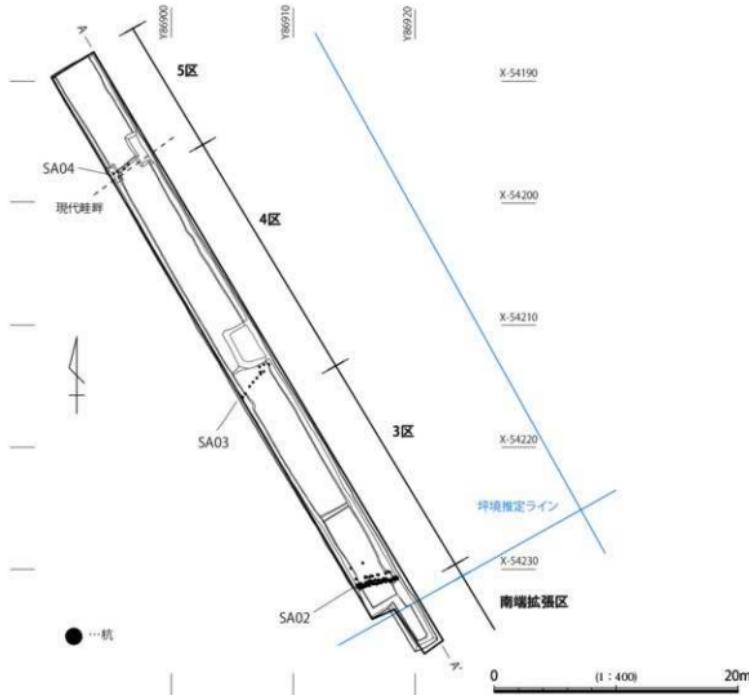
現代の水田層の下には灰色粘質土層などの部分的な水平堆積がみられ、2 時期の水田層が検出された。また、杭列 3 本 (SA02 ~ SA04) を検出したが、土層から現代の畦畔に伴うものと判断された。

基盤層は現地表面下約 20 ~ 120cm (標高 4.3 ~ 6.0m) にあり、南に向けて下がっていた。

## (1) 土層 (第17図)

A - A' のとおり、現代の水田や盛土層 (1 ~ 6 層) の下で 2 時期 (第Ⅰ層、第Ⅱ層) の水田層と思われる層を確認した。しかし、両層とも坪境推定ライン付近での条里構造や小畦畔を示す土層は確認できなかった。以下で第Ⅰ層、第Ⅱ層について詳細を記す。

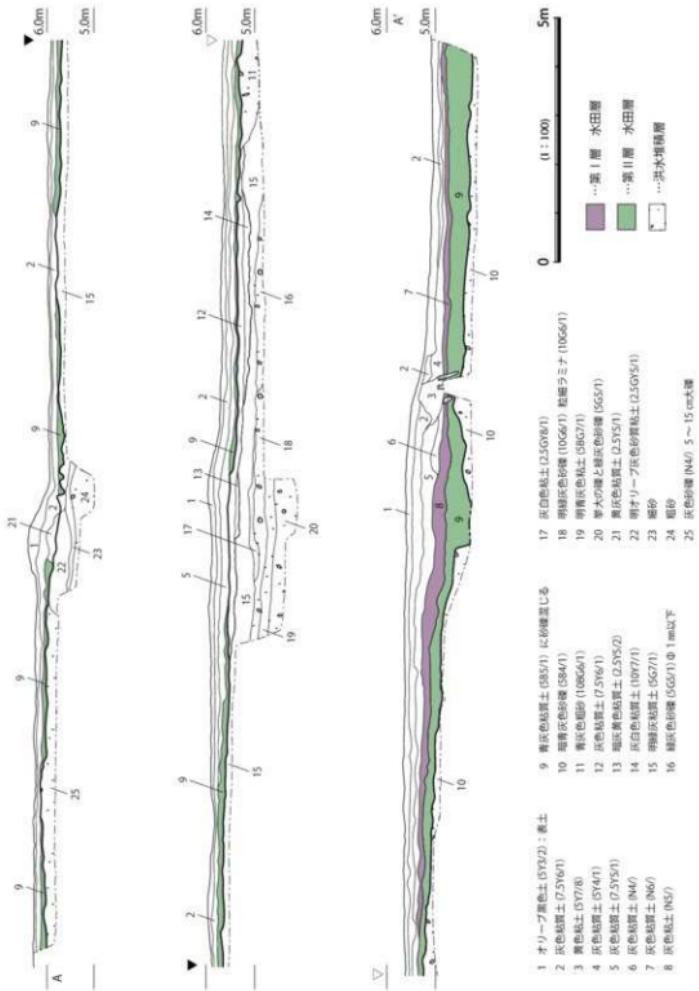
第Ⅰ層 7、8 層がこれにあたる。水平な面や畦畔の痕跡は見られないが、土が粘土質であることか



第16図 T-4 平面図

ら水田層と思われる。

第II層 9層がこれにあたる。この層の下にある基盤層は南に向けて標高が低くなっているが、基盤層は所々に段を有しながら水平な面が連なっており、この地形は造成の痕跡と思われる。9層からは繩文土器や須恵器のほか、近世初頭の肥前系陶器が出土しているので(第21図1~3)、近世初頭以降の水田層と判断される。



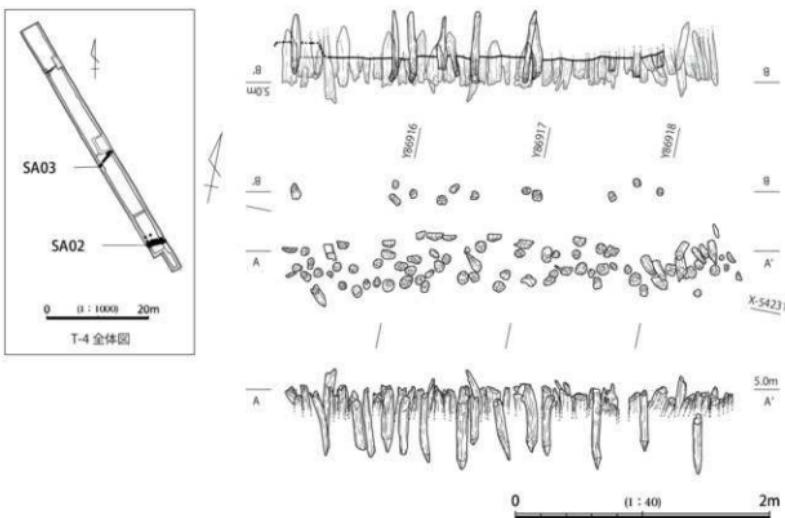
第17図 T-4 東壁土層図

## (2) 遺構 (第16図)

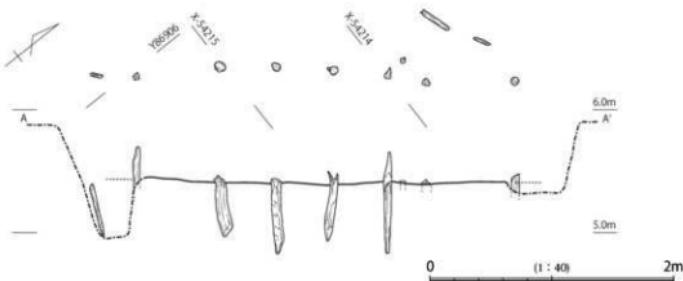
近世初頭以降に造成された水田層と現代の畦畔に沿って打たれた杭列3本を検出した。

## ① 畦畔 (第17図)

明らかな畦畔は検出できなかったが、土層A-A'から2時期の水田遺構が復元できる。II層の下の基盤面は本来は南に緩やかに下がる地形と推察されるが、段を有する平坦面の連なりが見られるこ<sup>ト</sup>から、農地造成が行われたものと考えられる。水田の時期は出土物(第21図1~3)の内、3の肥前系後期の時期から、近世初頭以降と判断される。I層は土質が粘質土であることから水田層と考えられるが、時期は不明である。



第18図 SA02 平面図・断面図



第19図 SA03 平面図・断面図

## ② SA02(第18図)

坪境推定地より2.0~3.0m離れた地点で検出した杭列である。最低2列からなる杭列と思われ、A-A'は約40cm幅に多数の杭が打ち込まれ、杭には板状のものも使用されている。B-B'は12本の杭が直線状に打たれている。洪水堆積土の上に厚く堆積した粘質土の上で検出されたもので、また、近世以降の遺物を含む層に杭の先端があり、上部が第I層の中にあることから、第I層もしくは第I層より上の層から打たれたものである。本庄川条里制とは軸が異なる、現代の杭列である。

## ③ SA03(第19図)

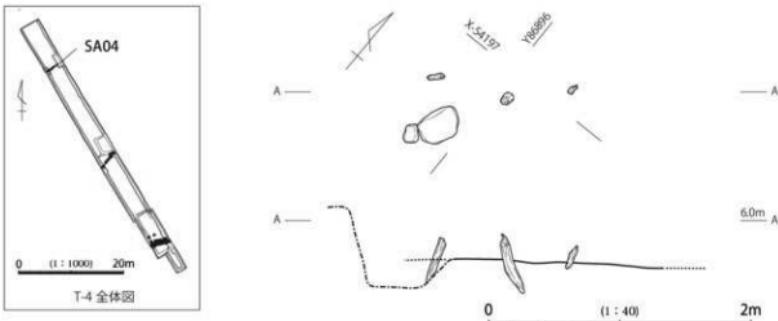
III区とIV区の境にあたる現代の畦畔に沿う杭列である。9本の杭が直線状に打たれており、先端部は自然堆積層に刺さっているが、杭の上部は現代の層の中にある。本庄川条里制とは軸が異なる、現代の杭列である。

## ④ SA04(第20図)

IV区とV区の境にあたる現代の畦畔に沿う杭列である。3本の杭が直線状に打たれており、杭の上部は現代の層の中にある。本庄川条里制とは軸が異なる、現代の杭列である。

## (3) 遺物(第21図)

第21図1は縄文土器の深鉢である。口縁から胴部にかけて断面がキャリバー状を呈するもので、外面は縦方向の二枚貝条痕、内面は横方向のナデと二枚貝条痕で調整されている。2は須恵器の甕の体部である。外面は平行文タタキ、内面は当て具痕のナデ消しがみられる。平安時代のものである。3は近世初頭の肥前系陶器の小皿である。口縁端部がやや外反し、内全面と外面上部に淡褐色の釉が施されていたと思われるが、内面の釉はほとんど剥落している。口径10.6cm。



第20図 SA04 平面図・断面図



第21図 T-4 出土遺物

### 第3節 自然科学分析

#### 本庄川流域条里制遺跡発掘調査に伴うAMS年代測定

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

##### 1. はじめに

本庄川流域条里制遺跡は本庄川と南川の成す扇状地上に立地し、松江市上本庄町、本庄町、新庄町に広がる遺跡である。今回の調査対象地域は、本庄川流域条里制遺跡南端部で、新庄町地内である。

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団からの委託を受け、本庄川流域条里制遺跡内での遺構の時期を明らかにする目的で実施・報告した、AMS年代測定に係る報告書を再編したものである。

##### 2. 試料について

公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団との協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が試料を採取した。また、以下に示す平面図及び断面図は、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団より御提供を受けた原図をもとに作成した。

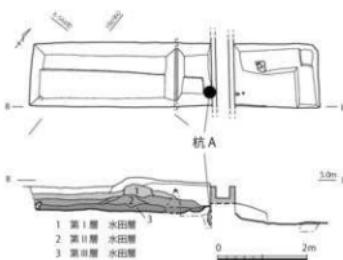
調査区及びトレンチの配置を第22図に示す。坪「寺ノ前」に設定したT-1、坪「相ヶ坪」に設定したT-2～T-4からなり、T-1で年代測定試料「杭A」、T-3で年代測定試料「木B」を採取した。第23図（T-1平面図・断面図）中に杭Aの位置を、第24図（T-3平面図）中に木Bの位置を示す。また、表1に試料一覧を示す（試料一覧には、年代測定前処理法、年代測定結果も併記。）。

##### 3. AMS年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。<sup>14</sup>C濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568年で年代計算を行った。曆年代較正にはOxCal ver. 4.4(Bronk Ramsey, 2009)を利用し、INTCAL20 (Reymer et al., 2020)、Bomb21NH2 (Hua et al., 2021)を用いた。

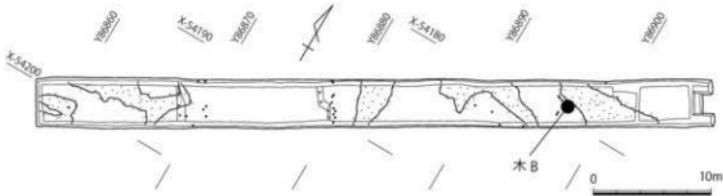


第22図 調査区配置図



第23図 T-1 平面図・断面図

（杭A採取地点）



第24図 T-3平面図

(木B採取地点)

#### 4. AMS 年代測定結果

測定結果を第1表、第25図に示す。

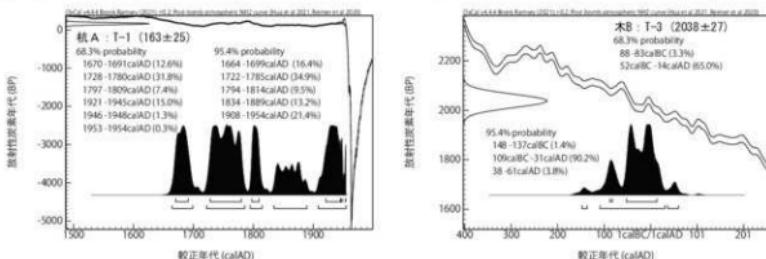
表1には、試料の詳細、前処理方法、 $\delta^{13}\text{C}$ 値と4種類の測定年代を示している。第25図にはINTCAL20(Reymer et al. 2020)、Bomb21(Hua et al. 2021)を用いた暦年較正結果を示した。また、確率分布と $\sigma$ 、 $2\sigma$ の較正範囲を示している。

#### 5. 年代測定値について

第26図に暦年較正結果一覧を示す。

表1 暦年較正結果

試料番号	調査区	出土地点 (遺構ID)	状況	重量(g)	推定時期	歴年較正結果		測定番号
						$1\sigma$ 年代範囲 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$2\sigma$ 年代範囲 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	
木A	坪「牛ノ前」	T-1	木片	1.9617	—	1629-1491 cal AD (32.6%) 1728-1780 cal AD (31.7%) 1797-1809 cal AD (7.4%) 1921-1945 cal AD (15.0%) 1946-1948 cal AD (1.3%) 1953-1954 cal AD (0.3%)	1664-1699 cal AD (16.4%) 1722-1785 cal AD (34.9%) 1794-1814 cal AD (9.5%) 1834-1889 cal AD (13.2%) 1908-1954 cal AD (21.4%)	Beia-97032
木B	坪「柏ヶ坪」	T-3	木片	1.1991	—	1629-1491 cal BC (3.2%) 1728-1780 cal BC (31.8%) 1797-1809 cal BC (7.4%) 1921-1945 cal BC (15.0%) 1946-1948 cal BC (1.3%) 1953-1954 cal BC (0.3%)	1664-1699 cal BC (1.4%) 1722-1785 cal BC (90.2%) 1794-1814 cal BC (3.8%)	Beia-97033



第25図 暦年較正結果



第26図 曆年較正結果一覧

「杭A」からは江戸時代の1664年以降、近代初頭の1954年(2σ)の年代が得られた。このことから、I層(あるいはII層上面より上位)から打ち込まれた杭であると考えられる。

「木B」からは弥生時代中期のBC148年以降、弥生時代中～後期のAD61年(2σ)の年代が得られた。

## 6. 引用文献

- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- Hua, Q., Turnbull, J. C., Santos, G. M., Rakowski, A. Z., Ancapichún, S., De Pol-Holz, R., Hammer, S., Lehman, S. J., Levin, I., Miller, J. B., Palmer, J. G., & Turney, C. S. M. (2021). Atmospheric Radiocarbon For The Period 1950–2019. Radiocarbon pp 1–23 doi:10.1017/rdc.2021.95
- Reimer, P., Austin, W., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R., Friedrich, M., Grootes, P., Guilderson, T., Hajdas, I., Heaton, T., Hogg, A., Hughen, K., Kromer, B., Manning, S., Muscheler, R., Palmer, J., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R., Richards, D., Scott, E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., & Talamo, S. (2020). The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62.

## 第4節 結語

本庄川流域条里制の遺構を調査するため、比較的残りが良いと思われる2つの坪、「寺ノ前」と「相ヶ坪」について調査を実施した。以下で、坪ごとに調査の成果をまとめて結語とする。

### 1. 坪「寺ノ前」

坪の西の現道にT-1を設定した。現道は直線で方向が条里の軸と一致しており、坪境推定ラインより坪の内側へ約10m入っている。調査の結果、現代の盛土層の下で3時期の水田層が確認され、うち2時期の畦畔が検出された。2時期の畦畔は同じ場所で造り変えられた小規模なものであることから、坪内部を細分する小畦畔と推察される。第II層の時期が中世以降であることから、中世以降から畦畔の位置が踏襲されてきたと理解される。なお、第II層の下の第III層は腐植質に富む黒褐色粘質土で、時期が確定できない湿地に堆積したような層であった。したがって、T-1の調査では古代条里の痕跡と積極的に評価できる遺構は検出することができなかった。

また、砂礫層(13層)から縄文時代後～晩期の深鉢(第9図1)が出土している。この土器は大きな破片で摩耗が少ないとから、あまり遠くないところから流されて来たものと判断され、近くに当該期の遺跡の存在が窺える。

### 2. 坪「相ヶ坪」

坪の北にT-2、東にT-3、南にT-4を設定して坪境の調査を行い、T-3とT-4では坪の中を区切る小畦畔の調査も試みた。その結果、T-2では坪境推定ラインと重なる場所で3時期の畦畔が重なって検出され、それに伴う水田層も検出された。畦畔の北辺は坪境推定ラインの北約2mにあり、「相ヶ坪」側は削平されて消失しているものの、かつては坪境にふさわしい幅の広い畦畔が存在していた可能性も想定された。広く基盤層上に残る水田層(第II層)の時期は、出土遺物から17世紀前半以降の層であり、第III層の時期は第II層以前であることから、畦畔の位置は近世以前から引き継がれている可能性もある。T-3は坪境推定ライン付近で中世後半期以降の水田層、第II層が検出された。坪境の遺構は検出されなかったものの、基盤層上面には平坦面を造成した痕跡を窺うことができた。東の坪境は本庄川が氾濫した形を示しているため、東寄りの水田層は流されている可能性が高い。時期不明の第I層では小畦畔1箇所が検出され、その下端に沿っては条里地割の軸とほぼ同じ方向を示す杭列(SAO1)が検出された。T-4は調査時には既に地表の坪境の痕跡を失っている場所で、坪境の遺構は検出されなかった。坪の内側では2時期の水田層が検出されたが、最下層(第II層)が近世初頭の遺物を含む層であった。畦畔の痕跡はみられなかったが、最下層の下面、基盤面には大小の段を伴う平坦面を造成した痕跡が見られた。したがって、T-2～T-4の調査でも古代条里の痕跡と積極的に評価できる遺構は検出することができなかった。

### 3. まとめ

本調査ではT-1とT-2で中世あるいは近世以降に造り変えられた畦畔とそれに伴う水田跡を確認することができた。明らかに古代に遡る条里制遺構の痕跡は検出できなかったものの、古代条里制地割の復元推定ライン付近で畦畔が繰り返し造り替えられている事実が明らかとなった。これにより、古代から現代まで条里に沿った畦畔が踏襲されてきた可能性は高いと考えられる。

表2 遺物観察表

## 土 器

井戸番号	種類	器種	法量 (cm)	胎 土	焼成	色 調	調整・手法の特徴	備 考
9-1	圓文土器	深鉢	口径 (35.2)	2mm以下の粒石・石英を少し含む	良好	外 黒褐色～明褐色 内 明褐色	外 ナデ 内 ナデ	
9-2	土師器	鉢	底径 (4.0)	2mm以下の粒石を少し含む	良	外 浅黄色～褐色 内 浅黄色	外 瓷化のため調整不明 内 瓷化のため調整不明	
11-1	陶器	溝縁皿	口径 (12.8)	灰	良好	外 灰白色 内 灰白色	外 施釉 内 施釉	肥前系
15-1	青磁	—	—	灰	良好	外 明緑色 内 明緑色	外 施釉 内 施釉	鹿児島
21-1	圓文土器	深鉢	—	1mm前後の石英・長石を多く含む	良好	外 淡褐色 内 淡褐色	外 一枚目表裏タテ方向 内 三枚目裏横ヨコ方向。ナデ	
21-2	須恵器	甕	—	2mm以下の砂粒を含む	やや不良 不良	外 灰色 内 灰色	外 平行文タテ牛 内 同心円文の当貝版	
21-3	陶器	皿	口径 (10.6)	鐵砂粒を含む	良	外 灰白～黃灰色 内 灰白～黃灰色	外 滲い施釉 内 施釉	肥前系

## 第4章 新庄寺ノ前遺跡

### 第1節 調査の方法と概要

#### 1. 調査の方法

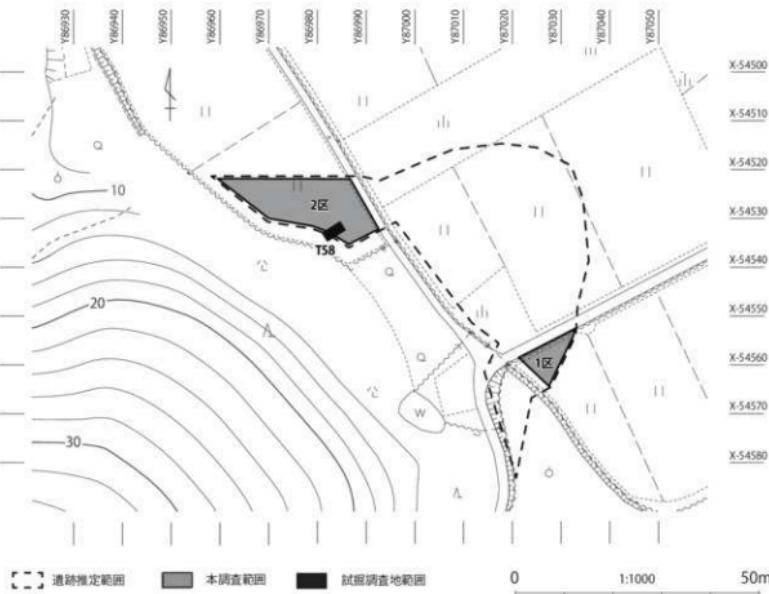
##### (1) 調査区とグリッドの設定

遺跡の範囲において工事の影響を受ける範囲が2箇所に分かれるため1、2区と呼称した(第27図)。

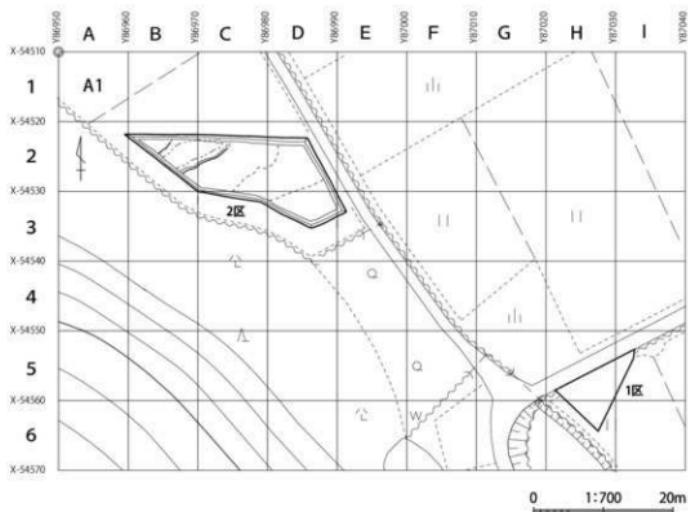
また、調査区には世界測地系平面直角座標系第III系に基づいた5m四方のグリッドを設定した。グリッドは北西角(X=-54510とY=86950の交点)を起点とし、横軸はX座標軸、縦軸はY座標軸に平行とした。列番号は基点から東に向けてアルファベット順、行番号は南に向けてアラビア数字順に付し、各区画は列・行の順に番号を繋いで呼称した。それぞれの区画は各交点の北西隅をもってグリッドの名称としている(第28図)。遺構に伴わない遺物はグリッド単位で取り上げることとした。

##### (2) 掘削方法

調査は1区を終了させて埋め戻した後に2区を開始することとした。両区とも、まず重機でトレーナー掘りを行って基盤のレベルや土層堆積状況の確認を行った。工事で削平を受けないレベルより下に存在する遺構や遺物包含層を保護するため、掘削深は工事で削平されるレベルまでとし、遺物包含層は標高を確認しながら人力で掘削することとした。



第27図 新庄寺ノ前遺跡 調査範囲図



第28図 グリッド配置図

## 2. 調査の概要

掘削前の準備として、令和2年6月16、17日に調査区の草刈りを行い、6月17～19日は現場周辺の整備を行うとともに測量を実施した。掘削は6月22日に1区から開始した。まずは重機を使用して表土掘削を行った後、層序と基盤を確認するために調査区北側に沿うトレーニチを掘削したところ土層断面で旧河道2本を検出したが、遺物や遺物包含層は検出されなかった。このトレーニチは湧水が著しく壁の一部が崩壊して隣接する道路が危険な状況となつたため、設定した調査区全体の調査は行わず、トレーニチの土層図と写真撮影を行つた後に、島根県文化財課の許可を得て6月24日に埋め戻しを行つた。

6月30日には2区の調査を開始した。まず重機を使用して表土掘削を行い、層序と基盤を確認するためのトレーニチを掘削した。土層を観察すると地山の上に大きく分けて2層の遺物包含層が確認されたので、遺物包含層の掘削は人力で行い、遺物は上層包含層と下層包含層に分けてグリッド単位で取り上げた。しかし、旧河道を切り込む落ち込みが2本検出され、その深さは工事掘削レベルより下がっており、遺物が出土していないことから掘削の深さは基盤層の標高で止めている。2区の掘削がすべて終了した後、平面図と断面図を作成し、完掘写真を撮影した。

本遺跡では延べ25日間の現地作業を行い、8月20日には島根県文化財課から調査指導を受け(写真8)、令和3年8月21日に現地調査を終了した。

本発掘調査では、縄文土器の破片が21点、弥生土器の破片が12点、土師器の破片がコンテナ1箱、須恵器の破片がコンテナ1箱、陶磁器の破片が25点、石製品(黒曜石、メノウ、玉髓)がビニール袋1袋、木製品(杭の一部を含む)がコンテナ1箱出土した。

### 3. 基本層序

調査地の地目は水田である。土地の傾斜は少なく、1区は標高3.5～3.7m、2区は標高4.7mを測り、調査区は南東に低い。以下では1、2区に分けて層序について述べる。

#### (1) 1区の土層(第29図)

北壁A-A'を見ると、上から盛土層(表土:1層)、現代の耕作土(2層)があり、その下の4、5層については土質から水田層であった可能性も考えられるが、明確ではない。6層以下は礫が混じる層であるため河川の氾濫による堆積層と考えられる。青灰色シルト層(11層)がこの辺りの基盤層で、これを切る旧河道2本が検出された。

#### (2) 2区の土層(A-A'～E-E')(第31図)

北壁A-A'を見ると、現代の耕作土層(表土:1層)の下にかつての水田層の可能性がある黄灰色粘質土(2層)、褐灰色粘質土(3層)が堆積し、その下に遺物包含層が2層堆積している。上の偽礫が混じる褐灰色粘質土(4層)を「包含層上層」とし、その下の褐灰色粘質土(5層)を「包含層下層」として取り上げを行っている。この2層ある遺物包含層は水田層の可能性も考えられたことから、土壤サンプリングを行って珪酸体分析を依頼し、その成果を第4節に掲載している。また、B-B'で、4層の下に位置するオリーブ黒色粘質土(6層)も「包含層下層」として扱っている。「包含層上層」、「包含層下層」ともローリングした弥生時代～中世までの遺物が混じった二次的な包含層である。遺物包含層の下が緑色礫層(21層)の基盤層であるが、基盤層直上の「包含層下層」から縄文時代の土器や石製品が比較的多く出土している。土層としては把握できていないが、ところどころに縄文時代の浅い土層が残っている可能性があるため、これらについては基盤層直上遺物として掲載を行う。

基盤層(21層)は、2本の自然流路(NR01、NR02)で切られている。



写真6 土層検出風景(1区)



写真7 包含層掘削風景(2区)



写真8 島根県担当者による調査指導風景



写真9 島根県担当者による遺物指導風景

## 第2節 調査成果

### 1. 1区の調査成果

遺構、遺物とも検出されなかった。

基盤層を切る自然流路跡 2本を検出したが、湧水が著しく危険であるため面的な掘削は行っていない。

### 2. 2区の調査成果

地山(20層: 明緑灰色粘土)を切る自然流路跡 2本(NR01、NR02)を検出した(第30図)。これらの下端は工事掘削レベルである標高 3.83m よりかなり低くなるため、遺物が含まれるか否かを確認するために一部について深掘りを行ったところ、次のような状況であった。

#### ① NR01

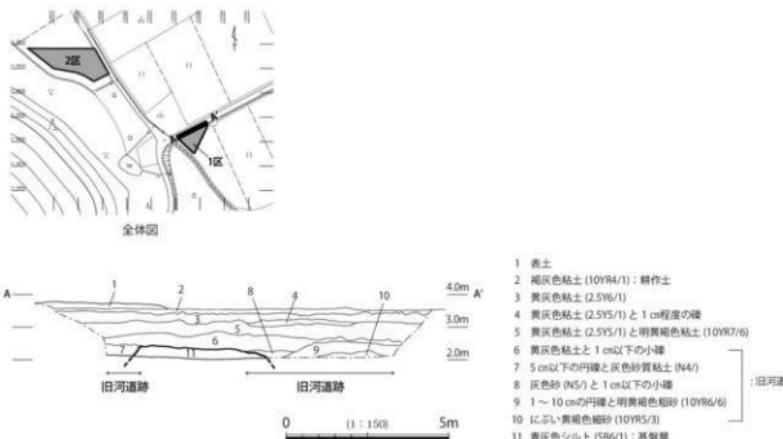
埋土は礫と砂が交互に堆積している。部分的には木の枝や葉を大量に含む層もあり、木には方向性はみられなかった。調査対象の深さ以下の調査は行っていないが、遺物は出土していない。

#### ② NR02

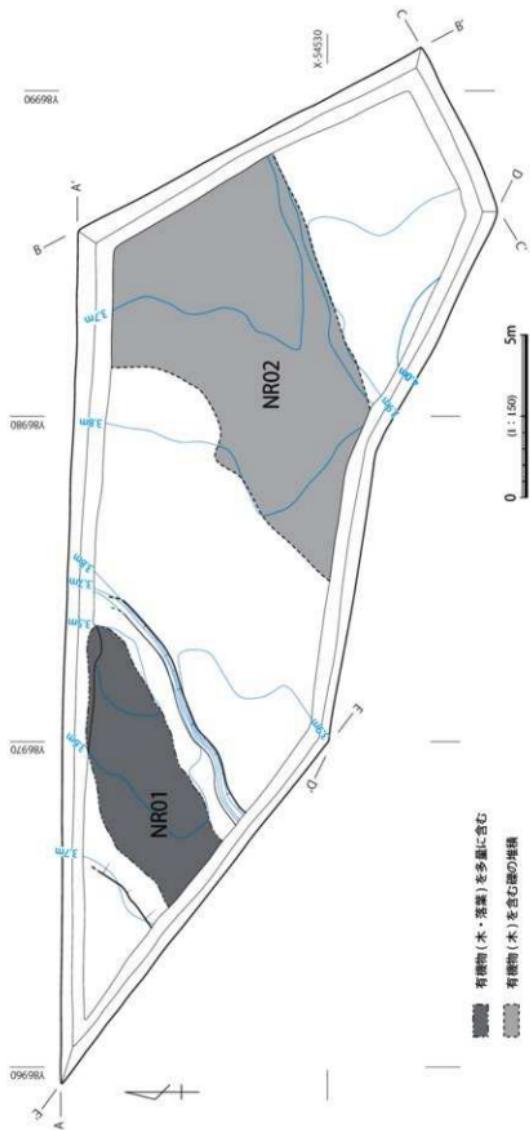
埋土は礫と砂が交互に堆積している。遺物は出土していない。

上記のとおり自然流路 2 本は有機質を含む堆積層がみられたものの、遺物は出土していないことから基盤の一部と捉えることとした。基盤面で遺構は検出されなかった(第30図)。

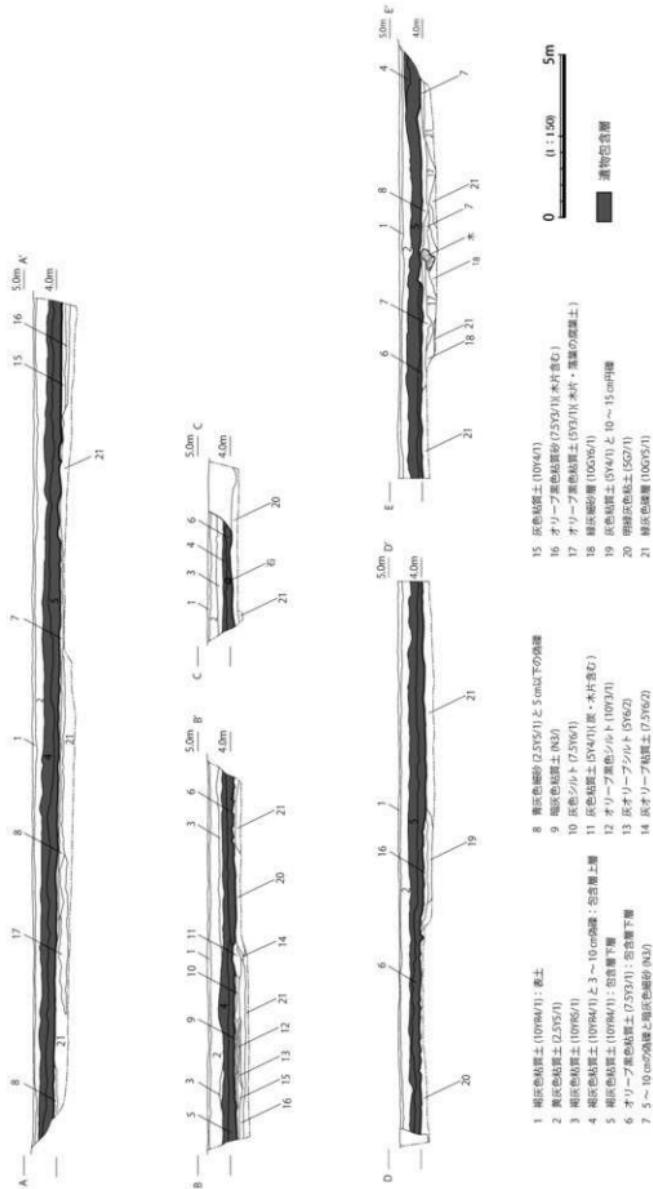
遺物については、標高 4.5m で、厚さ約 50cm の遺物包含層を検出した。この遺物包含層は大きく 2 層に分けられたので、上層を「包含層上層」、下層を「包含層下層」として遺物を取り上げた。両層ともに縄文時代から中世にかけての遺物が混在する状況である。このうち縄文時代の遺物は、洪水



第29図 1区 北壁土層図



第30図 2区平面図



第31図 2区土層図

堆積層である基盤層直上からしか出土しておらず、壁面で土層としては確認できていないが、部分的に古い層が薄く残っている可能性が考えられたため、「包含層下層」のうち、基盤層直上から出土した遺物を「基盤層直上出土遺物」として取り上げている。

以下で各層から出土した遺物について述べる。

#### 包含層上層出土遺物(第32図)

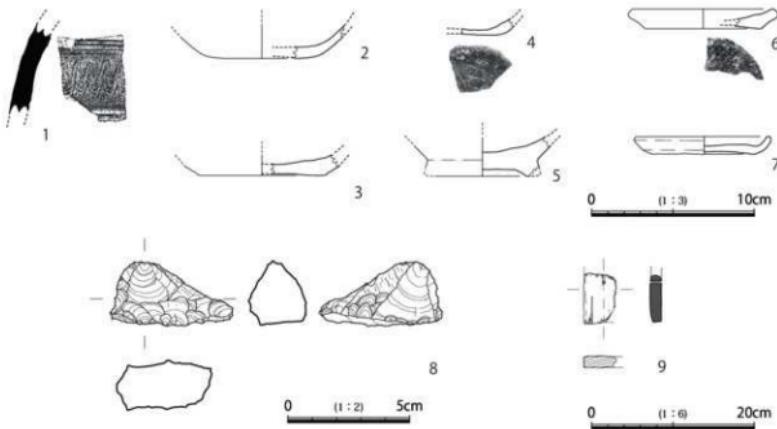
第32図1は須恵器の甕の口縁部である。外面は沈線と波状文が施され、内面は回転ナデで調整されている。2~4は中世の土師器の环である。器面は風化が著しい。全て内外面は回転ナデで、4は底部の回転系切り痕が確認できる。2は底径6.0cm、3は底径7.8cm。5は高台付きの环で、器壁、高台とも厚みがある。底外面にはかすかに糸切りの痕跡が残るが、器面風化が著しい。6、7は中世の土師器の皿である。ともに風化が著しく器面調整は分かりにくいか、6の底部には糸切り痕が残る。6は口径9.2cm、底径7.2cm、器高1.2cm。7は口径8.4cm、底径6.3cm、器高1.1cm。

第32図8は石製品である。黒曜石の小石核で、1辺に連続剥離が施されている。縦2.5cm、横5.0cm、厚さ2.0cm、重量26.39g。

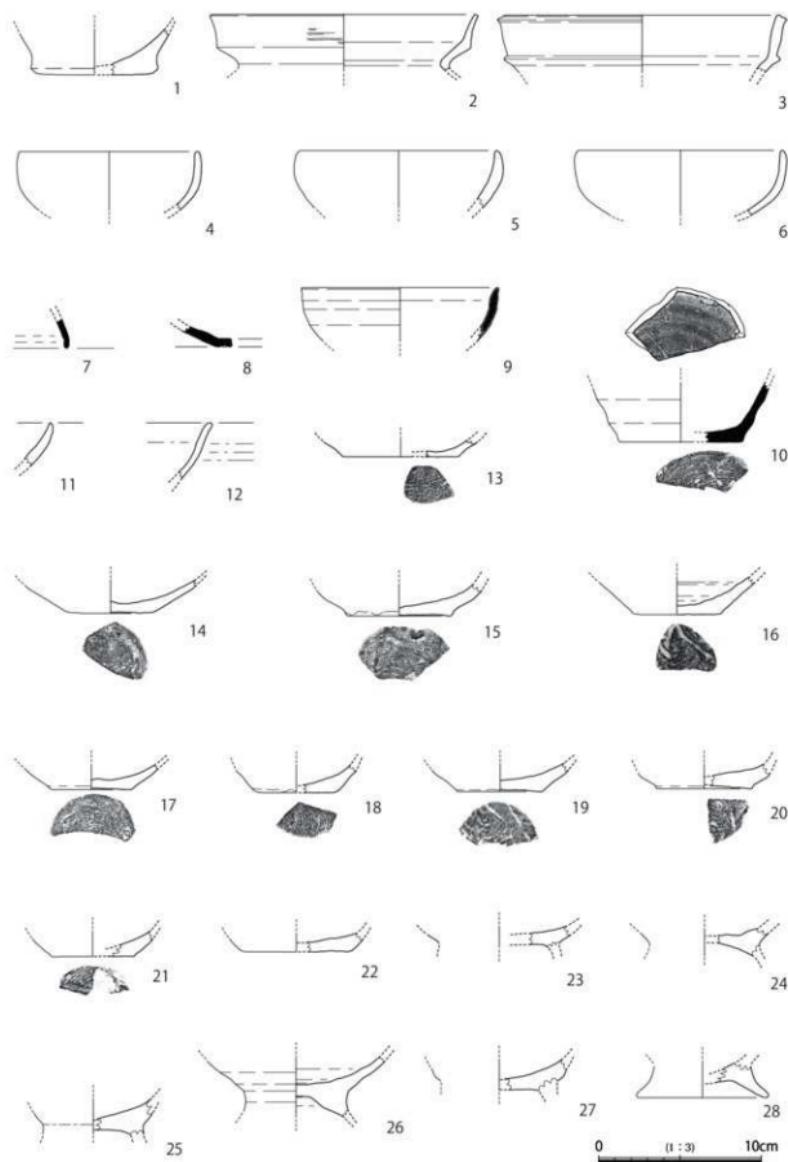
第32図9は木製品である。厚さ2.0cmの板状の用途不明品である。端から5cmのところに木釘が残存している。

#### 包含層下層出土遺物(第33、34図)

第33図1は繩文土器の深鉢の底部で、立ち上がりの器壁が薄い。底径7.2cm。2は弥生時代後期の甕で、複合口縁の外面に最低4本の擬凹線が巡らされている。外面に炭化物が付着している。口径16.5cm、頸径13.0cm。3~6は古墳時代の土師器で、3は前期の壺の口縁部である。複合口縁の稜は丸味を帯びて水平方向に突出し、肥厚した口縁端部には平坦面が作られている。口径17.0cm。

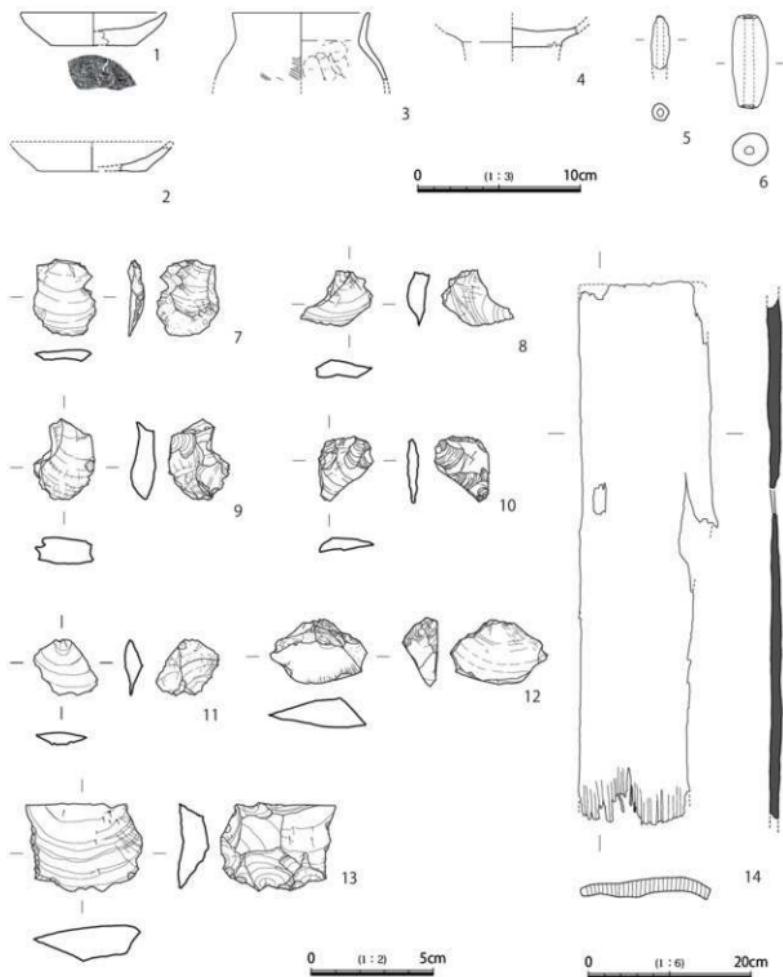


第32図 2区包含層上層出土遺物



第33図 2区包含層下層出土遺物(1)

4～6は中期頃の杯で、すべて風化して内外面とも調整は不明である。4は口径11.0cm、5は口径12.0cm、6は口径12.5cm。7は古墳時代後期の須恵器の杯蓋で、口縁端部内面には丸味のある工具で浅い沈線が巡らされている。8～10は古代の須恵器で、8は杯蓋である。口縁端部は断面がS字状となるものである。9は無高台の杯の口縁部で、器壁が丸味を帯びるものである。口径12.2cm。



第34図 2区包含層下層出土遺物(2)

10は無高台の坏で、器壁が直線的に立ち上がり、底部は糸切の痕跡が残る。見込みにヘラ記号が描かれている。底径7.6cm。11～27は古代末～中世初頭の土師器と思われる。11、12は坏の口縁部で、11は端部が内傾するもの、12は端部がやや開くものである。13～22は無高台の坏である。23～28は高台付の坏である。28はほぼ坏部を失った高台部で、底径8.1cm。

第34図1、2は中世土師器の皿である。1は底部が厚い。外面は回転ナデ、底部は糸切りの痕跡が残る。口径8.9cm、底径5.4cm、器高2.1cm。2は器壁が薄いもので、風化のため調整不明である。内面に炭化物が付着している。底径6.5cm。3は土師器の壺である。胴部外面は目の細かいハケメ、内面はケズリ後に軽いナデ、口縁は横ナデが施されている。外面のハケメの溝には炭化物が入り込んでいる。口径9.2cm、頸径8.0cm。4は白磁碗の底部である。見込みには円形の段が設けられ、高台は削り出しで、大半を欠損している。大宰府編年IV～V類に該当する、12世紀頃のものである。

第34図5、6は土師質の土鍤である。5は赤みを帯びた小型品で、一端を欠損している。最大径1.2cm、孔径0.4cm。6は淡灰色を呈するやや大きめのものである。全長6.3cm、最大径2.3cm、孔径0.6cm。

7～13は石製品である。すべて黒曜石の剥片である。11と13には連続剝離痕がみられる。

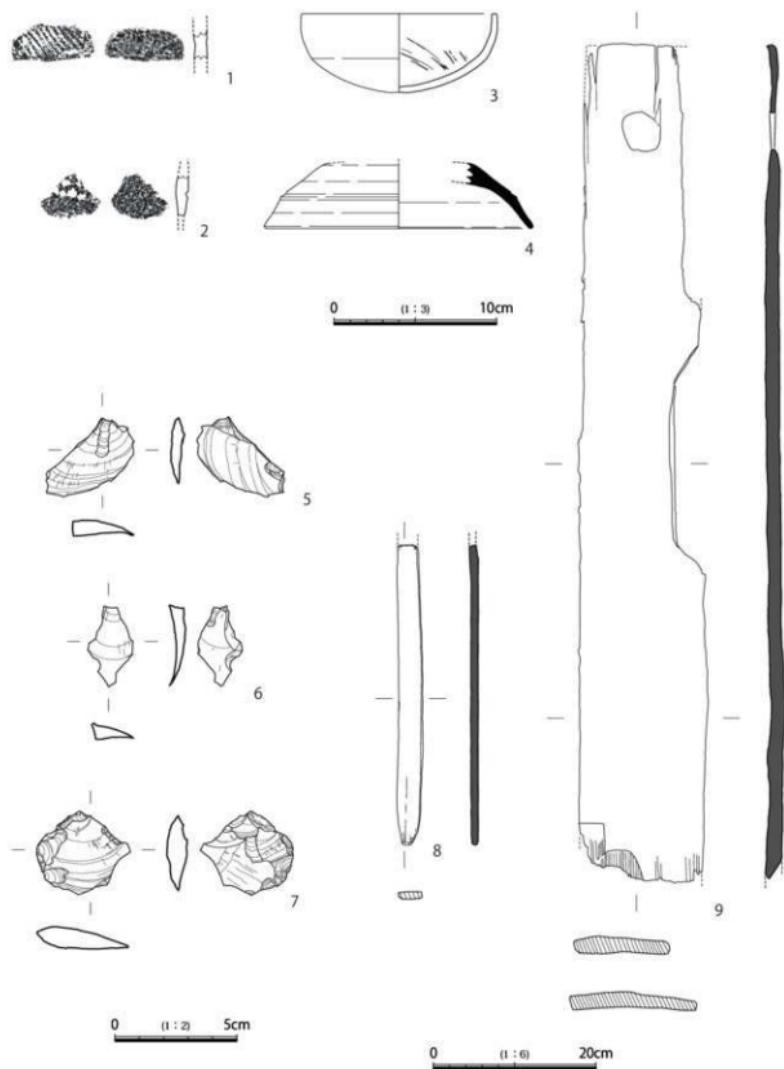
第34図14は木製品である。幅16.0cm、厚さ2.0cmの板状の用途不明品である。端から1.3cmのところに $1.5 \times 4.0$ cmの楕円形の孔が穿たれている。片方の端部は欠損している。

#### 基盤層直上出土遺物(第35図)

第35図1、2は繩文土器で、1は深鉢と思われる。外面は撚糸繩文、内面はナデによる調整である。2は器種不明である。外面、内面ともナデ調整が行われ、外面には連続刺突が上下2段に施されている。刺突の形状は円錐形を呈して先端が尖ることから巻貝が利用された可能性が考えられる。3は古墳時代中期の土師器の坏である。外面は風化、内面も風化しているが、一部には斜方向の暗文が観察できる。口径12.0cm、器高4.8cm。4は古墳時代後期の須恵器の蓋である。肩部の段は2本の沈線に変化しており、口縁内面端部に段や沈線はみられない。天井部分は器壁が厚く、回転ヘラケズリが施されておらず、口縁端部は外に反っている。焼成時のひび割れがみられることから、乾燥不足の可能性がある。口径12.5cm。

第35図5～7は石製品である。いずれも黒曜石の剥片である。5は縦3.2cm、横2.5cm、最大厚0.5cm、重量4.66g。6は縦3.3cm、横1.8cm、最大厚0.4cm、重量2.09g。7は縦3.3cm、横3.7cm、最大厚0.8cm、重量9.78g。

第35図8、9は木製品である。8は幅3.0cm、厚さ0.9cmの細い板状の用途不明品である。端部が丸味を帯びてそぼむもので、反対側の端部は欠損している。9は幅15.4cm、厚さ1.9cmの板状の用途不明品である。片側の中央部が台形状にカットされ、端部から9cmの所に径3.5～4.0cmの円形の孔が穿たれている。



第35図 2区基盤層直上出土遺物

### 第3節 自然科学分析

#### 新庄寺ノ前遺跡内の農耕と周辺地域の森林植生

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

##### 1. はじめに

新庄寺ノ前遺跡は、島根県東部、松江市新庄町地内に位置し、本庄川、南川の成す扇状地上に広がる「本庄川流域条里制遺跡」の一画を成す遺跡である。

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団からの委託を受け、新庄寺ノ前遺跡内での農耕の実態を明らかにする目的で実施・報告した花粉分析、植物珪酸体分析に係る報告書を再編したものである。

##### 2. 試料について

分析試料は、(公財)松江市スポーツ・文化振興財団との協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が採取した。また、以下に示す平面図及び断面図は、(公財)松江市スポーツ・文化振興財団より御提供を受けた原図をもとに、作成した。

調査区(2区)平面図(第36図)中に、試料採取地点を示す。試料採取地点近辺の断面図(第37図)中の「①」～「③」で分析試料を採取した。

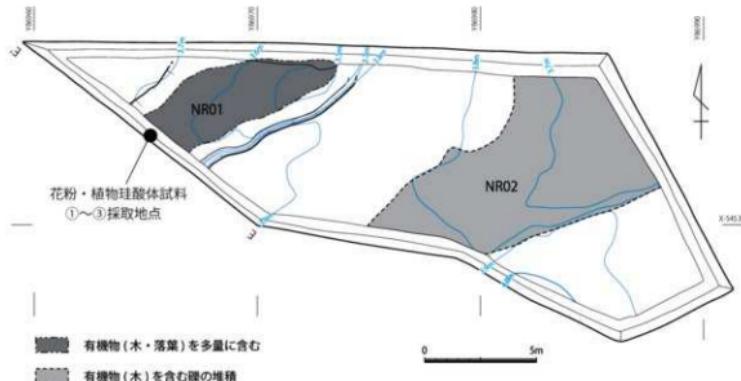
##### 3. 分析方法

###### (1) 微化石概査方法

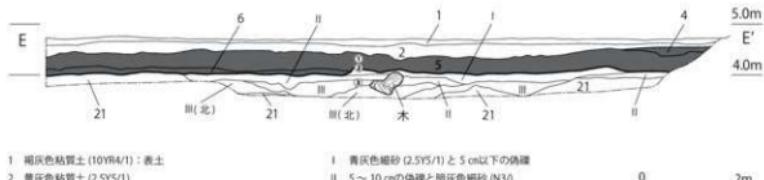
花粉分析用プレパラート及び花粉分析処理残渣を顕微鏡下で観察し、花粉(胞子)、植物片、微粒炭、珪藻、植物珪酸体、火山ガラスの含有状況を5段階で示した。

###### (2) 花粉分析方法

渡辺(2010)に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで



第36図 調査区平面図及び試料採取地点



1 褐灰色粘質土 (TOYRA/1) : 表土  
2 黄灰色粘質土 (2.5YS/1)  
3 褐灰色粘質土 (TOYRA/1) と 3 ~ 10 cm 佛縫 : 包含層上層  
4 褐灰色粘質土 (TOYRA/1) : 包含層下層  
5 褐灰色粘質土 (TOYRA/1)  
6 オリーブ褐色粘質土  
21 緑灰色堆層 (10GY5/1)

I 青灰色細砂 (2.5YS/1) と 5 cm以下の佛縫  
II 5 ~ 10 cmの佛縫と暗灰色細砂 (N3/1)  
III オリーブ褐色粘質土 (2.5YJ/1) / 木片、落葉の腐葉土  
III(北) 緑灰色細砂層 (5G7/1)

0 2m

第37図 試料採取地点断面図（花粉分析試料採取位置）

同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の

同定も行った。また中村 (1974) に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科 (40ミクロン以上) と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科 (40ミクロン未満) に細分した。

### (3) 植物珪酸体分析方法

藤原 (1976) のグラスビーズ法に従って実施した。プレバラートの観察・同定は、光学顕微鏡により常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。同定に際して、母植物との対応が明らかでない、イネ亜科の機動細胞を中心とした分類群 (表3) を対象とした。また、植物珪酸体と一緒に計数したグラスビーズの個数が

300を超えるまで、計数を行った。

## 4. 分析結果

### (1) 微化石概査結果

微化石概査結果を、表4に示す。

全ての試料で花粉 (胞子) の含有量が多く、統計

処理に十分な量の木本花粉が検出された。また、上位の試料No.1、2では微粒炭、植物珪酸体の含有量が多かったが、下位の試料No.3ではこれらの含有量が少なく植物片が多く検出された。

### (2) 花粉分析結果

分析結果を第38図の花粉ダイアグラム、表5の花粉組成表に示す。

花粉ダイアグラムでは、分類ごとに百分率 (百分率の算出には、木本花粉総数を基準にして) を、分類群ごとに異なるハッチのスペクトルで表している。このほか、[総合ダイアグラム]として分類群ごとの割合を示したほか、[含有量ダイアグラム]として分類群ごとに含有量 (湿潤試料1g中の粒数) を算出し、変化を示している。

表3 同定対象分類群

同定レベル	コード	分類群	判定する直接植物
3	3 イネ科	イネ科	イネ
21	21 ムギ属 (穀の表皮細胞)	ムギ	コモギ、オオムギ
61	61 キビ属 (穀の表皮細胞)	キビ	ノホウキ、アワ、キビ
62	62 キビ属型	キビ	
64	64 エンドコロクサ属型	ヒエ	ヒエ
65	65 ノホウキ属型	ノホウキ	ノホウキ
91	91 キロコ属	キロコ	モコシ
93	93 ジュズブタ属型	ハマゴミ	
4	11 サヤシタグサ属	サヤシタグサ	サヤシタグサ、アシカキ
13	13 マコモ属	マコモ	
21	21 ムギ属	ムギ	
23	23 グンザク属	グンザク	
35	35 スマガヤ属	スマガヤ	
51	51 シバ属	シバ属	
71	71 トダシ属 (穀)	トダシ属	
83	83 ノホウキ属	ノホウキ	
93	93 ノホウキ属	ノホウキ	ノホウキなど
201	201 メダカ科型	メダカ科	
203	203 ノササ属型	ノササ	
205	205 テマキササ属型	テマキササ	テマキササ、チシマザサ
206	206 ワカツササ属型	ワカツササ	ワカツササ
350	350 カヤフリグサ科 (スゲ属など)	スゲ属	
390	390 シダ属	シダ	
501	501 ブナ科 (シイ属)	シイ属	
502	502 ノホウキ科 (カシガニ属)	カシガニ	
510	510 クラクサ科	クラクサ	クラクサ
520	520 マンサク科 (イスノキ属)	イスノキ	イスノキなど (クスノキ以外)
530	530 アワブキ科	アワブキ	
540	540 モレンジ属	モレンジ	
570	570 マツ科	マツ	
580	580 ツノクサ属	ツノクサ	

表4 微化石概査結果

試料No.	花粉	微粒炭	植物片	珪藻	植物珪酸体	火山ガラス
1	◎	○	△	×	○	△X
2	◎	○	△	△X	○	△X
3	○	△	◎	×	△X	△

凡例 ◎：十分な数量が検出できる ○：少ないが検出できる

△：非常に少ない △X：極めてまれに検出できる ×：検出できない

新庄寺ノ前遺跡DK



第38図 花粉ダイアグラム

表5 花粉組成表

地層	試料No.	5層			III層		
		1	2	3			
3 <i>Podocarpus</i>	マキ属				9	4.4%	
5 <i>Abies</i>	モミ属	8	3.2%	3	1.5%	11	5.4%
10 <i>Tsuga</i>	ツガ属	1	0.4%	3	1.5%		
21 <i>Pinus (Diploxylon)</i>	マツ属(複管束亞属)	132	53.4%	110	54.2%	13	6.4%
32 <i>Cryptomeria</i>	スギ属	21	8.5%	19	9.4%	6	3.0%
41 <i>Cupressaceae type</i>	ヒキイリ型	1	0.4%	2	1.0%		
62 <i>Pterocarya-Juglans</i>	サワグルミ属ークルミ属				7	3.4%	
71 <i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属ーアサダ属	9	3.6%	9	4.4%	47	23.2%
74 <i>Betula</i>	カバノキ属	1	0.4%	3	1.5%		
75 <i>Alnus</i>	ハンノキ属	1	0.4%				
80 <i>Fagus</i>	ブナ属	7	2.8%	4	2.0%	1	0.5%
81 <i>Fagus crenata type</i>	ブナ型	2	0.8%				
82 <i>Fagus japonica type</i>	イヌクチナ型	4	1.6%	1	0.5%		
83 <i>Quercus</i>	コラマツ属	31	12.6%	27	13.3%	4	2.0%
84 <i>Cyclobalanopsis</i>	アカガシ属	19	7.7%	16	7.9%	94	46.3%
92 <i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属ーケヤキ属	7	2.8%	4	2.0%	8	3.9%
94 <i>Celtis-Aphananthe</i>	エキキ属ームクノキ属	1	0.4%			3	1.5%
97 <i>Moraceae-Urticaceae</i>	クワ科ーイクラサ科	2	0.8%				
206 <i>Comus</i>	ミキモ属			1	0.5%		
305 <i>Allium</i>	サジオダカ属	3	1.2%	3	1.5%		
306 <i>Sagittaria</i>	オモコカ属	11	4.5%	4	2.0%		
311 <i>Gramineae(&lt;40)</i>	イネ科(40ミクロン未満)	59	23.9%	64	31.5%	3	1.5%
312 <i>Gramineae(&gt;40)</i>	イネ科(40ミクロン以上)	294	119.0%	163	80.3%	1	0.5%
320 <i>Cyperaceae</i>	カヤソリグサ科	33	13.4%	32	15.8%		
345 <i>Liliaceae</i>	ユリ科	1	0.4%				
416 <i>Echinocaulon-Persicaria</i>	ウナギボウカミ節ーサナエタデ節	5	2.0%	6	3.0%		
430 <i>Garyophyllaceae</i>	ナデシコ科	2	0.8%				
450 <i>Ranunculaceae</i>	キンポウゲ科	3	1.2%	2	1.0%	1	0.5%
710 <i>Carduoideae</i>	キク亜科	1	0.4%	2	1.0%		
711 <i>Ambrosia-Xanthium</i>	ブタクサ属ーオナモ属			2	1.0%		
712 <i>Artemisia</i>	ヨモギ属	3	1.2%	1	0.5%		
720 <i>Cichorioideae</i>	ターポビア科	1	0.4%	3	1.5%		
863 <i>Osmunda cinnamomea type</i>	ヤマゼンマイ型			1	0.5%		
875 <i>Davallia</i>	シダ属	2	0.8%				
881 <i>Pteridaceae</i>	イモトソウ科	1	0.4%	2	1.0%	21	10.3%
886 <i>Aspid.-Aspil.</i>	オシダ科ーチャセンシダ科	5	2.0%	3	1.5%	14	6.9%
891 <i>Polypodiaceae</i>	ウラボシ科	2	0.8%			1	0.5%
898 <i>MONOLATE-TYPE-SPORE</i>	単柔溝胞子	5	2.0%	3	1.5%	18	8.9%
899 <i>TRIULATE-TYPE-SPORE</i>	三條溝胞子	51	20.6%	8	3.9%	2	1.0%
木本(針葉樹)		163	22.4%	138	27.5%	39	14.8%
木本(広葉樹)		84	11.5%	65	12.9%	164	62.1%
草本・藤本		416	57.1%	282	56.2%	5	1.9%
孢子		66	9.1%	17	3.4%	56	21.2%
总数		729		502		264	
含有量(粒数/g)		28.415		18.194		21.882	

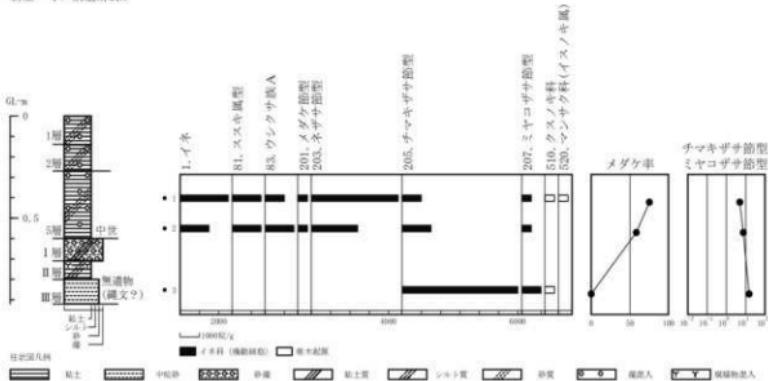
左よりカウント粒数、百分率

## (3) 植物珪酸体分析結果

分析結果を第39図の植物珪酸体ダイアグラム、表6の植物珪酸体分析組成表に示す。

植物珪酸体ダイアグラムでは、検出密度を分類群ごとにスペクトルで表している(イネ科(機動細

新庄 寺ノ前遺跡2区



第39図 植物珪酸体ダイアグラム

胞)は黒、樹木起源は白のスペクトルで表した。また、寒暖の指標である「メダケ率」と、関東地方での積雪量の指標である「チマキサ節型/ミヤコザサ節型」をグラフで示した。

##### 5. 局地花粉帯の設定

花粉分析結果(花粉化石群集の変遷)を基に、局地花粉帯を設定した。花粉化石群集の変遷を明白にするために、下位から上位に向かって記載する。

###### (1) II带(試料No.3)

アカガシ亞属が高率を占め、クマシデ属・アサダ属が続く。

###### (2) I带(試料No.2, 1)

マツ属(複雑管束亞属)が高率を占め、コナラ属、スギ属、アカガシ亞属が続く。

##### 6. 既知の分析結果との比較

松江市内では主に中海・宍道湖地域として括される松江平野北東部、宍道湖湖底、中海湖底で

花粉分析が行われており、本庄地域では本庄川扇状地上(本庄川流域条里遺跡)で分析例があるのでみである(渡辺、1998)。ここでは古墳時代から中世にかけての堆積物を対象に分析が行われていた。更にII、I帶の局地花粉帯が設定され、中海・宍道湖地域の地域花粉帯との比較・対比から下位のII帶が古墳時代、上位のI帶が古墳時代～中世の植生を示しているとされた。

本庄川流域条里遺跡の分析結果と今回の分析結果を比較すると、今回のI帶がマツ属(複雑管束亞

表6 花粉組成表

地層	試料No.			Ⅲ層
	1	2	3	
1.イネ	5 25 0.73	3 15 0.43	-	-
81.ススキ属型	3 15 0.18	3 15 0.18	-	-
83.ウシクサ族A	2 10 -	3 15 -	-	-
201.メダケ節型	1 5 0.06	1 5 0.06	-	-
203.ネザ節型	9 45 0.21	5 24 0.12	-	-
205.チマキサ節型	2 10 0.07	3 15 0.11	12 60 0.45	-
207.ミヤコザ節型	8 0.01	8 0.01	-	2
510.クスノキ科	1 5 -	- -	- 5	-
520.マンサク科(イスノキ属)	1 5 -	- -	- -	-
ブリント・オバール総数	159	107	105	-
カツラ・カガシビース数	40	47	49	-
スギ・アカガシ数	649	664	574	-
試料重量(×0.0001g)	6700	8710	8990	-
ガラビーズ重量(×0.0001g)	232	231	231	-
メダケ率(%)	75.3	58.3	0.0	-
チマキサ節型/ミヤコザ節型	5.00	7.50	15.00	-

上段 株出粒数

中段 株出密度(単位: ×100粒/g)

下段 推定生産量(単位: kg/m²·cm)

属)が高率を示し、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属を伴うことから、本庄川流域条里遺跡でのI帶b亜帯と類似する。ただし、本庄川流域条里遺跡ではシイノキ属・マテバシイ属が数%出現し、今回の結果では検出されないなどの差異が認められている。シイノキ属・マテバシイ属花粉は散布距離が短いことが知られており、シイノキ類が近辺に存在しなかったとすれば両地点の局地花粉帯を対比することは可能である。また、今回I帶とした5層は出土遺物から中世の堆積と考えられており、局地花粉帯の対比結果とも一致する。

一方、今回のII帶に対応する局地花粉帯は本庄川流域条里遺跡では得られていなかった。中海・宍道湖地域の標準的な地域花粉帯は、宍道湖湖底のSB1ボーリングで得られている(大西ほか、1990)。今回II帶としたアカガシ亜属が高率を示し、クマシデ属・アサダ属を伴う花粉化石群集は、SB1ボーリングでは区分7~5で認められる特徴であり、縄文時代前期~後期の植生を示すとされている。したがって、今回のII帶は縄文時代の植生を示している可能性があり、III層は縄文時代の堆積物である可能性がある。

## 7. 古植生について

植物珪酸体分析結果・花粉分析結果を基に、調査地周辺の古植生変遷について、設定した局地花粉帯ごとに考察する。

### (1) II帶(III層、試料No.3): 縄文時代?

#### ① 近辺の植生

草本・藤本花粉がほとんど検出されず、イネ科由来の植物珪酸体もササ類以外は検出されないことから、調査地に林分が迫っていたものと考えられる。また、試料を採取した凹地は植生に乏しい開放的な状態であったと考えられる。僅かに検出されたイネ科(40ミロン未満)花粉は、林床から林縁に生育したチマキザサ類に由来すると考えられる。

またチマキザサは比較的冷涼で積雪量の多い地域に認められることから、時期が特定できないものの、この時期はI帶の時期に比べやや冷涼で多雪であった可能性がある。

#### ② 周囲の森林植生

一般にササ類はカシ類やクスノキ類の生育する常緑広葉樹林(照葉樹林)内では生育せず、落葉広葉樹林の林床や林縁、草地で生育する。このことから南川、あるいは本庄川やそのほかの小河川沿いにはシデ類を主要素とする落葉広葉樹林が分布していたと考えられる。サワグルミ属・クルミ属やニレ属・ケヤキ属、エノキ属・ムクノキ属などの河畔林要素の花粉も低率ながら検出されることから、シデ類にクルミ類やケヤキ類、エノキ類などを混交した林であったと考えられる。

また、背後の丘陵にはカシ類や植物珪酸体の検出されたクスノキ類が照葉樹林を形成していたものと考えられる。ここにはマキ類やモミなどの針葉樹が混交していた可能性があるほか、これらの樹種が北山山地高所に分布した温帯針葉樹林に由来する可能性もある。

### (2) I帶期(5層、試料No.2、1): 中世頃

#### ① 近辺の植生

イネ科(40ミロン以上)花粉のほかイネ科(40ミロン未満)、カヤツリグサ科の花粉が急増し、サジオモ

ダカ属、オモダカ属などの水田雜草も伴う。また植物珪酸体分析ではヨシなどの湿性イネ科が検出されないもののイネが検出され、5層が水平堆積を示すことから、調査地が水田であったと考えられる。

II帯から種類の構成が変わるものササ類が多く検出され、林縁から水田の近くまでササ類が生育していたと考えられる。一方でススキ属型やウシクサ族Aの植物珪酸体も検出されることから、部分的にはススキ類やチガヤ類が生育していた草地も存在したと考えられる。

#### ②周囲の山地植生

マツ属(複雑管束亜属)花粉が高率を示すことから開発に伴い周辺地域の丘陵はアカマツ林で覆われたようになつたと考えられる。一方でアカガシ亜属花粉やクスノキ科、イスノキ属植物珪酸体が検出され、近辺には僅かに照葉樹林が残っていたものと考えられる。僅かに検出されるモミ属やツガ属の花粉は、アカマツ林や照葉樹林に混交していたモミやツガに由来するほか、北山山地高所に分布した温帶針葉樹林に由来する可能性もある。また、先のクマシデ属・アサダ属、ニレ属・ケヤキ属やエノキ属・ムクノキ属花粉も僅かに検出され、やや離れた南川、あるいは本庄川やそのほかの小河川沿いに河畔林を成していたと考えられる。

### 8.まとめ

新庄寺ノ前遺跡において、花粉分析、植物珪酸体分析を実施した。この結果、以下の事柄が明らかになった。

(1) 花粉分析結果(花粉化石群集の変遷)を基に、局地花粉帯Ⅱ、Ⅰ帯を設定した。既知の花粉分析結果との比較対比などから、II帯は縄文時代(前～後期)?、I帯は中世の植生を示していると考えられた。

(2) 局地花粉帯ごとに、古植生を推定した。特筆すべき事柄は、以下の通りである。

① I帯の時期には調査地は水田であった。

② II帯の時期には、調査地の近くまで森林(照葉樹林や河畔林)が迫っていた。

③ I帯の時期には丘陵上にアカマツ林が広がっていたほか、局的に照葉樹林や河畔林が認められた。

### 9.参考文献

大西郁夫・千場英樹・中谷紀子(1990)穴道湖湖底下完新統の花粉群、島根大学地質学研究報告、9、117-127.

中村 純(1974)イネ科花粉について、特にイネを中心として、第四紀研究、13,187-197.

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(I)一数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法一、考古学と自然科学、9、15-29.

渡辺正巳(1998)本庄川流域条里遺跡発掘調査に伴う花粉分析、荒船古墳群・荒船遺跡 本庄川流域条里遺跡(2)国道431号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書、VI、37-46、島根県教育庁文化財課・島根県埋蔵文化財調査センター。

渡辺正巳(2010)花粉分析法、必携 考古資料の自然科学調査法、174-177、ニュー・サイエンス社。

写真10 頭微鏡写真(花粉化石)

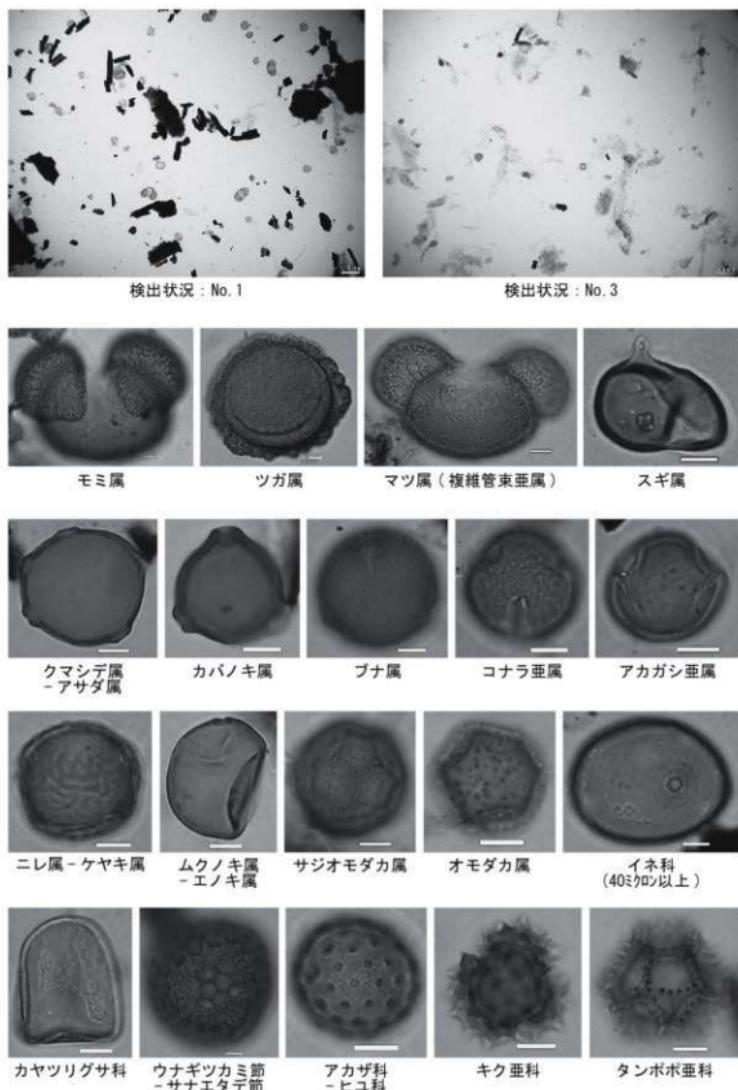
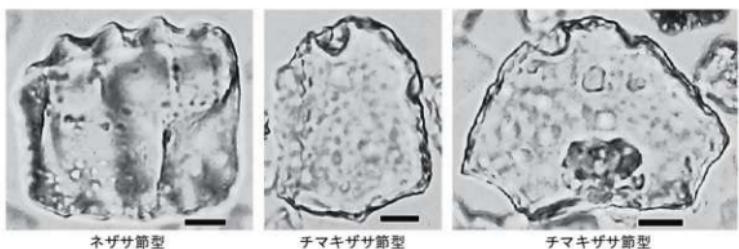
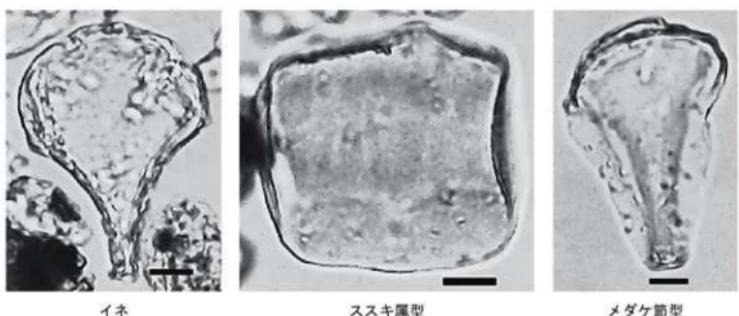


写真 11 頭微鏡写真(植物珪酸体化石)



クスノキ科

スケールはすべて 0.01 mm

#### 第4節 結語

本遺跡は本庄川扇状地の条里制遺跡の南東の山裾に位置している。

調査を行った結果、1区では遺物、遺構とも検出されなかった。

2区では基盤層(20層:明緑灰色粘土)の上面で2本の自然流路跡(NR01、NR02)を検出した。2本の自然流路跡の埋土は礫と砂が交互に堆積しており、NR01では有機質が大量に堆積した場所もみられたが、調査対象の深度から外れていたため全掘は行っていない。掘削深度内では遺物が出土していないため時期は不明である。

基盤層の上には縄文時代～中世の遺物包含層が確認され、「遺物包含層上層」、「遺物包含層下層」と大きく2層に分かれて存在することを確認した。また、縄文時代の遺物が地山面直上で集中して出土したことから、壁面では土層としては捉えられない縄文時代の薄い包含層がところどころに最下層として存在する可能性が考えられた。

「遺物包含層上層」から出土した遺物の時期は縄文時代～中世の時期幅があり、中世の遺物の割合が高い印象を受けた。遺物はいずれも小さな破片であり、風化が著しい状態であった。

「遺物包含層下層」から出土した遺物の時期も上層と変化がなく、縄文時代～中世の時期幅があり、中世の遺物の割合が高い印象を受けた。上層よりも遺物の出土量は多い印象を受けたが、遺物の残存状況は上層と同様で風化が著しい状態であった。中世の土師器の坏は高台を持つものが含まれること、無高台の坏は底径が小さく器壁が大きく開く器形を呈すことから、中世初頭(12～13世紀)頃のものと考えられ、中国産白磁碗も12世紀頃のものであり船舶ではない。

12世紀頃の中国製白磁碗は大量に日本に持ち込まれているものだが、当時としては高級品であるため出土場所は限られており、大半は役所や寺院関連の施設、豪族の館などから出土している。本遺跡は字名が「寺ノ前」であることから、中世初頭には本遺跡の近くに寺院が存在し、そこから流れ込んだ遺物と捉えることができるのかもしれない。

「遺物包含層下層」の土壤について花粉分析、植物珪酸体分析を行ったところ、イネの花粉が検出された。粘質土という土質や水平堆積層であることを傍証として、この層は中世の水田耕作土であったと判断される。イネ以外の花粉及び植物珪酸体の検出状況から古環境を復元すると、中世に本調査区で水田が営まれていた頃、林縁から水田近くまで灌が迫り、丘陵上にアカマツ林が広がり、南川もししくは本庄川の周縁には局所的に照葉樹林や河畔林が存在していた状況が判明とされる。「遺物包含層上層」については土壤分析を行っていないが、現代の耕作土と中世の水田層「遺物包含層下層」に挟まれる粘質土の水平堆積層であることから、この層も水田として利用されていた可能性が高い。

また、地山を切る自然流路NR01の堆積土についても植物珪酸体分析を実施した。その結果、植生に乏しく、林分が迫る環境下の自然流路であるという分析結果を得た。時期の特定はできないものの、比較的冷涼で積雪量の多い地域に分布するチマキザサ類の花粉が僅かに検出されたことから、涼涼な縄文時代の自然流路跡である可能性が高いとのことである。そうであるとすれば、基盤層上の一帯に薄く残ると思われる縄文時代の薄い包含層と結びつく可能性も考えられ、ここでの基盤層は縄文時代には既に成立していたと考えられる。

表7 遺物観察表

## 土 器

標識番号	種類	器種	法線(cm)	胎 土	燒成	色 調	調整・手法の特徴	備 考
32-1	須恵器	壺	—	1mm以下の砂粒を少し含む	良好	外：灰褐色 内：灰褐色	外：ナデ 内：ナデ	
32-2	土師器	壺	底径(6.0)	微細粒を含む	良	外：灰褐色 内：灰褐色	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
32-3	土師器	壺	底径(7.8)	1mm前後の白色砂粒を含む	良	外：灰褐色 内：灰褐色	外：面切り後回転ナデ 内：回転ナデ	
32-4	土師器	壺	—	微細粒を含む	良	外：灰褐色 内：灰褐色	外：削止め切、風化のため調整不明 内：風化のため調整不明	
32-5	土師器	高台付壺	底径(6.0)	1mm前後の白い粒を含む	良	外：浅黄色 内：浅黄色	外：回転系切削棒ナデ 内：風化のため調整不明	
32-6	土師器	皿	口径(9.2) 底径(7.2) 盤高1.2	—	良	外：浅黄色 内：浅黄色	外：無、風化のため調整不明 内：風化のため調整不明	
32-7	土師器	皿	口径8.4 底径6.3 盤高1.1	2mm以下の砂粒を含む	良	外：浅黄色 内：浅黄色	外：風化のため調整不明 内：風化のため調整不明	
33-1	縄文土器	深鉢	底径(7.2)	1mm前後の長石・石英を多く含む	良好	外：灰褐色 内：灰褐色	外：ナデ 内：ナデ	
33-2	縄文土器	盤	口径(16.5) 底径(13.0)	2mm以下の石英・長石を多く含む	良	外：灰褐色 内：灰褐色	外：4条の擬凹掘り 内：ケズリ	外面 塗化物付着
33-3	土師器	皿	口径(17.0)	5mm以下の石英・長石を含む	良好	外：灰褐色 内：灰褐色	外：回転ナデ 内：回転ナデ	口縁外面 塗化物付着
33-4	土師器	壺	口径(11.0)	1mm程度の砂粒を少し含む	不良	外：褐色 内：褐色	外：風化のため調整不明 内：風化のため調整不明	
33-5	土師器	壺	口径(12.0)	1mm前後の長石・石英を多く含む	不良	外：灰褐色 内：灰褐色	外：風化のため調整不明 内：風化のため調整不明	
33-6	土師器	壺	口径(12.5)	1mm前後の砂粒を少し含む	不良	外：青灰色 内：青灰色	外：風化のため調整不明 内：風化のため調整不明	
33-7	須恵器	壺	—	1mm以下の砂粒を少し含む	良	外：灰色 内：灰色	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
33-8	須恵器	壺	—	1mm以下の砂粒を含む	良	外：灰色 内：灰色	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
33-9	須恵器	壺	口径(12.2)	1mm以下の砂粒を少し含む	良	外：灰色 内：灰色	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
33-10	須恵器	壺	底径(7.0)	3mm以下の砂粒を含む	良好	外：灰白色 内：灰白色	外：回転系切 内：回転ナデ	見込 ヘラ記号
33-11	土師器	壺	—	1mm前後の砂粒を多く含む	不良	外：灰褐色 内：灰褐色	外：ナデ 内：ナデ	
33-12	土師器	壺	—	1mm前後の砂粒を少し含む	不良	外：浅黄色 内：浅黄色	外：風化のため調整不明 内：風化のため調整不明	
33-13	土師器	壺	底径(7.2)	1mm以下の砂粒を含む	不良	外：灰褐色 内：灰褐色	外：手切り痕、回転ナデ 内：回転ナデ	
33-14	土師器	壺	底径(5.4)	1mm程度の赤の砂粒を少し含む	不良	外：褐色 内：褐色	外：風化のため調整不明 内：風化のため調整不明	
33-15	土師器	壺	底径(6.2)	1mm以下の石英・長石を多く含む	良	外：灰褐色 内：灰褐色	外：回転ナデ、回転系切 内：回転ナデ	
33-16	土師器	壺	底径(4.8)	1mm前後の砂粒を含む	不良	外：明赤褐色 内：明赤褐色	外：手切り欠端、回転ナデ 内：回転ナデ	
33-17	土師器	壺	底径(5.0)	1mm以下の砂粒を少し含む	良	外：浅黄色 内：浅黄色	外：風化のため調整不明 内：風化のため調整不明	
33-18	土師器	壺	底径(5.2)	1mm以下の砂粒を含む	不良	外：浅黄色 内：浅黄色	外：回転系切、回転ナデ 内：ナデ	
33-19	土師器	壺	底径(5.2)	1mm以下の砂粒を少し含む	不良	外：灰褐色 内：灰褐色	外：回転系切、回転ナデ 内：回転ナデ	内外面 赤色顔料
33-20	土師器	壺	底径(5.0)	1mm程度の砂粒を少し含む	不良	外：褐色 内：淡褐色	外：回転ナデ、回転系切 内：回転ナデ	
33-21	土師器	壺	底径(5.2)	1mm以下の砂粒を少し含む	不良	外：黑褐色～明赤褐色 内：灰褐色	外：回転系切、回転ナデ 内：ナデ	
33-22	土師器	壺	底径(6.4)	1mm前後の砂粒を含む	不良	外：灰褐色 内：褐色	外：風化のため調整不明 内：風化のため調整不明	
33-23	土師器	高台付壺	—	1mm以下の砂粒を少し含む	不良	外：灰褐色 内：黑褐色	外：風化のため調整不明 内：風化のため調整不明	
33-24	土師器	高台付壺	—	1mm前後の砂粒を含む	不良	外：浅黄色 内：浅黄色	外：風化のため調整不明 内：風化のため調整不明	
33-25	土師器	高台付壺	—	1mm前後の砂粒を含む	不良	外：灰褐色 内：灰褐色	外：風化のため調整不明 内：風化のため調整不明	
33-26	土師器	高台付壺	—	1mm以下の砂粒を含む	やや不良	外：灰褐色 内：灰褐色	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
33-27	土師器	高台付壺	—	1mm以下の砂粒を含む	不良	外：褐色 内：褐色	外：風化のため調整不明 内：風化のため調整不明	
33-28	土師器	高台付壺	底径(8.1)	白い微細粒を含む	良	外：浅黄色 内：浅黄色	外：手づくねか 内：風化のため調整不明	
34-1	土師器	皿	口径(8.9) 底径(5.4) 盤高2.1	1mm程度の砂粒を少し含む	不良	外：灰白色 内：灰色	外：回転ナデ、回転系切 内：回転ナデ	

## 土 器

標図番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
34-2	土師器	皿	底径(6.5)	1mm前後の砂粒を少し含む	不良	外 暗褐色 内 暗褐色	外 瓷化のため調整不明 内 瓷化のため調整不明	
34-3	土師器	皿	口径(9.2) 腹径(8.0)	1mm前後の砂粒を含む	不良	外 暗褐色 内 暗褐色～浅黄褐色	外 ナデ、ハケヌメ 内 ナデ、ケズリ後ナデ	
34-4	白磁	碗	—	密	良	外 灰白色 内 灰白色	外 白磁触 内 白磁触	
35-1	圓文土器	深鉢	—	1mm以下の砂粒を多く含む	良	外 灰黃褐色 内 にふく黄褐色	外 圓文觸 内 ナデ	
35-2	圓文土器	不明	—	2mm以下の砂粒を多く含む	良	外 黒褐色～灰黃褐色 内 黒褐色～灰黃褐色	外 ナデ、連續刻突下2段 内 ナデ	
35-3	土師器	杯	口径(12.0) 底径(1.2) 高さ4.8	2mm以下の砂粒を含む	良	外 暗褐色～明赤褐色 内 暗褐色～明赤褐色	外 瓷化のため調整不明 内 瓷化のため調整不明、一部暗文	内面 付着物あり
35-4	須彌器	蓋	口径(12.5)	1mm以下の砂粒を含む	良好	外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	

## 土製品

標図番号	種類	法量(cm)	胎土	色調	調整・手法の特徴	備考
34-5	土鍵	全長(3.3) 最大径1.2 孔径0.4	1mm以上の砂粒を少し含む	明赤褐色	手づくね	
34-6	土鍵	全長6.3 最大径2.3 孔径0.6	1mm以下の長石少し含む。 芸用わざかに含む	淡灰色	手づくね	

## 石製品

標図番号	種類	法量(cm・g)	石材	備考
32-8	剥片	縦2.5 横5.0 厚2.0 重26.39	黒曜石	
34-7	剥片	縦3.1 横2.5 厚0.5 重3.02	黒曜石	
34-8	剥片	縦3.5 横4.6 厚1.3 重21.97	黒曜石	
34-9	剥片	縦3.3 横2.4 厚1.0 重8.65	黒曜石	
34-10	剥片	縦2.6 横2.2 厚0.5 重3.26	黒曜石	
34-11	剥片	縦2.3 横2.2 厚0.6 重2.79	黒曜石	
34-12	剥片	縦2.5 横4.0 厚1.3 重12.09	黒曜石	
34-13	剥片	縦2.3 横2.2 厚0.6 重3.62	黒曜石	
35-5	剥片	縦3.2 横2.5 厚0.5 重4.66	黒曜石	
35-6	剥片	縦3.3 横1.8 厚0.4 重2.09	黒曜石	
35-7	剥片	縦3.3 横3.7 厚0.8 重9.78	黒曜石	

## 木製品

標図番号	分類群	器種名	器種細分名	法量(cm・g)	備考
32-9	用途不明品	板	孔有り	残存長8.9 厚2.0	木釘残存
34-14	施設材	板	孔有り	残存長65.0 幅16.0 厚2.0	
35-8	用途不明品	棒	—	残存長36.9 幅3.0 厚0.9	
35-9	用途不明品	板	孔有り	残存長113.0 幅15.4 厚1.9	

## 第5章 黒添遺跡

### 第1節 調査区の設定

#### 1. トレンチ調査

平成29年度の試掘調査のうち、T37から古墳時代後期を中心とする土器小片と木製品が出土した（第42図1、2）。そこで本調査を行うにあたり調査範囲を確定するため、T37を中心として5本のトレンチ（Tr-1～Tr-5）を配置して掘削を行った（第40図）。トレンチ掘削はまず広範囲に耕作土（深さ10～20cm）を除去した後に実施している。以下で調査成果について簡単に述べる。

##### （1）Tr-1（第40、41図）

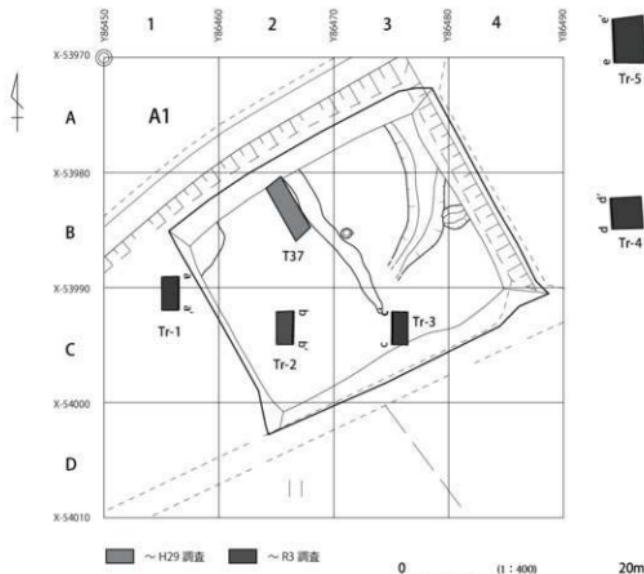
T37の西に設定した1.5m×3.0mのトレンチで、標高13.4mまで掘削した。

土層は上から褐色粘質土（1層）、オリーブ黄色粘質土（2層）や暗灰黄色粘質土（3層）、黄褐色粘質土（4層）、明黄褐色土（5層）で、標高14.0mで褐色砂礫層に明黄褐色土が混じる層（6層）、黄褐色粘質土（7層）、褐色砂礫層（8層）である。遺物は出土していない。

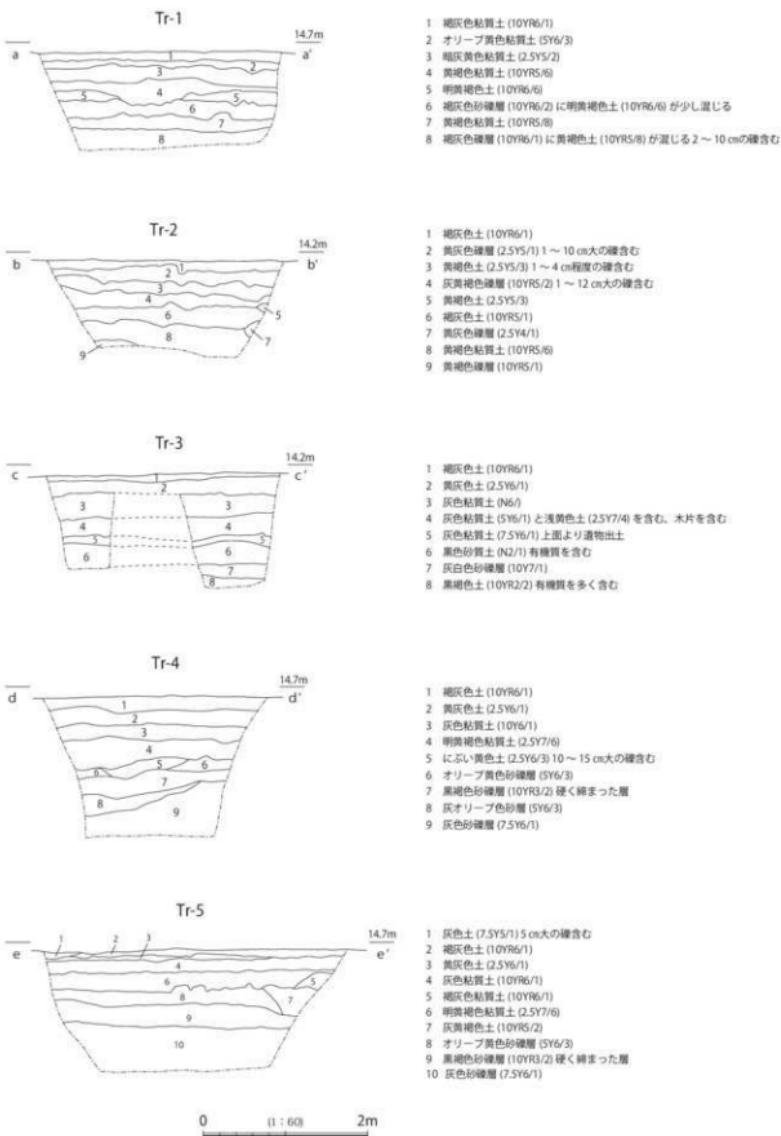
##### （2）Tr-2（第40、41図）

Tr-1の東約10mに設定した1.5m×3.0mのトレンチで、標高12.9mまで掘削した。

土層は上から褐色土（1層）、黄灰色礫層（2層）、礫を含む黄褐色土（3層）、灰黄褐色礫層（4層）、



第40図 調査範囲確定トレンチ及びグリッド配置図



第41図 調査範囲確定トレントン土層図

褐色灰色土(6層)、黄褐色粘質土(8層)で、標高13.1mで黄褐色砂礫層(9層)である。遺物は出土していない。

#### (3)Tr-3(第40、41、42図)

Tr-2の南約10mに設定した1.5m×3.0mのトレンチで、標高12.7mまで掘削した。

土層は上から褐色灰色土(1層)、黄灰色土(2層)、灰色系の3層の粘質土(3~5層)が、有機質を含む黒色砂質土(6層)で、標高13mで灰白色砂礫層(7層)、有機質を多く含む黒褐色土(8層)である。

遺物は2層から中世土師器の破片が1点出土し、厚さ50cmを測る3、4層から細かい土師器と須恵器の破片が多数出土した。

2層から出土した土器(第42図3)は中世須恵器の甕の体部で、外面はタタキ、内面は横方向のハケメで調整されている。3、4層から出土した遺物は細片のため図化することはできなかった。

#### (4)Tr-4(第40、41図)

Tr-3の北東約20mに設定した2.6m×2.7mのトレンチで、標高12.9mまで掘削した。

土層は上から褐色灰色土(1層)、黄灰色土(2層)、灰色粘質土(3層)、明黄褐色粘質土(4層)が堆積し、標高13.7mで疊合するにぶい黄色土(5層)、オリーブ黄色砂礫層(6層)、黒褐色砂礫層(7層)、灰オリーブ色砂層(8層)、灰色砂礫層(9層)が確認された。遺物は出土していない。

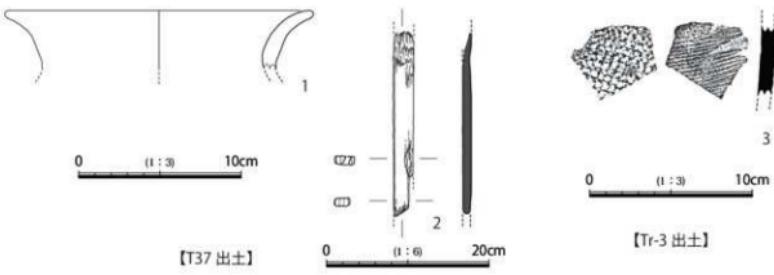
#### (5)Tr-5(第40、41図)

Tr-3の北東約12mに設定した3.7m×2.7mのトレンチで標高13.1mまで掘削した。

土層は上から灰色土(1層)、褐色灰色土(2層)、黄灰色土(3層)、灰色粘質土(4層)、明黄褐色粘質土(6層)が堆積し、標高14.15mでオリーブ黄色砂礫層(8層)、黒褐色砂礫層(9層)、灰色砂礫層(10層)が確認された。遺物は出土していない。

## 2. 調査区の設定

T37とTr-3の2箇所で遺物包含層を確認したが、その他のトレンチでは遺構、遺物ともに検出されなかつたため、本調査区はT37とTr-3とを結ぶラインを中心とする東西幅25mとし、南北幅は同一水田区画内で収まる範囲とした(第40図)。



第42図 試掘調査出土遺物

## 第2節 調査の方法と概要

### 1. グリッドの設定

調査区には世界測地系平面直角座標系第Ⅲ系に基づいた10m四方のグリッドを設定した。グリッドは北西角(X = -53970, Y = 86450)を起点とし、横軸はX座標軸、縦軸はY座標軸に平行とした。列番号は基点から南に向けてアルファベット順、行番号は東に向けてアラビア数字順に付し、各区画は列・行の順に番号を繋いで呼称した。それぞれの区画は各交点の北西隅をもってグリッドの名称としている(第40図)。遺構に伴わない遺物はグリッド単位で取り上げることとした。

### 2. 挖削方法

重機を利用して、廃土置場も含めて調査区周辺の耕作土を漉き取り1箇所に集積保存をする。その後、調査区のほぼ中央で、トレンチT37とTr-3を結ぶラインに畔を設定し、その西側を深掘りして土層堆積状況を把握し、遺物包含層については人力で掘削を行うこととした。なお本遺跡は削られて水田として利用されるため、掘削深は掘削を受ける標高より30cm下までとした。<sup>注2</sup>

### 3. 調査の概要

掘削前の準備として、令和4年9月13～21日に調査区周辺の表土の漉き取りを行っている。

令和4年10月1日に調査区と畔の位置を決定し、掘削は10月4日から開始した。まずは畔の西側の幅約2mについて重機掘削した後、畔西壁(A-A')の土層観察を行い測量、写真撮影を行った。遺物包含層のうち粘質土については人力による掘削を行い、礫層については人力による掘削が困難であったため重機で少しづつ掘り下げて遺物を探した。遺構は、11月1日に地山面で堅果類貯蔵穴1基(SK01)を検出した。また、自然流路4本を検出したが(NR01～NR04)、遺物が出土した自然流路はNR01だけであった。自然流路3本(NR01、NR03、NR04)については調査区北壁にその断面が顕著



写真12 包含層掘削風景1(2区)



写真13 包含層掘削風景2(2区)



写真14 島根県担当者による調査指導風景



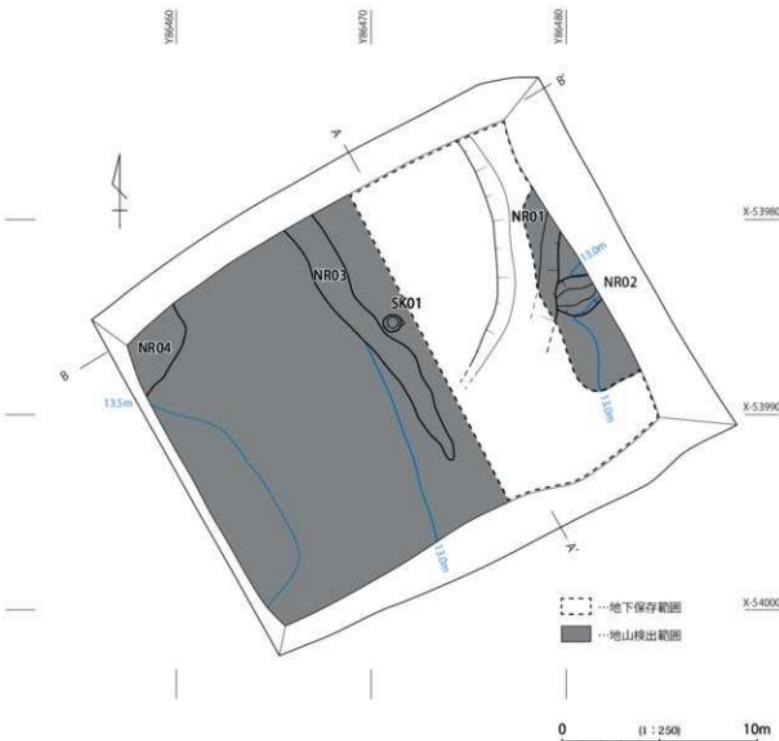
写真15 地元対象の遺物見学会

であるため北壁 B-B'についても土層の記録をとった(第45図)。調査が終盤となった11月12日には、島根県文化財課から現地における調査指導を頂いた。また、11月16日には柳浦俊一氏から縄文時代の遺構、遺物を中心に現地での調査指導を頂いた。

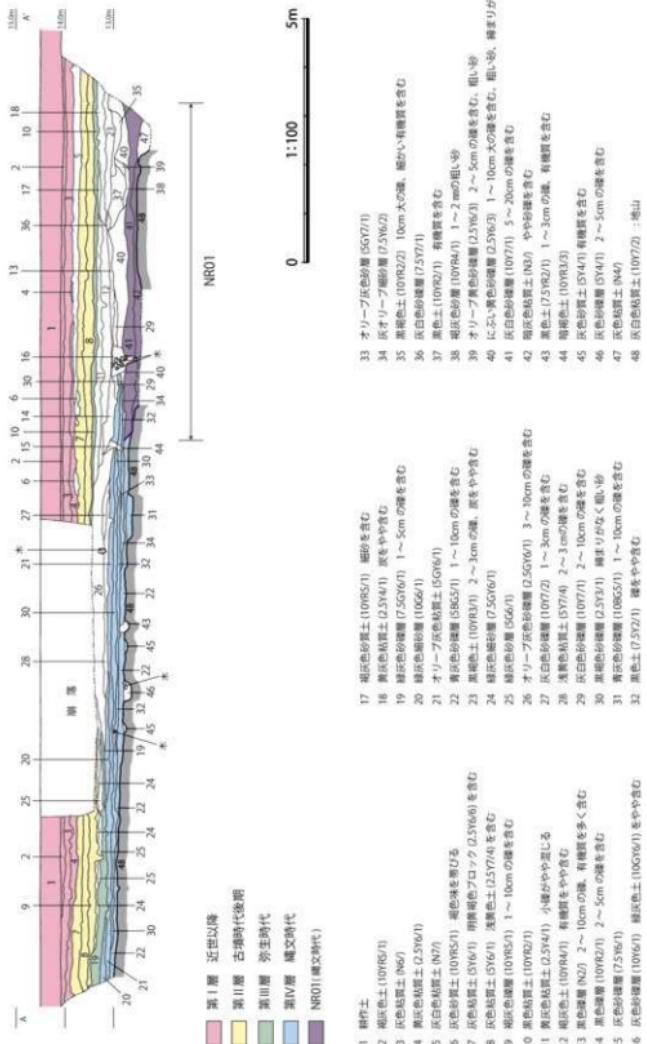
その後、調査指導後の追加調査を実施して全ての図面を作成し、令和4年11月26日に完掘後の写真を撮影して本遺跡の発掘調査の全行程を終了し、令和4年11月29日～12月9日で調査区の埋め戻しを完了した。なお、工事の影響を受けない深さの遺構面については地下保存することとなった。

令和4年12月25日、地元の方を対象とした遺物見学会を開催した。

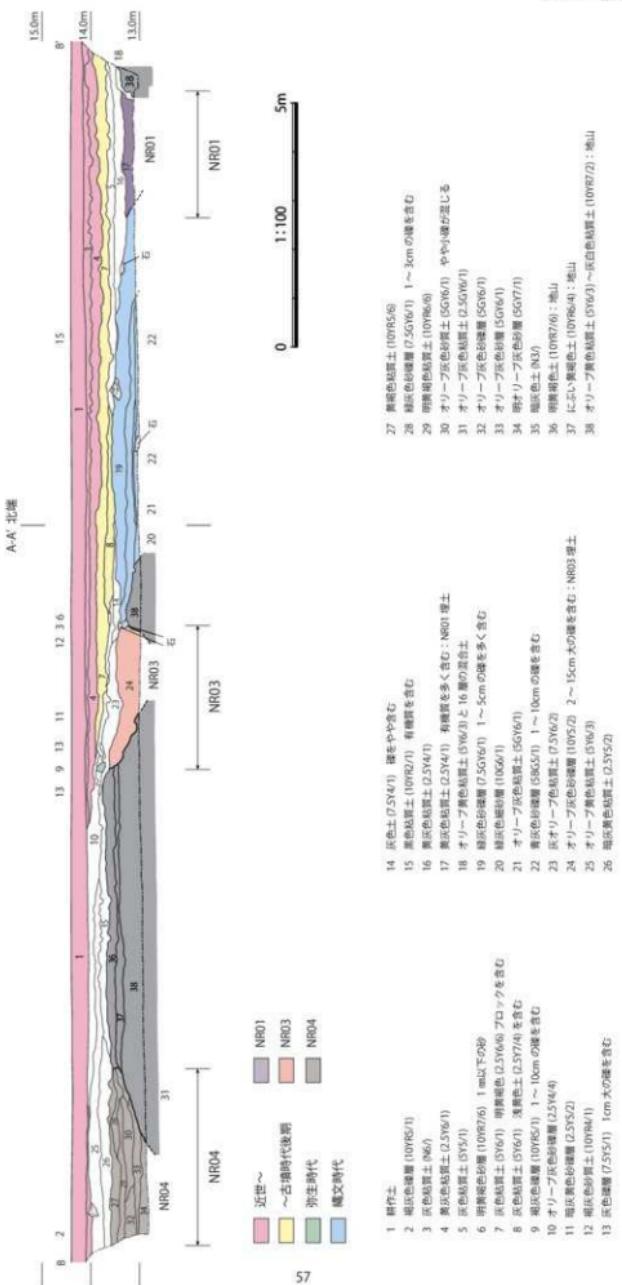
本発掘調査では、縄文土器の破片がコンテナ1箱、弥生土器の破片がナイロン袋2袋、土師器の破片がコンテナ4箱、須恵器の破片がコンテナ1箱、陶磁器の破片がナイロン袋2袋、石製品が10点、金属製品(古銭含む)が3点、木製品がコンテナ5箱出土した。



第43図 完掘状況



第44図 A-A' 土壌図



### 第3節 基本層序

調査地の地目は水田である。土地の傾斜は少なく、標高14.4～14.5mを測り、調査区は南東にやや低い地形である。

土層A-A'（第44図）を見ると、上方は水田耕作土に適した粘質系の土層が堆積し、下方は河川の氾濫や水の流れを示す砂礫層が堆積している。土層B-B'（第45図）を見ると下方の砂礫層は所々で地山（36～38、48層）を切って堆積した層であることが分かる。堆積層の時期は、出土遺物から大きく4時期に分けることができ、その間には時期不明な層も混じる。地山は最高所で標高13.7mを測り、これを切る4本の自然流路が検出されたため、地山高は場所により1m以上上がる場所が存在する。以下で上層から順に説明を行う。

#### 第Ⅰ層 近世以降の層

現代の耕作土（1層）の下に、褐灰色土（2層）、灰色粘質土（3層）、黄灰色粘質土（4層）があり、近世以降の遺物、陶器や古錢が出土している。土質から水田耕作土であったと思われる。

#### 第Ⅱ層 古墳時代後期迄の層

弥生時代後期から古墳時代後期までの遺物を多く含む灰色粘質土（7、8層）、褐灰色礫層（9層）があり、特に8層と9層の間では多くの木製品が出土している。木製品の中には鍬2点と田下駄の一部が出土しており、9層は礫層であるものの、その上の7、8層が粘質土であることからこの2層が古墳時代後期までの水田層であった可能性が高いと考えられる。

I層とII層に挟まれた5、6層は遺物が出土しておらず、時期不明の層である。

#### 第Ⅲ層 弥生時代後期迄の層

9層以下は砂礫層が主体となり、河川氾濫などの影響を受けた堆積層と考えられる。黒色粘質土（10層）と1～5cmの礫を含む緑灰色砂礫層（19層）から少量の弥生土器が出土したので、この2層が当該期の洪水堆積層とその上の湿地層と想定される。

#### 第Ⅳ層 繩文時代の層

III層とIV層の間には遺物が出土していない層が多く、時期不明の層が多い。

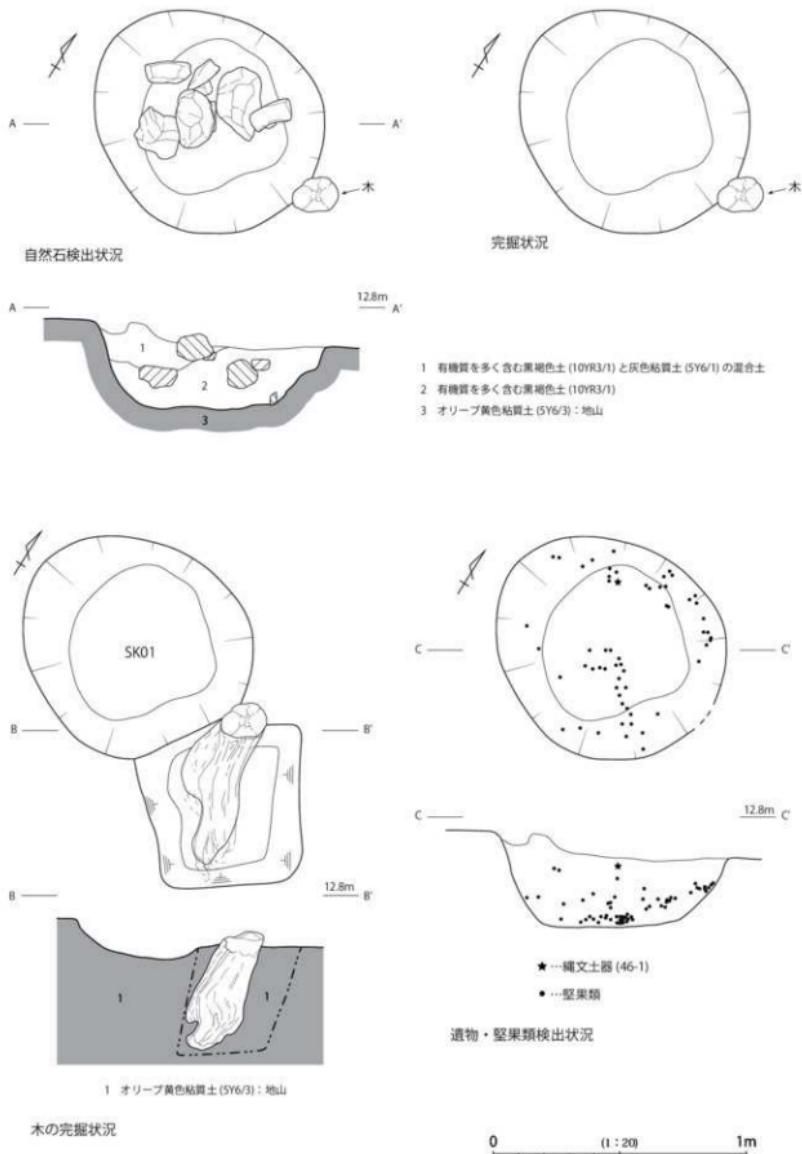
縄文時代の遺物が出土したのは緑灰色細砂層（20層）、オリーブ灰色粘質土（21層）、1～10cmの礫を含む青灰色砂礫層（22層）、締まりがなく粗い砂の黒褐色砂礫層（30層）、1～10cmの礫を含む青灰色砂礫層（31層）、礫をやや含む黒色土（32層）、オリーブ灰色砂層（33層）、灰オリーブ細砂層（34層）当が該期の堆積層である。また、22層を切る自然流路NRO1埋土（41、42層）からも縄文時代の遺物が出土している。

### 第4節 遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は自然流路1本（NRO1<sup>①</sup>）と堅果類貯蔵穴（SK01）1基を検出した。

#### ① NRO1（第43、44図）

調査区内を北から南西に流れた自然流路跡である。調査区北壁では上端幅2.5mを測り、西は縄文



第46図 SK01 平面図・断面図・遺物出土状況

時代の堆積層を切り、東では地山を切って有機質を多く含む黄灰色粘質土が堆積している。場所により幅や堆積土の様子が変化しており、A-A'では幅が6.8m以上に広がり、下層ではやや砂礫を含む暗灰色粘質土、上層では5~20cmの礫を含む灰白色砂礫層が堆積している。

堆積土から縄文土器の細片が出土しているが、図化できるものは出土していない。

### ② SK01(第46、47図)

調査区のほぼ中央、B3区の地山面、標高で検出した堅果類貯蔵穴である。標高12.7mの水の湧く地山面で検出した。平面プランは南北85cm、東西94cmの円形、断面は浅いU字状を呈し、深さ33cmを測る。坑内では20cm前後の自然石8個が、床面よりやや浮いた状態で出土した。堅果類の量は坑の容積に比べて少なく、底や埋土中に散在する状況で、まとまった出土はみられなかった。堅果類が取り残されたか、下部に残された堅果類が後の土砂の流入などによって攪拌された状況が想定される。確認できた堅果類の種類は1種類のどんぐりだけである。葉や枝、板材などの閉塞施設はみられなかった。時期は坑内から出土した土器片1点から縄文時代中期末のものと判断される。

また、SK01の東では木を検出している。木は直径18cm、長さ80cmを測り、樹皮が残存している。SK01の検出面と同レベルで木の上端の切り口がみえている状況で、切り口は工具痕が認められる。木を中心としてトレンチ掘りを行ったところ、木は斜め下方向方向に入り、下端は切断されたように見える。このため、SK01の縁に意図的に打ち込まれた可能性も考えられる。

### ③ SK01出土遺物(第47図)

第47図1は縄文時代の深鉢の口縁部である。波状口縁を呈し、内傾する口縁端部は丸くおさめられている。外面は撚糸縄文が施文された後に幅2~3mmの細い沈線で文様が描かれて磨消が行われ、内面はナデが施されている。中期末の里木II式と思われる。

## 第5節 包含層出土遺物

遺物は調査区内でまんべんなく出土する状況ではなく、B-B'(第45図)にみられるように地山が深く侵食された調査区中央の北西と南を結ぶ帯状の場所を中心に出土している(第48図)。以下では基本層序とともにA-A'で確認した土層名を付して出土遺物の説明をおこなう。

#### 第I層出土遺物(A-A'3層出土、第49図)

第49図1は土製品の土玉である。時期不明。径3.0cm、高さ2.5cm、孔径0.8cm。

#### 第II層出土遺物(A-A'7層出土、第50図)

第50図1は土師器の高環である。环底部だけの破片で、器壁の立上りと脚を欠損している。环と



第47図 SK01出土遺物

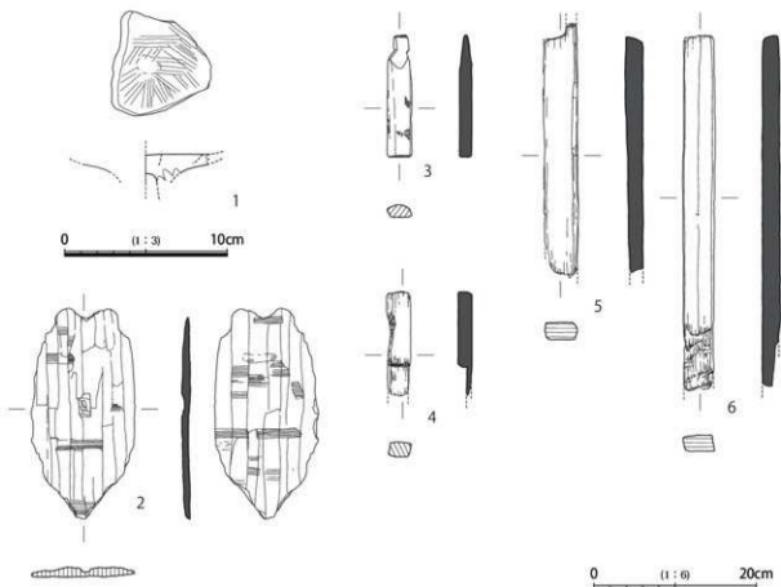


第48図 層位ごとの遺物出土状況

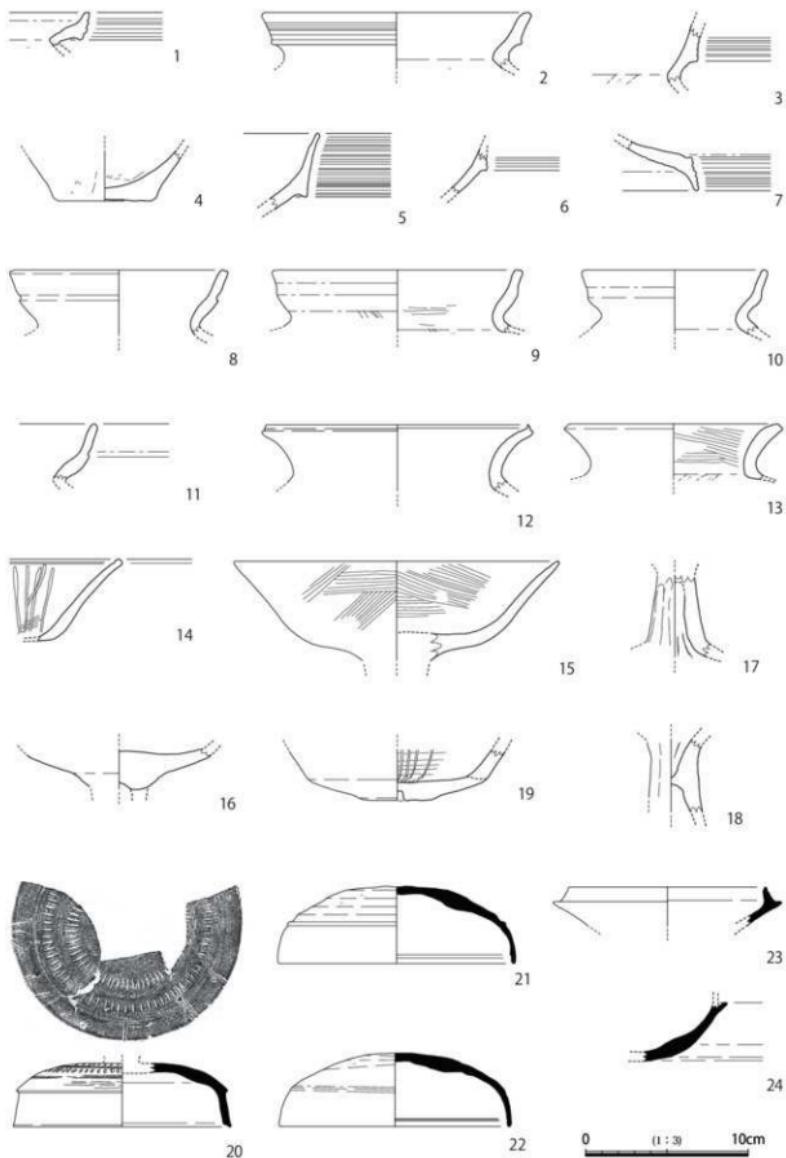
脚の間には円盤充填が行われ、見辺部分には粗いハケメが施されている。2～6は木製品の用途不明品である。2は先端が若干削り出され、反対側は2股に分かれた先端部が丸味を帯びている。縦24.8cm、横12.6cm、厚さ1.2cmの薄いもので、片面はやや中央が高くなり、中央には貫通しない2.9cm×1.6cm、深さ0.5cmの方形のくぼみが設けられている。両面ともに木目と垂直方向の性格不明の筋状の痕跡が残っている。3は幅3.0cm厚さ1.5cmの細い板状の用途不明品で、端部は両側からカットされて幅1.8cmになり、厚さも先端に向けて薄く削られている。4は幅3.0cm、厚さ1.7cmの細い板状を呈するもので、端部から9cmのところで片側だけがカットされ厚さ0.6cmに加工されているが、その先の部分は欠損している。5は幅4.1cm、厚さ2.2cmの板状を呈するもので、端部は片側がカットされて幅1.4cmになるが、その先を欠損している。6は幅3.9cm、厚さ2.2cmの板状を呈するもので、片方の端部



第49図 第I層出土遺物(A-A' 3層)



第50図 第II層出土遺物(A-A' 7層)



第51図 第II層出土遺物(A-A' 8層)(1)

を欠損している。

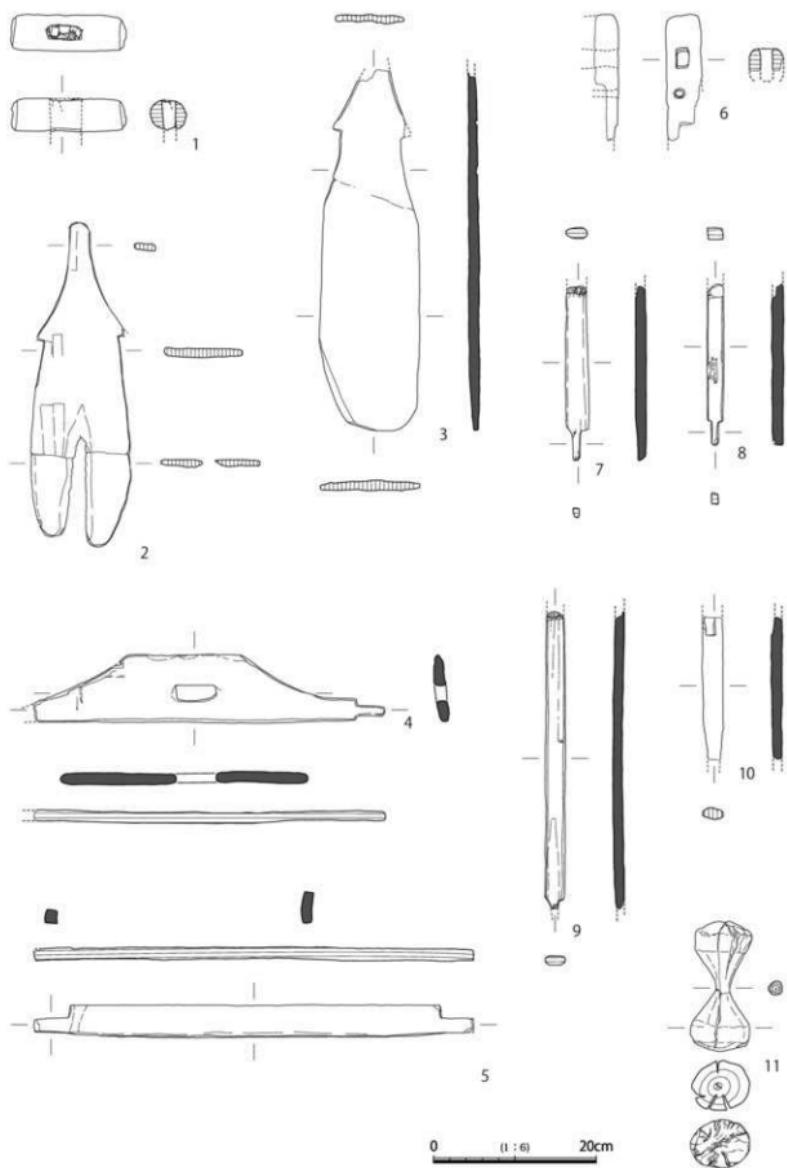
#### 第II層出土遺物 (A - A'8 層出土、第 51 ~ 55 図)

第 51 図 1 ~ 7 は弥生時代後期の土器である。1 は甕の口縁部で、口縁端部に 3 条の凹線が巡らされている。松本編年 V-1 様式。2 は甕の口縁部で、複合口縁の外面に擬凹線が巡らされている。松本編年 V-3 様式以降で、口径 16.5cm、頸径 13.8cm。3 は甕の口縁部で、複合口縁の外面に擬凹線が巡らされている。松本編年 V-2 様式以降のもの。4 は甕の底部と思われる。表面は風化しているが、外面にハケメの痕跡が残る。底径 5.8cm。5、6 は鼓形器台の受部で、複合口縁状の外面には擬凹線が巡らされている。松本編年 V-2 様式。7 は高坏または鼓形器台の底部で、裾部外面には擬凹線が巡らされている。松本編年 V-2 様式。

第 51 図 8 ~ 11 は古墳時代前期の土師器の甕の口縁部で、退化した複合口縁を呈するものである。8 は口径 13.4cm、頸径 8.8cm。9 は口径 15.4cm、頸径 13.0cm。10 は口径 11.4cm、頸径 9.0cm。12 は古墳時代前期の土師器の甕の口縁部で、単純口縁を呈するものである。口径 16.0cm、頸径 12.8cm。13 は古墳時代中期頃の土師器の甕の口縁部と思われる。外面は横ナデ、内面にはハケメ調整がみられる。口径 13.4cm、頸径 10.2cm。14 ~ 18 は古墳時代中期頃の高坏の一部である。14 は坏部である。口縁端部が平坦で、外面はナデ調整である。内面は口縁端部直下に浅い溝が巡らされ、一部にハケメ痕が残るもの、基本的にはミガキ調整で、放射状の暗文が施されている。15 は坏部である。口縁端部は内外面からすぼむもので、内外面ともハケメ調整である。口径 20.0cm。16 は坏と脚の接合部で、円盤充填が認められる。風化が著しいため調整は不明である。17 は脚の筒部である。外面は縦方向のミガキ、内面はシボリである。18 は脚の筒部である。断面をみると、筒部のほぼ中央付近に面的に粘土が施されている。円盤充填の下部を粘土で補強したものか。19 は本来は高坏の坏部を作ろうとしたものと思われるが、脚の付根に刺突まで設けながら、焼成前に脚が付くべきところが平坦に削られて坏に成形されている。外面はナデ、内面は横方向のミガキ後に放射状の暗文が施されている。

第 51 図 20 ~ 24 は古墳時代の須恵器である。20 は蓋である。上面はカキメを施したのちに回転ナデで整えた後、細かい櫛状工具で幅の細い装飾カキメを 3 周巡らして、その間に櫛状工具による密な列点文が 2 周巡らされている。<sup>24</sup> つまみ部は欠損している。肩部の稜は低くて丸味を帯び、口縁端部内面の段も丸味を帯びている。口径 13.4cm。21 は蓋である。肩部の稜はつまみ出しで作り出された低いもので、天井部は回転ヘラケズリの面積が広い。口縁端部内面には丸味を帯びた浅い段が巡らされている。口径 14.5cm、器高 4.7cm。22 は肩部の稜が極端に低く、回転ヘラケズリの面積は天井部の約半分程度である。口縁端部内面には細い沈線が巡らされている。口径 14.2cm、器高 4.5cm。23 は坏である。立上りが低く、残存部分では器壁が直線的である。口径 12.2cm、受部径 13.5cm。24 は坏である。口縁を欠損したので、丸味を帯びた器形を呈している。下半には回転ヘラケズリが施されている。

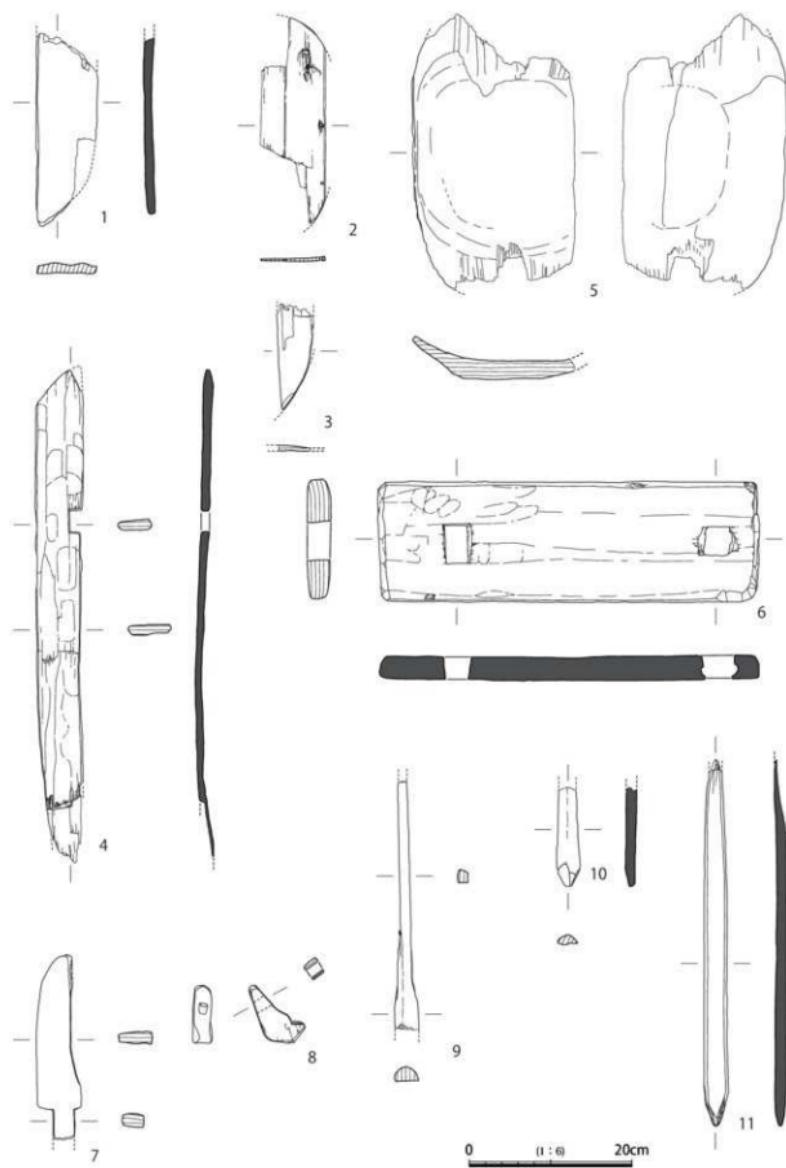
第 52 図は木製品である。第 52 図 1 は組合せ式の鋤の把手で、円柱状を呈しており、中央には長方形の孔が穿たれている。孔の中には複数の木片が詰まっており、鋤の柄の端部と楔状の木片と思われる。把手は直径 4.4cm、長さ 14.2cm、孔の大きさは 1.5cm × 4.5cm。2 は又鍬の鍬先である。



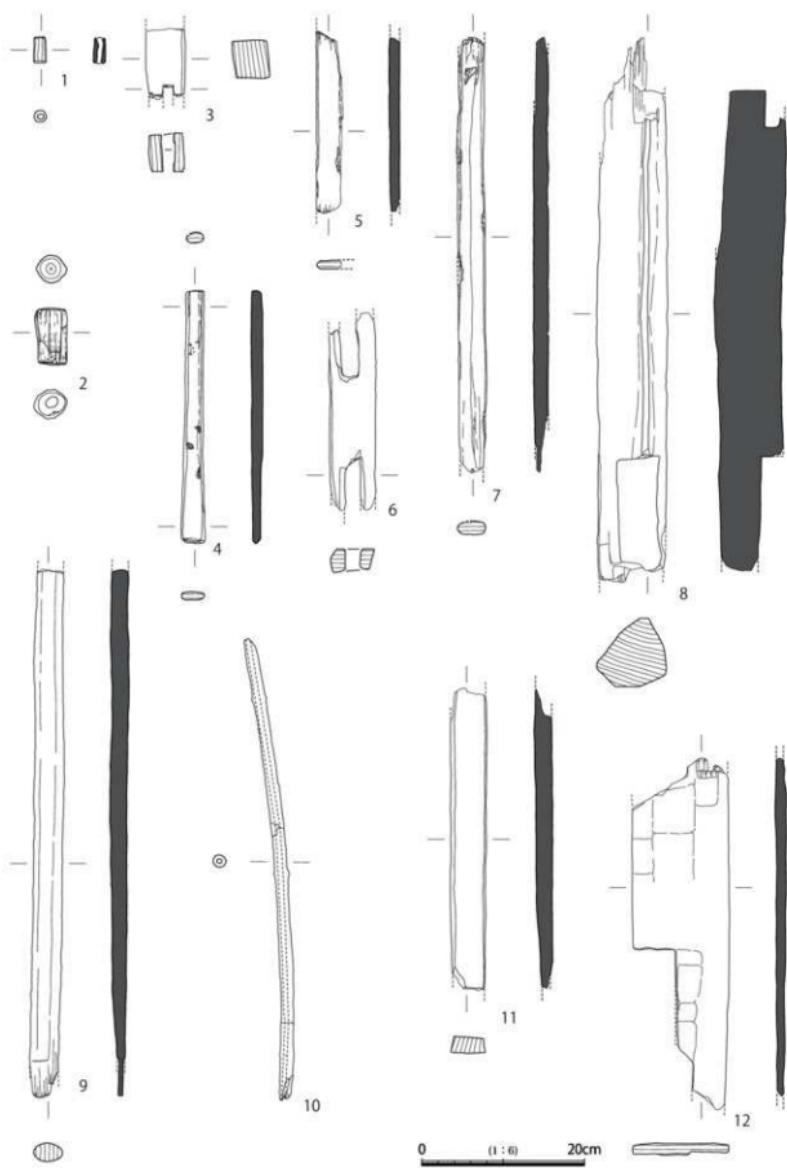
第52図 第II層出土遺物(A - A' 8層)(2)

短い軸部に笠がつく、いわゆる「ナスピ形」で、刃部は中央に 13.0cm の切り込みがあり二股に分かれている。使用期間が短いようで、刃部にケズリ痕が残る。全長 48.2cm、軸幅 3.0cm、笠幅 11.6cm、刃部最大幅 11.9cm、厚さ 1.2cm。3 は鍔先である。2 と同様の「ナスピ形」の鍔で、刃部には切れ込みが無い。刃部の片側は欠損した状態で使われたと思われる。全長 46.0cm、笠幅 9.5cm、刃部最大幅 12.4cm、厚さ 1.2cm。4 ~ 10 は枠付の田下駄と思われる。4 は前板で、中央には足板を差し込むため 2.0 cm × 5.0cm の横に長い長方形の孔が穿たれている。左端は欠損しているが、右端部は縦枠にはめ込むため上下がカットされて細く加工されている。横幅 43.2cm、高さ 8.3cm、厚さ 1.5cm。5 は明確でないが、棧板もしくは 4 とは形態の異なる田下駄の可能性がある。横幅 54.2cm、高さ 4.0cm、両端 4.5cm は片側がカットされて幅 1.7cm。6 は縦枠の前の一部である。先端から 4.0cm に穿たれた 1.6 × 2.5cm の方形の孔は前板を差し込むためのもので、さらに 9.0cm のところに直径 1.2cm の円形の手綱孔が穿たれている。縦枠は高さ 4.4cm、幅は不明である。7 ~ 10 は横桟と思われる。全て細い板状で、端部が両側からカットされたもので、両端が残存するものは無い。7 は幅 2.8cm、厚さ 1.4cm で、端部がカットされた部分の長さ 3.5cm、幅 0.9cm。8 は幅 2.0cm、厚さ 1.4cm で、端部がカットされた部分の長さ 3.0 cm、幅 0.9cm。9 は幅 2.5cm、厚さ 1.2cm で、端部がカットされた部分の幅 1.0cm。10 は幅 2.5cm、厚さ 1.4cm で、端部がカットされた部分の幅 1.0cm。11 は紡織具の木錘である。中央部が細くなるタイプで、両端部は丸味を帯びた形状に仕上げてある。全長 16.0cm、最大径 7.3cm、中央くびれ部径 1.8cm。

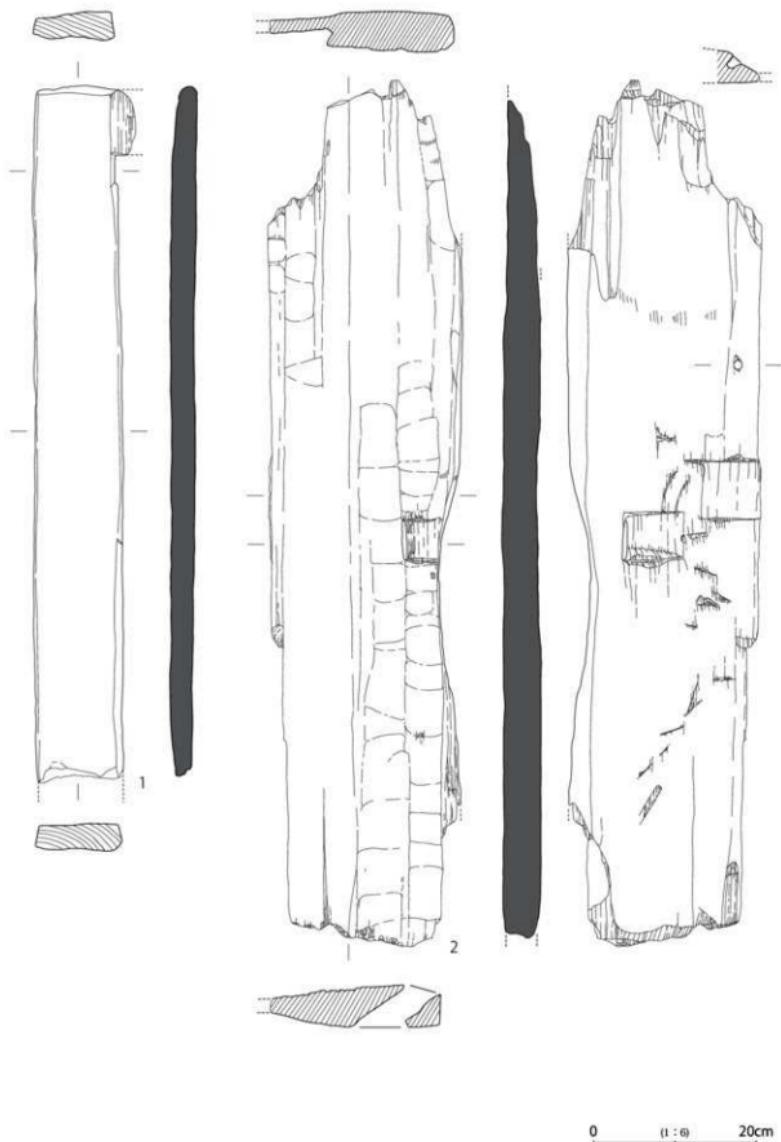
第 53 図 1 ~ 5 は容器と思われるもので、1 ~ 3 は曲げ物の底板である。1 は 1箇所に端部の曲線がみられるもので、側板の痕跡は見られない。板はやや厚く 1.2cm。2 は相対する 2 箇所に端部の曲線がみられるもので、側板の痕跡は見られない。復元した形状を想定すると、かなり内側に木釘が 1 本打たれている。板の厚さ 0.5cm。3 は 1 箇所に端部の曲線がみられるもので、側板の痕跡は見られない。板の厚さ 0.5cm。4 は 1 箇所に端部の曲線がみられることから曲げ物の底板としたが、一般的なものより大き目で、一端に幅 3.0cm、奥行 1.8cm の方形の割り込みがみられる。蓋の可能性が考えられる。板の厚さ 1.0cm。5 は盤である。平面は梢円形で、両端にはわずかな平坦面が作られ、中央が梢円状 (21.0 × 27.0cm) に割り込まれている。深さは約 3.0cm と浅く、底は梢円状 (17.5 × 12.6cm) で平坦に加工されている。器壁が厚く、削り痕が残る粗製品である。幅 19.8cm × 43.6cm、底の厚さ 2.3cm。6 は椅子の座板と思われる。綺麗に削りが施されている方が座面 (上面) で、反対の削りが雑な面が裏面であろう。座板には脚を差し込むための、方形で貫通する孔が 2 箇所穿たれている。座板は縦 47.2cm、横 14.8cm、厚さ 3.0cm、孔の大きさは図の右側が 3.4 × 3.9cm、左側が 5.3 × 3.5cm。7 は刀形である。刃部の切先は曲線を描いて表現され、束は左右からカットされて細く表現されており、端部は欠損している。棟側は若干刃部側に反っていることから、革製の鞘に入った状態を模したものの可能性がある。刃部は長さ 19.0cm、最大幅 5.5cm、厚さ 1.4cm、束は幅 2.6cm、厚さ 1.6cm。8 は何かの部材で丁寧な作りである。下端を水平に置くと端部は斜め上に向き、その部分には方形の孔 (1.3 × 1.0cm) が貫いている。9 は用途不明品である。片面が平坦で、反対の面は柄のような部分から稭がついて立体的に広がっている。両端を欠損しており全形は分からない。柄の幅 1.2cm、厚さ 1.1cm、最大幅 3.0cm、最大厚 1.8cm。10 も用途不明品である。片面が平坦で、反対の面は断面 U 字



第53図 第II層出土遺物(A-A' 8層)(3)



第54図 第II層出土遺物(A - A' 8層)(4)



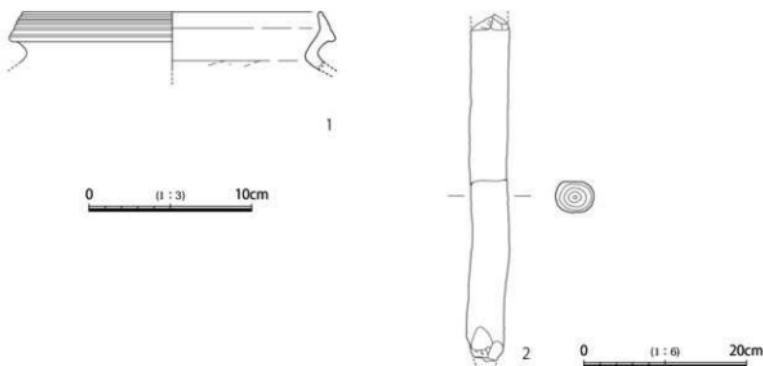
第55図 第II層出土遺物 (A - A'8層)(5)

状で中央に稜を持ち、端部は雑なカットですぼんでいる。反対側の端部は欠損している。幅2.4cm、厚さ1.2cm。11も用途不明品である。片面が平坦で、反対の面は断面U字状で中央に稜を持ち、端部は丁寧な削りでV字状を呈している。反対側の端部は欠損している。幅3.9cm、厚さ1.4cm。

第54図1～12は用途不明品である。1は円柱状で中心に孔が穿たれたものである。径1.5cm、長さ3.2cm、孔径0.7cm。2は円柱状を呈するもので、外面の削りは丁寧だが、削りの単位が分かる。1端の中央に径1.5cm、深さ1.0cmの窪みが設けられている。直径3.4cm、長さ7.0cm。3は断面が正方形の棒状で、方形の孔(孔の短辺1.3cm)が穿たれていたと思われるが、両端を欠損しているため明確でない。幅4.4cm、厚さ4.6cm。4は細い板状のもので、一端がやや広くて薄い。両面とも丁寧に削られている。長さ31.1cm、幅2.2～3.0cm、厚さ1.5cm。5は板の一部である。両面とも丁寧に削られている。6はやや厚めの板状で、約10cm離れて細長い方形の孔(孔の短辺1.9cm)か、もしくは二股に分かれた状態と思われるが、両端を欠損するため原型は分からぬ。幅5.6cm、厚さ2.8cm。7



第56図 第II層出土遺物(A-A'9層)



第57図 第III層出土遺物(A-A'10層)



第58図 第III層出土遺物(A-A'19層)

は角が丸く削られた板状のもので、両端を欠損している。幅3.5cm、厚さ1.8cm。8は断面が丸味を帯びた三角形の棒状で、少なくとも縦12cmの範囲は角が2cm程度削り落とされている。両端を欠損するため全体の形状は分からぬ。棒の径は8.5cm程度。9は丸く削られた板状のもので、片側の端部に向けて薄く削られている。両端を欠損している。幅3.5cm、厚さ2.2cm。10は竹である。節が粗く落とされ、一端にカットの痕跡が残っている。11は細い板状のもので、両端を欠損している。幅4.4cm、厚さ2.0cm。12は板状のもので、両面は丁寧に削られている。1箇所で直角に5.5cmカットされて12cmほど続き、さらに斜めにカットされたものであるが、両端を欠損しており全体の形状は分からぬ。幅11.9cm、厚さ1.5cm。

第55図1、2は用途不明品である。1は板状のもので、少なくとも一端はL字状に加工されており、曲がった先と反対側の端部を欠損している。幅10.6cm、厚さ1.9cm。2は片側が厚みのある板状で、厚みのある側面はきわめて緩やかなU字状に窪み、側面端部から縦5.5cm×横5.0cmの方形の孔が斜め方向に裏面へ貫いている。片面には縦方向の削り痕が顕著に残るが、裏側の面には丁寧な加工はみられない。欠損のため幅、長さとも不明、厚さ5.0cm。

#### 第II層出土遺物(A-A'9層出土、第56図)

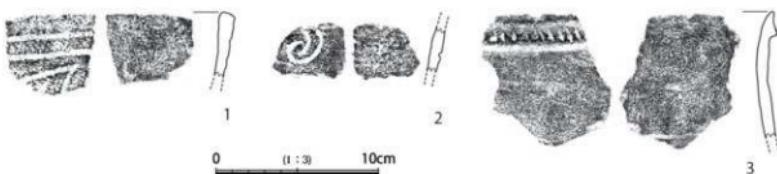
第56図1は高環の環部である。内外面とも風化しているが、外面の一部にハケメが残る。

#### 第III層出土遺物(A-A'10層出土、第57図)

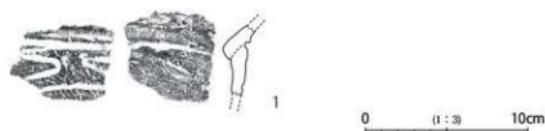
第57図1は弥生時代後期の甕の口縁部である。複合口縁端部が肥厚して内傾し、5条の凹線が巡らされている。松本編年V-1様式。口径18.2cm、頸径17.8cm。2は木製品の杭である。先端部はカットされているが、先端は残存していない。

#### 第III層出土遺物(A-A'19層出土、第58図)

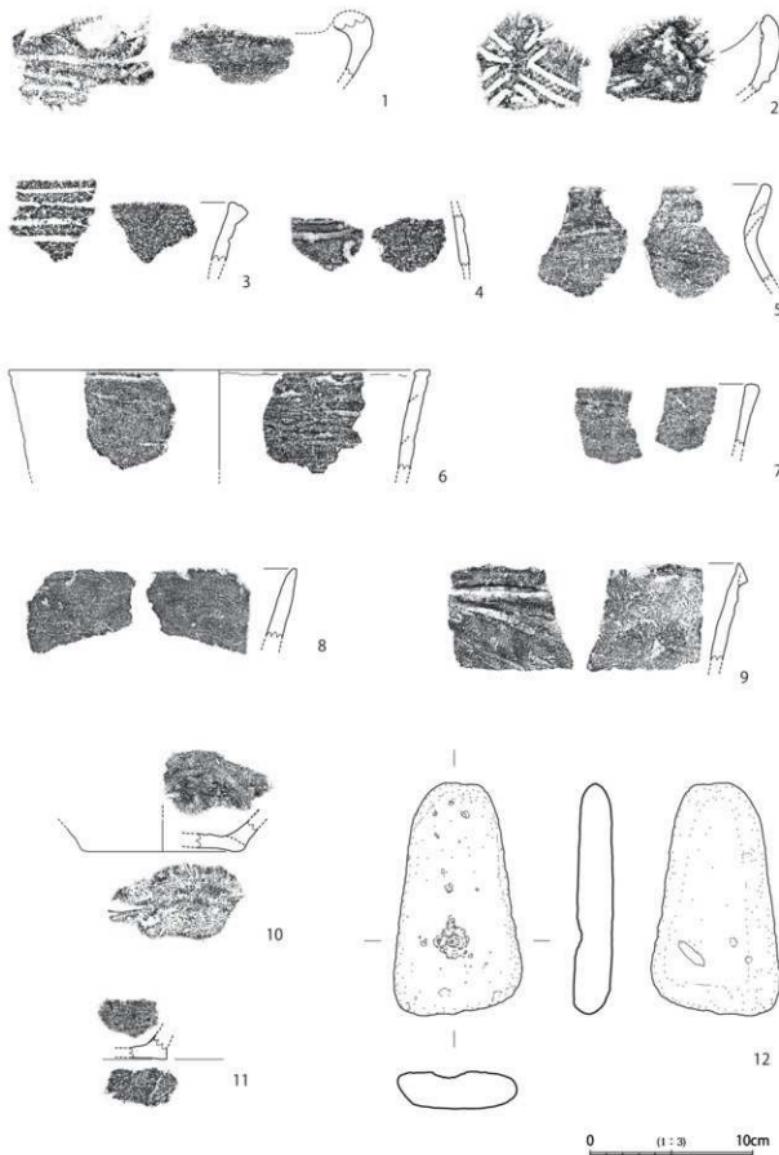
第58図1は弥生時代後期の甕の口縁部である。複合口縁端の外面には擬凹線が巡らされている。



第59図 第IV層出土遺物(A-A'22層)



第60図 第IV層出土遺物(A-A'28層)



第61図 第IV層出土遺物 (A - A'29層)

松本編年V—2 様式。口径 18.3cm、頸径 14.8cm。

第IV層出土遺物 (A - A'22 層出土、第 59 図)

第 59 図 1 ~ 3 は縄文時代の深鉢である。1 は水平口縁で、口縁端部は平坦に作られている。風化のため器面調整は明瞭でないが、幅 3 ~ 4mm の浅い凹線で文様が描かれている。後期初頭の幕地式平行と思われる。2 は体部破片である。外面は縄文施文後に幅 2mm 強の細い沈線で文様を描き磨消が行われ、内面はケズリ後ナデが施されている。幕地式。3 は内外面ともナデ調整が施された後、外面の口縁の下に刻目突帯が巡らされている。晚期の突帯文土器である。

第IV層出土遺物 (A - A'28 層出土、第 60 図)

第 60 図 1 は縄文時代の深鉢である。口縁端部を欠損するが、口縁が大きく「く」の字状に開くもので、その変化点の内面で粘土を継ぎ足した後に調整は見られない。外面は縄文施文後に幅が広くて深い沈線で文様を描き磨消が行われており、内面はナデによる調整である。布勢式か、もう少し新しい鐘崎式の可能性がある。

第IV層出土遺物 (A - A'29 層出土、第 61 図)

第 61 図 1 ~ 11 は縄文時代の土器である。1 は口縁部で、変化点に大きな突起を持つ波状口縁となっている。外面は縄文施文後に浅い沈線で文様を描き磨消が行われており、内面はナデによる調整である。幕地式。2 は口縁部で、波状口縁を呈する。外面は縄文施文後に浅い凹線で文様を描き磨消が行われており、内面はケズリとナデによる調整である。幕地式。3 は口縁部で、外端部に粘土を足して端部に平坦面を作り、平坦部中央に沈線が巡らされている。風化のため分かりにくいが、外面は縄文施文後に浅い凹線で文様を描き磨消が行われており、内面はナデによる調整である。外面の沈線には炭化物が詰まっている。4 は器壁の破片で、外面はミガキ後に浅い沈線で文様が描かれており、内面はナデ調整である。5 は口縁が「く」の字状の無文土器で、内外面ともナデ調整が施されている。幕地式は布勢式に伴うものである。6 は粗製の深鉢の口縁部である。外面は巻貝条痕、口縁端部の平坦面と内面はナデ調整である。口径 25.8cm。7 は粗製深鉢の口縁部である。外面はケズリ、口縁端部の丸味を帯びた平坦面と内面はナデ調整である。後期と推察する。8 は粗製深鉢の口縁部である。外面は条痕後ミガキ、内面はミガキ調整である。9 は突帯文土器の口縁部付近である。器壁の外面は巻貝条痕、内面はナデ調整が施され、口縁端部外面に断面三角形の突帯が巡らされている。外面は煤の付着が著しい。10 はおそらく深鉢の底部である。内外面ともナデ調整が施されている。二次的に火を受けて外面の一部が橙色に変色している。底径 10.0cm。11 は底部である。内外面ともナデ調整が施されている。二次的に火を受けて外面の一部が橙色に変色している。

第 61 図 12 は縄文時代の石製品である。表面に小さな穴が多く見られる石材で、全体に丸味を帯びている。川原石が利用されたと思われるが、加工のみられる面はより滑らかであるため、磨かれているものと思われる。中央よりやや幅の広い方に寄った位置に、径 2.4cm、深さ 4mm の円形の窪みが穿たれている。用途は不明だが、実用品または祭祀関連のものと思われる。縦 14.2cm、最大幅 7.9cm、厚さ 2.3cm、重量 333.3g。

## 第6節 結語

本遺跡では遺物包含層と遺構を検出した。以下では遺物包含層と遺構についてまとめて結語とする。

### 1. 遺物包含層

本調査区の遺物包含層は大きく分けて4時期(Ⅰ～Ⅳ期)に分けることができる。以下で時期別にまとめを行う。

#### 第Ⅰ期(近世以降の層)

近世以降の遺物包含層は粘質土が水平堆積していることから、水田として利用されてきたと推定される。ここは調査区の中心部を南西から北東に条里制の坪境推定ラインが想定される場所にあたるが(第6図)、坪境などの条里制地割の遺構は検出されなかった。

#### 第Ⅱ期(古墳時代後期迄の層)

最下層は礫が混じっているが、全面的には粘質土が水平に堆積していることや少量の土器類とともに鍬又鍬といった農耕具が出土していることから、水田耕作が行われていた土層と思われる。当遺跡付近では古墳時代後期には水田耕作が行われていたことが明らかとなった。

#### 第Ⅲ期(弥生時代後期迄の層)

第Ⅱ期の直下に堆積した砂礫層から弥生時代後期の遺物が少量出土した。このことより、少なくとも弥生時代後期までは当地では河川管理が困難な状況にあり、大小の洪水が繰り返されていたことが窺われる。

#### 第Ⅳ期(縄文時代の層)

基盤層の遺構面(縄文時代中期末)が土石流によって大きく削られた状況が窺えた。その上には、河川の氾濫や自然流路により大小の礫を含む砂礫層が堆積しており、その中には縄文時代の土器小片が多数含まれていた。細かい破片が多く詳細な時期が分かれるものは少なかつたが、後期初頭の暮式地が多く、次に多いのが後期中葉の布勢式で、晚期の突帯文土器もわずかに出土している。上流に当該期の遺跡が上流に存在していたものが、地面もろとも本遺跡まで流された状況と考えられる。

### 2. 遺構

注目すべき遺構として、縄文時代中期末の堅果類貯蔵穴1基(SK01)を検出した。洪水堆積層の下の標高12.7mの水の湧く基盤面で検出したもので、検出時の平面プランは径85～94cmの円形を呈し、深さ33cmを測る。堅果類にはまとまった出土がみられず、埋土中に散在するような状況で出土した。堅果類貯蔵穴であればもう少し深い土坑が掘られるはずであり、閉塞関連の遺物(覆いの蓋など)が全く出土しなかったことから、上部は洪水等により削平され、土坑内は土石流により攪乱を受けた可能性が高いと思われる。

### 3.まとめ

これまで本庄川扇状地周辺では縄文遺跡がほとんど発見されていなかったが、今回の調査では縄文時代中期末の遺構の上に、上流から土石流とともに流れ込むような状況で縄文時代後期初頭～晚期の土器細片が多数出土した。その背景としては、河川管理が十分でない縄文時代においては形成途中の本庄川扇状地は安定した地盤ではなかったと考えられる。当該期に居住や活動が行われていたと

しても河川の氾濫や大水等で、当時の旧地表面が削り取られて下流へ押し流される事象が繰り返されてきたものと推察される。本庄川扇状地における縄文時代の遺跡の在り方の一端が見えてきた。本庄地域はこれまで縄文時代の遺跡の空白地帯とされていたが、今回の調査では堅果類貯蔵穴 (SK01)1 基が検出された。また、土石流状の遺物包含層から多くの縄文土器片が出土し、その状況はまさに扇状地扇尖付近の地形が形成される一過程に伴うものである。今回の調査成果は本遺跡の成果だけにとどまらず、今後の本庄川扇状地における遺跡の調査指針としても有意義な成果を得ることができたと考える。

また、本遺跡では古墳時代後期の土器片を伴う木製農耕具がまとめて出土し、水田層と考えられる土層も確認された。このことから、本遺跡周辺では当該期には確実に稻作が行われていたことが判明した。また、紡織機や椅子などの木製品も出土したことから、近い場所に集落の存在も想定される。水田層以外の遺構は検出されていないが、この時期から本庄川扇状地は高い土木技術のもとに管理され、現代につながる安定した生活基盤となったことが窺える。

#### 【第3章 註】

1. 第42図に示した遺物の詳細は遺物観察表参照。
2. 調査深を工事深より30cm下げた理由は、切土後に耕作土を敷き詰めたとしても大型の農業機械により攪乱を受けることが考えられたためである。
3. どんぐりの種類は確定できていない。また、目視で分かる範囲は1種類であったが、細片となった堅果類の中に別の種類の堅果類が含まれている可能性は否定できない。
4. 天井部の文様は初期須恵器の有蓋高环の蓋と同様のものだが、天井と口縁部の境界の段の鋭さがみられないなど、他の特徴は新相が目立つ。有蓋高环の蓋の文様は新しい段階に現る傾向があるともいわれており、総合的にみれば、大谷編年出雲1期(古)段階あたりまで下るとみられる。
5. 島根県教育委員会『国道四三一号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 荒船古墳群・荒船遺跡・本庄川流域条里遺跡』1998年の第二章「周辺の主要遺跡と調査の概要 一、周辺の主要遺跡では「・・・縄文時代の遺跡は本庄川流域では顕著でない。遺跡が増加するのは弥生時代後期になってからである。」と表現されており、その後も縄文時代の遺跡は検出されていなかった。

表8 遺物観察表

## 土器

標示番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
42-1	土師器	甕	口径(18.6)	1mm前後の砂粒を含む	良	外 内 褐色 褐色	外 ヨコ方向のナデ 内 風化のため調整不明	
42-3	須恵器	甕	—	1mm前後の長石・石英を含む	良	外 内 灰白色 灰白色	外 タケ牛 内 ハゲ	
47-1	縄文土器	深鉢	—	1mm前後の長石・石英を含む	良	外 内 灰黄色褐色 灰黄色褐色	外 磨削縄文 内 ナデ	里木口式
50-1	土師器	高杯	—	鐵砂粒を含む	良	外 内 褐色 褐色	外 ナデ 内 ハケメ	
51-1	弥生土器	甕	—	1mm前後の長石・石英を含む	良	外 内 浅黄色 浅黄色	外 口縁端部 3条の凹線 内 ナデ、ケズリ	松本編年V-1 様式
51-2	弥生土器	甕	口径(16.5) (底径13.8)	1mm前後の長石・石英を多く含む	良	外 内 灰黄色褐色 にぶい黄褐色	外 擬凹縄文、ヨコナデ 内 ヨコナデ、ケズリ	松本編年V-3 様式
51-3	弥生土器	甕	—	1mm前後の砂粒を含む	良	外 内 にぶい黄褐色 黒褐色	外 擬凹縄文、ナデ 内 ナデ、ケズリ	松本編年V-2 様式
51-4	弥生土器	甕	底径(5.8)	鐵砂粒を含む	良	外 内 黄褐色 黄褐色	外 ハケメ、風化のため調整不明 内 風化のため調整不明	
51-5	弥生土器	鉢形器台	—	1mm前後の砂粒を含む	良	外 内 灰白色 灰白色	外 擬凹縄文、ナデ 内 ナデ	松本編年V-2 様式
51-6	弥生土器	鉢形器台	—	1mm前後の砂粒を含む	良	外 内 にぶい褐色 にぶい褐色	外 擬凹縄文、ナデ 内 ナデ	松本編年V-2 様式
51-7	弥生土器	高杯(はくひ)	—	1mm前後の砂粒を多く含む	良	外 内 にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	外 擬凹縄文、ナデ 内 器面焼れ	松本編年V-2 様式
51-8	土師器	甕	口径(13.4) (底径8.8)	鐵砂粒を含む	良	外 内 にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	外 ナデ 内 ナデ	
51-9	土師器	甕	口径(15.4) (底径13.0)	1mm以下の長石・石英を含む	良	外 内 にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	外 ハケメ、ナデ 内 ハケメ後ナデ、ケズリ	
51-10	土師器	甕	口径(11.4) (底径9.0)	鐵砂粒を少し含む	良	外 内 灰黄色 浅黄色	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ、ケズリ	
51-11	土師器	甕	—	1mm前後の砂粒を含む	良	外 内 にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	外 ヨコナデ 内 ナデ	
51-12	土師器	甕	口径(16.0) (底径12.8)	1mm前後の長石・石英を含む	良	外 内 明赤褐色 にぶい褐色	外 ナデ 内 ナデ、ケズリ	
51-13	土師器	甕	口径(13.4) (底径10.2)	鐵砂粒を多く含む	良	外 内 明赤褐色 明赤褐色	外 ヨコナデ 内 ハケメ、ケズリ	
51-14	土師器	高杯	—	1mm前後の砂粒を含む	良	外 内 明赤褐色 明赤褐色	外 ナデ 内 ミガキ、放射状の暗文	
51-15	土師器	高杯	口径(20.0)	1mm以下の砂粒を含む	良	外 内 にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	外 ハケメ、ナデ 内 ハケメ	
51-16	土師器	高杯	—	鐵砂粒を少し含む	良	外 内 浅黄色 浅黄色	外 風化のため調整不明 内 風化のため調整不明	
51-17	土師器	高杯	—	鐵砂粒を少し含む	良	外 内 明褐色 明褐色	外 タテ方向のミガキ 内 シボリ	
51-18	土師器	高杯	—	1mm以下の砂粒を含む	良	外 内 にぶい黄色 にぶい黄色	外 ミガキ 内 シボリ	
51-19	土師器	高杯	—	鐵砂粒を含む	良	外 内 灰黃褐色 浅黃褐色	外 ヨコ方向のミガキ後 放射状の暗文	外表面 赤色顔料
51-20	須恵器	蓋	口径(13.4)	1mm前後の砂粒を含む	良	外 内 灰色 内 灰色	外 回転ナデ、文様 内 静止ナデ、回転ナデ	外表面 1箇所モザイク
51-21	須恵器	蓋	口径(14.5) 底径4.7	1mm前後の砂粒を含む	良	外 内 灰色 内 灰白色	外 回転ヘラケズリ、回転ナデ 内 回転ナデ	
51-22	須恵器	蓋	口径14.2 底径4.5	1mm前後の砂粒を含む	良	外 内 灰色 内 灰色	外 回転ヘラケズリ、回転ナデ 内 回転ナデ	
51-23	須恵器	环	口径(12.2) 受部径(13.5)	鐵砂粒を含む	良	外 内 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ	
51-24	須恵器	环	—	1mm前後の砂粒を含む	良	外 内 灰白色 灰白色	外 回転ヘラケズリ、回転ナデ 内 回転ナデ	
56-1	土師器	高杯	—	1mm前後の長石・石英を多く含む	良	外 内 褐色 褐色	外 ハケメ、風化のため調整不明 内 風化のため調整不明	
57-1	弥生土器	甕	口径(18.2) (底径17.8)	0.5mmの長石・石英を多く含む	良	外 内 にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	外 ヨコ方向5条の凹線 内 ヨコナデ、ケズリ	松本編年V-1 様式
58-1	弥生土器	甕	口径(18.3) (底径14.8)	1mm前後の長石・石英を多く含む	良	外 内 明褐色 明褐色	外 擬凹縄文、ナデ 内 ケズリ	松本編年V-2 様式
59-1	縄文土器	深鉢	—	1mm前後の長石・石英を多く含む	良	外 内 にぶい黄色～暗赤褐色 にぶい黄色～暗赤褐色	外 磨削縄文 内 ケズリナデ	幕地式
59-2	縄文土器	深鉢	—	1mm前後の長石・石英を多く含む	良	外 内 灰黄色褐色 灰黄色褐色	外 磨削縄文 内 ケズリナデ	幕地式
59-3	縄文土器	深鉢	—	1mm前後の長石・石英を含む	良	外 内 にぶい黄色 にぶい黄色	外 ナデ後日突拂 内 ナデ	突拂文土器

## 土 器

標図番号	種類	断面	法量(cm)	胎 土	焼成	色 調	調整・手法の特徴	備考
60-1	縄文土器	深鉢	—	1mm前後の長石・石英を含む	良	外 灰黄色 内 灰黄色	外 淡褐色 内 ナデ	布勢式又は隣接式
61-1	縄文土器	(口縁部)	—	1mm前後の長石・石英を多く含む	良	外 にぶい褐色 内 にぶい褐色	外 淡褐色 内 ナデ	幕地式
61-2	縄文土器	(口縁部)	—	1mm前後の長石・石英を多く含む	良	外 灰黄褐色 内 灰黄褐色	外 淡褐色 内 ケズリ、ナデ	幕地式
61-3	縄文土器	(口縁部)	—	1mm前後の長石・石英を多く含む	良	外 灰黄褐色 内 黑褐色	外 淡褐色 内 ナデ	外面 硬化物混まる
61-4	縄文土器 (破片)	—	—	1mm前後の長石・石英を含む	良	外 にぶい淡褐色 内 灰黄褐色	外 ミガキ 内 ナデ	
61-5	縄文土器 (口縁部)	—	—	1mm前後の長石・石英を多く含む	良	外 灰黄褐色 内 灰黄褐色	外 ナデ 内 ナデ	無文土器
61-6	縄文土器	深鉢 口径(25.8)	—	1mm前後の長石・石英を多く含む	良	外 明褐色 内 にぶい淡褐色	外 春日集麻 内 ナデ	
61-7	縄文土器	深鉢	—	0.5mmの長石・石英を含む	良	外 開灰色 内 開灰色	外 ケズリ 内 ナデ	
61-8	縄文土器	深鉢	—	1mm前後の長石・石英を含む	良	外 黑褐色 内 黑褐色	外 ミガキ 内 ミガキ	
61-9	縄文土器 (口縁部)	—	—	1mm前後の長石・石英を多く含む	良	外 にぶい褐色～黒褐色 内 にぶい褐色～黒褐色	外 春日集麻 内 ナデ	安田文土器 外面 複付着
61-10	縄文土器	深鉢 直径(10.0)	—	1mm前後の長石・石英を多く含む	良	外 粘性 内 開灰色	外 ナデ 内 ナデ	
61-11	縄文土器 (底部)	—	—	1～2mm前後の砂粒と微細砂粒を含む	良	外 粘性 内 灰黄色	外 ナデ 内 ナデ	

## 土製品

標図番号	種類	法 量(cm・g)	胎 土	色 調	調整・手法の特徴	備 考
49-1	土玉	長さ 2.5 幅大径 3.0 孔径 0.8 重さ 19.28	微砂粒を含む	灰黄色	手づくね	

## 石 器

標図番号	種類	法 量(cm・g)	石 材	備 考
61-12	不明	縦 14.2 最大幅 7.9 厚 2.3 重 333.30	不明	

## 木製品

標図番号	分類群	器種名	器種細分名	法 量(cm・g)	備 考
42-14				残存長 2.0 幅 2.4 厚 1.1	
50-2	農具			残存長 24.8 幅 12.6 厚 1.2	
50-3				全長 15.0 幅 3.0 厚 1.5	
50-4				残存長 12.8 幅 3.0 厚 1.7	段有り
50-5				残存長 36.2 残存幅 4.1 厚 2.2	
50-6				残存長 44.3 幅 3.9 厚 2.2	
52-1	農具	組み合わせ式鋤	把手	長さ 14.2 φ 4.4	孔径 1.5 × 4.5cm、把手に柄が一部残る
52-2	農具	曲柄叉鍬		全長 48.2 刃部最大幅 11.9 厚 1.2	
52-3	農具	曲柄平鍬		残存長 46.0 刃部最大幅 12.4 厚 1.2	
52-4	農具	田下鍬	足板	横幅 43.2 高さ 8.3 厚 1.5	孔有り、孔径 2.0 × 5.0cm
52-5	農具	田下鍬	大足	横幅 54.2 高さ 4.0 厚 1.3	
52-6	農具	田下鍬	棹	残存長 15.2 高さ 4.4 厚 2.9	孔有り、孔径 1.6 × 2.5cm
52-7				残存長 21.5 幅 2.8 厚 1.4	

## 木製品

標図番号	分類番	器種名	器種細分名	法 量 (cm・g)	備 考
52-8				残存長 19.8 幅 2.0 厚 1.4	
52-9	農具	田下鉢	大足	残存長 36.5 幅 2.5 厚 1.2	
52-10	農具	田下鉢	大足	残存長 17.4 幅 2.5 厚 1.4	
52-11	農具	木鍬		全長 16.0 最大φ 7.3 厚 5.9	
53-1				残存長 21.6 幅 7.3 厚 1.2	
53-2	容器	曲物	底板	残存長 25.3 幅 8.0 厚 0.5	
53-3	容器	曲物	底板か	残存長 13.0 幅 4.0 厚 0.5	
53-4				残存長 59.8 幅 5.6 厚 1.0	
53-5	容器か	盤		残存長 43.6 残存幅 43.6 厚 2.3	
53-6	雜具	邵材		全長 47.2 幅 14.8 厚 3.0	孔有り、孔径 5.3 × 3.5, 3.4 × 3.9cm
53-7	祭祀具	倒形		残存長 22.6 最大幅 5.5 厚 1.4	
53-8		邵材		残存長 7.1 残存幅 5.5 厚 2.3	孔有り、孔径 1.3 × 1.0cm
53-9				残存長 30.4 幅 1.2 厚 1.1	
53-10				残存長 12.2 幅 2.4 厚 1.2	
53-11				残存長 45.0 幅 3.9 厚 1.4	
54-1				全長 3.2 幅 1.5 厚 1.4	孔有り、孔径 0.7cm
54-2				全長 7.0 幅 4.0 φ 3.4	孔有り、孔径 1.5cm
54-3				残存長 8.5 幅 4.4 厚 4.6	
54-4				全長 31.1 幅 2.2 ~ 3.0 厚 1.5	
54-5				残存長 22.3 残存幅 3.3 厚 1.1	
54-6				残存長 24.2 幅 5.6 厚 2.8	
54-7				残存長 53.5 幅 3.5 厚 1.8	
54-8				残存長 65.0 幅 8.7 厚 8.4	段有り
54-9	棒			残存長 64.5 幅 3.5 厚 2.2	
54-10				全長 56.4 幅 1.6 厚 1.5	
54-11	角木			残存長 36.7 幅 4.4 厚 2.0	
54-12				残存長 43.2 幅 11.9 厚 1.5	ヤリガンナ加工
55-1				残存長 84.5 幅 10.6 厚 1.9	
55-2				残存長 106.5 残存幅 24 厚 5.0	孔有り、孔径 5.5 × 5.0cm、片面ヤリガンナ加工
57-2	建築邵材	杭		残存長 42.6 幅 4.5 厚 3.8	

## 第6章 総括

本書では新庄地区農地中間管理機構関連農地整備事業に伴う5遺跡の発掘調査の内、3遺跡（新庄寺ノ前遺跡、本庄川流域条里制遺跡、黒添遺跡）について調査成果の報告を行った。以下では、3遺跡の成果について再度まとめて総括とする。

### 1. 本庄川流域条里制遺跡

本庄川扇状地にみられる、古代から継承されたと考えられている条里制の遺構確認を試みたところ、字「寺ノ前」の西の坪境から10m内側に入った所（T-1）で2時期の畔が同じ場所で造り変えられていた。最下層の時期は中世以降と判断され、地割の継承状況を窺うことができた。また、「相ヶ坪」の北の坪境、大畦畔推定地（T-2）でも3時期の畔が同じ場所で造り変えられており、畔の幅については南辺が削平されていたので大畦畔にふさわしい幅が存在した可能性を残すものであった。時期については、下から2番目の層が17世紀前半以降であるが、最下層についてはさらに古い時期である。「相ヶ坪」の東（T-3）と南（T-4）の坪境では大畦畔の痕跡は確認できなかったが、坪の内側で基盤層に段をつけて平坦面を造成した痕跡が確認でき、T-3の最下層は中世後半期以降、T-4の最下層は近世初頭以降であることを確認した。以上のことから、基本的には中世から近世初頭に現代に引き継がれる地割が構築されたことが窺える。さらにT-2では古代条里制の大畦畔推定地とほぼ同じ場所で繰り返し畦畔が造り変えられていることから、古代から引き継がれた条里制地割が踏襲されてきた可能性は高いと考えられる。

また、本遺跡では基盤層直上から縄文時代後期後葉～晩期の土器が出土している。深鉢の比較的大き目の破片であることから、近い場所に縄文時代の遺跡が存在することが窺われた。

### 2. 新庄寺ノ前遺跡

本庄川扇状地の内でも南東寄りの嵩山山麓付近に位置する。確実な遺構は検出されなかったが、開発深度より下を掘り切っていない自然流路2本（NRO1、NRO2）が存在し、NRO2の堆積土について珪酸体分析を実施した結果、涼冷な縄文時代の流路の可能性が高いとの報告を得た。

基本的に基盤層の上には縄文時代～中世の遺物包含層2層（遺物包含層上層、遺物包含層下層）が堆積しているのだが、基盤層上面から縄文土器が集中して出土したことから、壁面では観察できない縄文時代の包含層が所々に薄く残存するものと推察され、NRO1はこの包含層と関連するものの可能性が考えられる。中世の遺物包含層2層は同じ時期の遺物が出土する層で、遺物包含層上層より遺物包含層下層の方が遺物の出土量が多い印象を受けた。遺物包含層下層について珪酸体分析を行った結果、イネの花粉が検出されたことから、2時期の耕作により層が分かれたものと思われる。

遺跡の性格については、中世の遺物包含層上、下層から12世紀の白磁や多数の土師器が出土したこと、地名が大字「寺ノ前」であることから、正確な場所は分からないものの、この遺跡より高所の近い場所に12世紀頃に寺院が存在していて、そこの遺物が流れ込んだ状況と考えられる。12世紀の白磁は比較的多く出土するものであるが、寺院跡からの出土品にふさわしいものである。

### 3. 黒添遺跡

本庄川扇状地の扇央に近い場所に位置している。

遺構としては、基盤面で縄文時代中期末の堅果類貯蔵穴 (SK01)1 基が検出された。坑内にはどんぐりが散在して出土したが、浅いことから削平を受けたものと考えられる。その上には水の作用により上流から流されてきた礫を多く含む土層が堆積し、その中から縄文時代後期初頭～晩期、弥生時代後期の土器の小片が出土した。本遺跡の上流に存在していたであろう当該期の遺跡にあったものが、土石流によって流されてきた状況と思われる。

その後、古墳時代後期には水田層とまとまった木製農工具の出土から、当地で稲作が行われていたことが分かった。木製紡織具なども出土しており、近い場所に集落の存在も想定される。今日に続く景観はこの時期に成立したものと思われる。

### 4. まとめ

本庄川扇状地は斜度の高い扇状地形で、特に扇央付近は土石流の影響を受けやすいに場所にあたる。黒添遺跡はまさにそのような場所に位置しており、縄文時代中期末から古墳時代中期頃までの遺物を含む土石流の堆積層が確認され、上流では繰り返し土地利用が行われていたことが窺えた。その後、上層で木製農耕具がまとまって出土したこと、水田層が検出されたことから、本遺跡が安定した水田として活用された時期は古墳時代後期のことであり、紡織具も出土したことから近くには居住地も存在したものと推察される。

その後、古代には本庄川扇状地に条里制が敷かれたと考えられており、方形の整然とした地割は現代にも残されている。条里制遺構について本庄川流域条里制遺跡で調査を行ったところ、2箇所で畦畔の踏襲が確認されたほか、農地造成の痕跡も観察された。時期については、中世以降と近世初頭以降の造作であることが分かり、そのころに構築された遺構が現代まで引き継がれていることが明らかになった。古代条里制に直接つながる遺構は検出できなかったものの、坪境にあたる場所で畦畔が繰り返し改修されていることから、古代条里制の地割が踏襲されている可能性は高いと思われる。

寺の前遺跡では中世前半期の厚い包含層が水平に堆積しており、同時期の包含層が2層に分層されたこと、イネの花粉が検出されたことから、包含層が2時期の水田として利用されたものと解釈できた。包含層から出土した遺物は12世紀頃の中世土師器を中心で白磁片も出土していることから、字名にあるとおり本遺跡近くの高い場所に当該期の寺院が存在していた可能性が考えられる。

このほか、3遺跡に共通する新たな知見としては縄文土器の出土がある。本庄川扇状地周辺ではこれまで縄文時代の遺跡がほとんど知られていなかったのだが、黒添遺跡で縄文時代中期末の堅果類貯蔵穴 (SK01)1 基が検出されたほか、3遺跡の全てで縄文土器の出土が確認され、その時期については縄文時代中期末～晩期であることを確認した。扇状地形であることから、今回の圃場の調査の下にもさらに古い時期の遺跡が埋もれている可能性が考えられる。